

なな      こし      やま      こ      ふん  
七   興   山   古   墳

平成22年度緊急雇用創出基金事業に係わる  
埋蔵文化財発掘調査報告書

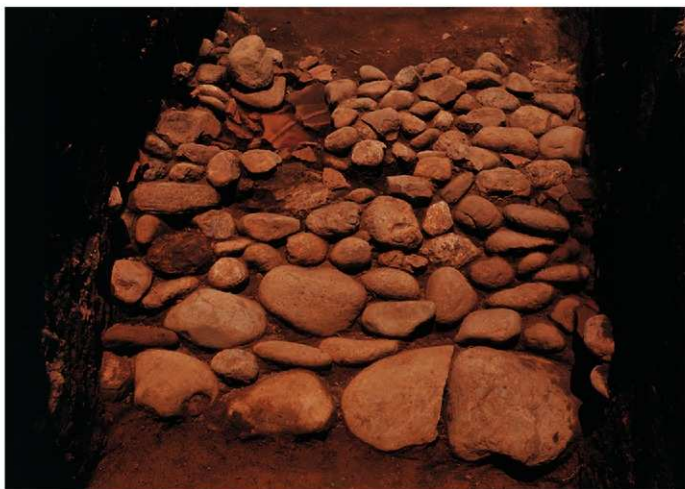
2010

群馬県教育委員会  
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団





1 1972年発掘調査時の七興山古墳



2 Cトレンチ中堤南縁の石積検出状況



1 鞆を背負う男子人物埴輪 (144 - 正面)



2 鞆を背負う男子人物埴輪 (144 - 背面)



3 女子人物埴輪 (146)



4 器財埴輪 (178)

## 序

本書は、藤岡市上落合に所在する史跡七輿山古墳の調査報告書です。本古墳の調査は、群馬県教育委員会により昭和47年3月から4月に実施されたものです。

七輿山古墳は、6世紀前半に築造された古墳で、白石稲荷山古墳や皇子塚古墳、伊勢塚古墳などとともに白石古墳群を代表する古墳の一つです。昭和63年度から平成2年度にかけて藤岡市教育委員会による範囲確認調査を経て、現在は史跡公園として保存整備が進められ、活用が図られています。

今回の調査により、七輿山古墳には墳丘の周囲に内堀、外堀の二重の周堀が巡っていることが初めて明らかにされました。また、試掘坑から出土した埴輪の状況から、内堀、外堀にはさまれた中堤には円筒埴輪だけでなく人物や器財の埴輪が樹立されていたことが想定されます。築造当初は、高崎市に所在する保渡田八幡塚古墳と同様、人物埴輪・動物埴輪の樹立集中区が存在した可能性がうかがわれます。

これらの調査成果は、七輿山古墳の考古学的な位置づけを検討する上で新たな資料を提供することになるとともに、本古墳を含めた白石古墳群の変遷を知る上でも貴重なものになると考えられます。そして、この報告書が群馬県の歴史研究をはじめ、地域の資料として学校教育、郷土学習にも役立てていただけるものと確信いたしております。

最後になりましたが発掘調査から報告書作成にいたるまで、群馬県教育委員会文化財保護課、藤岡市教育委員会からは種々のご指導、ご協力を賜りました。今回、報告書を上梓するにあたり、これらの関係者の皆様に心より感謝の意を表し、序といたします。

平成22年12月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団  
理事長 須田 栄 一



# 例 言

- 1 本書は、周堀部分の範囲確認調査に伴い発掘調査された七輿山古墳の調査報告書である。
- 2 七輿山古墳は、群馬県藤岡市上落合字七輿地内に所在する。今回の調査地は上落合833番、837-2番、857番地である。
- 3 発掘調査は群馬県教育委員会が実施した。調査時の調査期間・体制は次の通りである。

調査期間 昭和47年（1972年）3月21日～昭和47年（1972年）4月21日

調査担当 梅澤重昭

調査参加 森田秀策、原田恒弘、神保佑史、平野進一、佐藤明人、大江正行、星野伸子
- 4 本書作成のための整理作業は、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が、群馬県教育委員会より平成21年度および平成22年度緊急雇用創出基金事業として委託を受け、実施した。整理・報告書の作成期間・体制は次の通りである。

平成21年度

履行期間 平成21年（2009年）10月1日～平成22年（2010年）3月31日

整理期間 平成21年（2009年）10月1日～平成22年（2010年）3月31日

整理担当 徳江秀夫（主席専門員）、遺物写真撮影 佐藤元彦（係長（総括））

平成22年度

履行期間 平成22年（2010年）4月1日～平成23年（2011年）3月31日

整理期間 平成22年（2010年）4月1日～平成23年（2011年）3月31日

整理担当 徳江秀夫（主席専門員）、遺物写真撮影 佐藤元彦（補佐）
- 5 本書作成の担当者は次の通りである。

編集 徳江秀夫（主席専門員）

執筆 大西雅弘（主席専門員）遺構外出土の遺物観察表、左記以外徳江秀夫
- 6 発掘調査および報告書作成には、次の関係機関、諸氏にご助言を得た。記して感謝いたします。

群馬県教育委員会、藤岡市教育委員会、梅澤重昭、志村 哲（藤岡市教育委員会生涯学習課課長）、神保佑史、中里正憲、中島 誠（藤岡市教育委員会文化財保護課資料管理係長）、南雲芳昭（高崎市立宮沢小学校教頭）、土生田純之（専修大学文学部教授）、平野進一（群馬県教育委員会文化財保護課嘱託員）、深澤敦仁（群馬県教育委員会文化財保護課指導主事）、右島和夫（群馬県文化財保護審議委員）、若狭 徹（高崎市教育委員会文化財保護課埋蔵文化財担当係長）（五十音順、敬称略）
- 7 発掘調査の諸資料および出土品は一括して群馬県埋蔵文化財調査センターで保管している。

## 凡 例

- 1 第25図から第27図に示した方位記号は磁北を表している。
- 2 遺構および遺物実測図中の縮尺は、それぞれの図中に表示している。
- 3 挿図および写真図版の原図・原版は以下のとおりである。
  - ・第1図は国土地理院発行の200,000分の1の「宇都宮」、「長野」地勢図を原図として使用している。
  - ・第2図は群馬県農政課土地改良課『土地分類基本調査高崎』付図「地形分類図」を修正して使用している。
  - ・第3図は国土地理院発行の25,000分の1の地形図「高崎」を原図として使用している。
  - ・第4図は国土地理院発行の50,000分の1の地形図「高崎」、「寄居」を原図として使用している。
  - ・第5図は藤岡市役所「藤岡都市計画区域図」8・13を使用している。
  - ・第6図は藤岡市役所「藤岡都市計画区域図」8を使用している。
  - ・遺構図面中の第8図から第13図は藤岡市教育委員会1990『七興山古墳範囲確認調査報告書』V、1991『七興山古墳範囲確認調査報告書』VI、1992『七興山古墳範囲確認調査報告書』VII中の掲載図の一部を転載して使用した。
  - ・出土埴輪・土器実測図中の第15図から第21図は藤岡市教育委員会藤岡市教育委員会1990『七興山古墳範囲確認調査報告書』V、1991『七興山古墳範囲確認調査報告書』VI、1992『七興山古墳範囲確認調査報告書』VII中の掲載図の一部を転載して使用した。実測図に付いた番号は上記報告書の番号である。
  - ・第22図は梅澤重昭「毛野の前方後円墳の系譜」『第4回東北・関東前方後円墳研究会《シンポジウム》前方後円墳の築造企画発表要旨資料』から転載して使用した。
  - ・第23図は飯塚卓二1986「埼玉古墳群の出現と毛野地域政権」『研究紀要』第3号群馬県埋蔵文化財調査事業団から転載して使用した。
  - ・第49図は藤岡市教育委員会1992『七興山古墳範囲確認調査報告書』VIIから転載、一部修正して使用した。
  - ・拓本を用いた埴輪の実測図面作成にあたっては円筒埴輪は中央に断面を置き、その左側に表面の、右側に裏面を置いている。断面は右側が表面である。形象埴輪の破片の作図についても表裏面、断面の位置関係は円筒埴輪と同様であるが、断面は左側が表面である。
  - ・第52図の1は高崎市教育委員会2009『井出二子山古墳』より、2はかみつけの里博物館2000『はにわ群像を読み解く』より、3は車崎正彦2008「東国の埴輪のまつり」『埴輪群像の考古学』より、4は群馬県埋蔵文化財調査事業団1998『綿貫観音山古墳1』より転載、あるいは一部修正して使用した。
  - ・遺構写真のPL9からPL11については藤岡市教育委員会所の許可の元、所蔵資料を複写転載した。
- 4 遺物観察表に係わる凡例については遺物観察表中扉の裏面に記載した。



# 目 次

口絵

序

例言

凡例

挿図目次

表目次

文中写真目次

写真図版目次

抄録

## 第1章 発掘調査と遺跡の概要

第1節 発掘調査に至る経緯…………… 1

### 第2節 古墳の立地と環境

1 古墳の位置と地形…………… 2

2 周辺の遺跡…………… 3

### 第3節 発掘調査の方法と経過

1 調査の方法と経過…………… 12

2 整理作業の方法と経過…………… 13

### 第4節 七興山古墳の現状と既往の調査と研究成果

1 七興山古墳の現状…………… 14

2 既往の発掘調査…………… 14

3 既往の研究成果…………… 30

## 第2章 発掘調査の記録

### 第1節 調査の概要

1 検出された遺構と遺物の概要…………… 32

2 基本土層…………… 32

### 第2節 検出された遺構と遺物

#### 1 調査された遺構

(1) Aトレンチの調査…………… 32

(2) Bトレンチの調査…………… 34

(3) Cトレンチの調査…………… 38

## 2 出土した遺物

(1) 円筒埴輪…………… 38

(2) 形象埴輪…………… 51

(3) 遺構外出土の遺物…………… 63

## 第3章 調査成果と整理のまとめ

第1節 調査の成果…………… 65

第2節 出土埴輪と七興山古墳の位置付け…………… 68

参考文献…………… 73

遺物観察表…………… 75

写真図版

## 挿図目次

第1図	七興山古墳の位置	1	第26図	Bトレンチ平・断面図	36
第2図	七興山古墳周辺の地形	2	第27図	Cトレンチ平・断面図	37
第3図	七興山古墳周辺の古墳分布	6	第28図	円筒埴輪各部位の名称	39
第4図	七興山古墳周辺の遺跡分布	7	第29図	出土円筒埴輪(1)	41
第5図	七興山古墳周辺の現況(1)	10	第30図	出土円筒埴輪(2)	42
第6図	七興山古墳周辺の現況(2)	11	第31図	出土円筒埴輪(3)	43
第7図	『史蹟名勝天然記念物調査報告書』第1輯掲載の七興山古墳墳丘図	14	第32図	出土円筒埴輪(4)	44
第8図	調査トレンチと藤岡市教育委員会のトレンチの関係	16	第33図	出土円筒埴輪(5)	45
第9図	藤岡市教育委員会調査の1A・2Aトレンチ平・断面図	17	第34図	出土円筒埴輪(6)	46
第10図	藤岡市教育委員会調査の7Aトレンチ平・断面図	18	第35図	出土円筒埴輪(7)	47
第11図	藤岡市教育委員会調査の8トレンチ平・断面図	19	第36図	出土円筒埴輪(8)	48
第12図	藤岡市教育委員会調査の12トレンチ平・断面図	20	第37図	出土円筒埴輪(9)	49
第13図	七興山古墳兆域模式図	20	第38図	出土円筒埴輪(10)	50
第14図	藤岡市教育委員会出土円筒埴輪の分類模式図	22	第39図	出土形象埴輪(1)	52
第15図	藤岡市教育委員会調査時出土円筒埴輪(1)	23	第40図	出土形象埴輪(2)	53
第16図	藤岡市教育委員会調査時出土円筒埴輪(2)	24	第41図	出土形象埴輪(3)	54
第17図	藤岡市教育委員会調査時出土円筒埴輪(3)	25	第42図	出土形象埴輪(4)	55
第18図	藤岡市教育委員会調査時出土円筒埴輪(4)	26	第43図	出土形象埴輪(5)	58
第19図	藤岡市教育委員会調査時出土円筒埴輪(5)	27	第44図	出土形象埴輪(6)	60
第20図	藤岡市教育委員会調査時出土円筒埴輪(6)	28	第45図	出土形象埴輪(7)	61
第21図	藤岡市教育委員会調査時出土形象埴輪・土器	29	第46図	出土形象埴輪(8)	62
第22図	梅澤重昭氏作成七興山古墳墳丘規格図	31	第47図	出土形象埴輪(9)	63
第23図	飯塚卓二氏作成七興山古墳墳丘規格図	31	第48図	遺構外出土の遺物	64
第24図	七興山古墳墳丘図と調査トレンチの位置	33	第49図	七興山古墳形象埴輪出土トレンチ	66
第25図	Aトレンチ平・断面図	35	第50図	七興山古墳出土の主な形象埴輪	67
			第51図	6世紀前半の群馬県内出土円筒埴輪	69
			第52図	形象埴輪配列位置の変遷	71

## 表目次

第1表	七興山古墳周辺の遺跡一覧	8
-----	--------------	---

# 文中写真目次

写真1 Bトレンチ土層断面 ..... 36      写真2 中堤外縁石検出状況 ..... 37

## 写真図版目次

- |       |                          |        |                          |
|-------|--------------------------|--------|--------------------------|
| PL1-1 | 七興山古墳の位置と周辺の地形(空中から)     | 3      | Cトレンチ石積検出状況(南から)         |
| PL2-1 | 七興山古墳と周辺の古墳(空中から)        | 4      | Cトレンチ外堀検出状況(北東から)        |
| PL3-1 | 七興山古墳全景(空中から)            | 5      | Cトレンチ外堀外縁検出状況(北から)       |
| PL4-1 | 七興山古墳の位置と周辺の地形(北から)      | 6      | Cトレンチ掘削地点の現況(2010年、北西から) |
| 2     | 調査時の七興山古墳(南東から)          | PL10-1 | 1 A・1 Bトレンチ全景(北から)       |
| PL5-1 | 調査時の七興山古墳(北から)           | 2      | 1 Bトレンチ全景(北から)           |
| 2     | 調査時の七興山古墳(南西から)          | 3      | 2 Aトレンチ遺物出土状況(南から)       |
| PL6-1 | 後円部墳丘上からAトレンチを望む(西から)    | 4      | 2 Aトレンチ埴輪列・葺石検出状況(南東から)  |
| 2     | Aトレンチ中堤から外堀検出状況(西から)     | 5      | 2 Bトレンチ全景(南から)           |
| 3     | Aトレンチ中堤から外堀検出状況(東から)     | PL11-1 | 4 Bトレンチ遺物出土状況(北から)       |
| 4     | Aトレンチ外堀土層断面(南東から)        | 2      | 12トレンチ全景(南から)            |
| 5     | Aトレンチ掘削地点の現況(2010年、西から)  | 3      | 12トレンチ中堤(西から)            |
| PL7-1 | Aトレンチ外堀から外堤検出状況(南東から)    | 4      | 8トレンチ全景(北西から)            |
| 2     | Aトレンチ外堀土層断面(南西から)        | 5      | 8トレンチ中堤・葺石(北西から)         |
| 3     | Aトレンチ外堀土層断面(南西から)        | 6      | 8トレンチ外堤検出状況(南東から)        |
| 4     | Aトレンチ外堤以東掘削状況(南西から)      | PL12-  | 円筒埴輪(1)                  |
| 5     | Aトレンチ外堀以東(3区)掘削状況(東から)   | PL13-  | 円筒埴輪(2)                  |
| 6     | Aトレンチ外堀以東(3区)土層断面(南西から)  | PL14-  | 円筒埴輪(3)                  |
| 7     | Aトレンチ外堀以東(3区)掘削状況(南西から)  | PL15-  | 円筒埴輪(4)                  |
| 8     | Aトレンチ外堀以東(4区)土層断面(南西から)  | PL16-  | 円筒埴輪(5)                  |
| PL8-1 | 後円部墳丘上からBトレンチを望む(北西から)   | PL17-  | 円筒埴輪(6)                  |
| 2     | Bトレンチ掘削地点の現況(2010年、北西から) | PL18-  | 円筒埴輪(7)                  |
| 3     | Bトレンチ外堀土層断面(南東から)        | PL19-  | 円筒埴輪(8)                  |
| 4     | Bトレンチ外堀から中堤検出状況(南東から)    | PL20-  | 形象埴輪(1)                  |
| 5     | Bトレンチ外堀外縁検出状況(北西から)      | PL21-  | 形象埴輪(2)                  |
| 6     | Bトレンチ埴輪出土状況(東から)         | PL22-  | 形象埴輪(3)                  |
| PL9-1 | 南側くびれ部墳丘上からCトレンチを望む(北から) | PL23-  | 形象埴輪(4)                  |
| 2     | Cトレンチ中堤外縁石積検出状況(南から)     | PL24-  | 形象埴輪(5)・遺構外出土の遺物         |

## 抄 録

書名ふりがな	ななこしやまこふん
書名	七興山古墳
副書名	平成22年度緊急雇用創出基金事業に係わる埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	511
編著者名	徳江秀夫
編集機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20101224
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北橋町下箱田784-2
遺跡名ふりがな	ななこしやまこふん
遺跡名	七興山古墳
所在地ふりがな	ぐんまけんふじおかしかみおちあい
遺跡所在地	群馬県藤岡市上落合833/837-2/851
市町村コード	10209
遺跡番号	古007
北緯（日本測地系）	361530
東経（日本測地系）	1390234
北緯（世界測地系）	361541
東経（世界測地系）	1390222
調査期間	19720321-19720421
調査面積	105
調査原因	史跡指定を見通した周堀部分の範囲確認調査
種別	墓
主な時代	古墳
遺跡概要	墓一古墳一古墳1一円筒埴輪＋形象埴輪
特記事項	墳丘146mの前方後円墳の周堀部分の調査。内堀の外側に中堤、外堀が巡ることが確認された。
(要約)	七興山古墳は藤岡市上落合の鮎川左岸段丘上に位置する墳丘長146mを測る前方後円墳で、白石古墳群の中核をなす古墳として著名である。周囲には白石稲荷山古墳や白石二子山古墳をはじめとした前方後円墳、直径30m規模の皇子塚古墳、平井地区1号古墳、伊勢塚古墳、直径20m規模の円墳など5世紀前半から7世紀にいたる間の古墳が分布している。本報告では中堤に樹立されていたと考えられる人物埴輪、器財埴輪基部を資料化した。

## 第1章 発掘調査と遺跡の概要

### 第1節 発掘調査に至る経緯

七輿山古墳は、群馬県藤岡市上落合字七輿に位置する墳丘長146mの前方後円墳である。

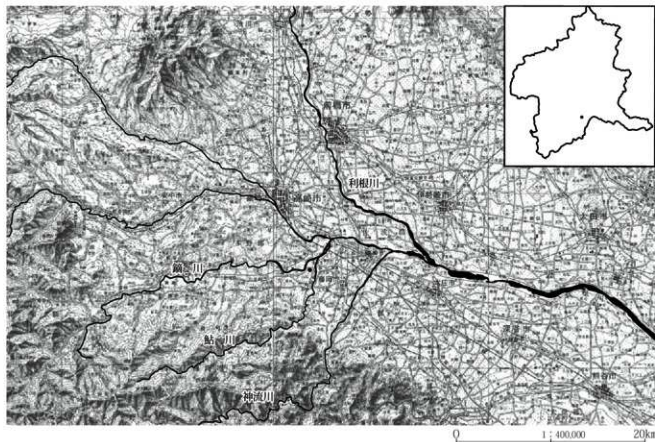
その七輿山古墳は、1927（昭和2）年6月14日に国史跡の指定を受けている。この時点における指定範囲は墳丘部分だけであった。1915（昭和4）年刊行の『群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告書第一輯』にはその当時の墳丘の状況が図化、報告されている。墳丘南側の周堀の一部は水田として利用されていたようである。

群馬県教育委員会社会教育課文化財保護係により七輿山古墳の調査が実施されたのは1972（昭和47）年3月から4月にかけてである。調査時に撮影された墳丘の状況を見ると地元の人々の努力により墳丘の保存整備が続けられ、前方後円墳としての景観が良好な状態で、長期間にわたり維持されて来たことがわかる。

1971（昭和46）年度の文化財保護係は、5月に安中市松井田町暮井遺跡の調査を、7月から8月にかけて安中市松井田町愛宕山遺跡の調査を実施している。また、1969（昭和44）年度から3年計画で継続して実施されてきた上野国分尼寺跡推定地の発掘調査も予定されていた。

さらに、これらの発掘調査と平行する形で6月から関東道地域埋蔵文化財分布調査が実施され、勢多郡北桶村（現渋川市）から利根郡新治村（現みなかみ町）の間の埋蔵文化財包蔵地の確認が行われている。

上記の業務とともに、文化財保護係では群馬県内の重要遺跡選定の一環として県内各地点で調査を実施していた。みなかみ町八束脛洞窟、渋川市水沢庵寺などの遺跡が対象となっている。古墳については主要古墳の墳丘測量、横穴式石室の実測作業が行われている。この時調査の対象となった古墳は高崎市保渡田古墳群の井出二子山古墳・保渡田薬師塚古墳、三島塚古墳、浅間山古墳、愚行寺裏山古墳、藤岡市白石稲荷山古墳、伊勢塚古墳、太



第1図 七輿山古墳の位置

田市寺山古墳などである。そして、七興山古墳の発掘調査もその一環であった。1972（昭和47）年3月、本報告の調査直前には航空写真撮影、ならびに写真測量を実施している。

本古墳の調査が継続して行われていた1972（昭和47）年4月、文化財保護係は文化財保護室に昇格する。更にその翌年、1973（昭和48）年4月には文化財保護課が発足し、関越自動車道や上越新幹線関係の調査が本格化して行くことになる。

なお、七興山古墳の調査とほぼ同時期、1972（昭和47）年3月には藤岡市白石猿田1519-2において藤岡市教育委員会により、窯址、製鉄址の調査が実施されている。猿田埴輪窯址の調査である。

七興山古墳は、今回報告する調査の後、1988（昭和63）年度から1990（平成2）年度に藤岡市教育委員会による

範囲確認調査が行われ、この結果を基に、平成8年9月26日に史跡の追加指定が行われている。

## 第2節 古墳の立地と環境

### 1 古墳の位置と地形

七興山古墳の所在する藤岡市上落合は藤岡市の北西寄りに位置し、最寄りの公共交通機関としてはJR八高線の群馬藤岡駅から西北西に約4.1km、上信電鉄山名駅から南に1.7kmの距離のところにある。七興山古墳の位置は、東経139度2分22秒、北緯36度15分41秒を測る。古墳の東側には鮎川に沿って南北方向に県道金井倉賀野停車場線が伸び、日野地区の山間地と平地部を結んでいる。また、古墳の北側には美土里・小野地区と高崎市吉井町を繋ぎ甘楽方面へ抜ける県道下栗須馬庭停車場線が通過



0 1:50,000 2km

第2図 七興山古墳周辺の地形

している。

藤岡市は、群馬県の南西部にあたる。長く第一次産業を経済活動の基幹とする地域であったが、山間部と平地部の接する物資集散地としての役割も果たしてきた地域でもある。近年では関越自動車道、上信越自動車道の開通、国道254号の整備も進み、関東地方と上信越地域を結ぶ基点として、工業生産・商業・流通活動の比重も高まってきている。

市域の東側は神流川をはさんで埼玉県と県境を接している。南側は関東山地の山々が続く神流町と、西側は牛伏山から続く山地とその東端にあたる丘陵地形の高崎市吉井町と、北側は鑄川、烏川をはさんで高崎市の南八幡地区とそれぞれ接している。

藤岡市域北部の地形は鑄川左岸では美土里・平井地区から日野地区に延びる丘陵地帯と鑄川によって形成された河岸段丘、藤岡扇状地（藤岡台地）の西側扇側部分に大別される。鑄川右岸は鑄川と神流川に挟まれ、藤岡市街地、美土里地区ののる藤岡扇状地と、その北側に広がる小野・神流地区の後背湿地に分類される。

利根川の第3次河川である鑄川は、本古墳の北東方向、鑄川との合流点より上流では幅2.5kmの河谷が形成され、3段の河岸段丘が発達している。段丘の区分、呼称については研究者の認識により異なるが、『土地分類基本調査』では上段から、上位段丘面、下位段丘面、最下位段丘面あるいは河川低地と呼称されている。

上位段丘面は鑄川右岸、鑄川から見るとその左岸にあたり、白石稲荷山古墳をはじめとする白石古墳群の稲荷山支群が形成されている段丘である。標高は110mから120mほどで、東側は猿田川の流路に沿って延びる沖積地により画されている。北側は下位段丘面との間に高さ11mの崖線が形成されている。この段丘面上は水利が悪く、果樹園芸、畑作地として利用されている。

下位段丘面は鑄川の左右両岸に発達しているが、右岸は本報告の七興山古墳をはじめとした白石古墳群の七興山支群の形成されている段丘面である。標高は93m前後にある。一帯は宅地、畑作地となっているが、七興山古墳の前方部西側には上位段丘との崖線に沿うように南西から北東方向に延びてきた幅25mほどの狭い開析谷の末端が続き、この部分は水田として利用されている。

下位段丘面の北側には上落合岡遺跡や上落合岡B遺跡

の一部が検出された後背湿地が広がる。下位段丘面と後背湿地の比高は約6mである。上落合岡B遺跡の調査においては浅間B軽石、榛名山二ツ岳降下火山灰、浅間C軽石の堆積が確認されている。現在は水田として利用されている。

最下位段丘面は鑄川の流路に沿ってわずかに認められる段丘面である。この段丘面の南縁に伊勢塚古墳が築造されている。この段丘面と鑄川の河床との比高は約6mである。

鑄川は、関東山地の北の谷を水源とし山間地を蛇行して下った後、西平井・緑地地区に至り、現在は自らが形成した藤岡扇状地を浸食して北流し、七興山古墳の北東で鑄川と合流している。鑄川左岸の扇状地上には白石古墳群の猿田支群、下郷支群が形成されている。

藤岡扇状地の西側扇側部と上位段丘面との間には鑄川の支流である猿田川が形成した幅100mほどの開析谷が延びている。喜蔵塚古墳や境塚古墳はこの谷を望む段丘面上に築造されている。

鑄川から延びる開析谷は緑地地区にも見られ、谷頭の一つが竹沼である。また、別の支谷が西平井地区方面に延びている。この谷部分からは浅間B軽石下の水田が検出され、周囲の段丘上には縄文時代以降平安時代にいたる集落が多数形成されている。

調査時の七興山古墳周辺の地目について見ると、早くに墳丘部分が指定を受けたことも関係して宅地として利用されているのは後円部東側の数軒だけで、その他には後円部北側に建物1軒が見られただけである。

調査地点の地目はAトレンチ、Bトレンチが畑、Cトレンチが桑畑であったが、調査時の遠景写真からは古墳の周囲には菜園が広がっていたことがわかる。また、調査直前に撮影された空中写真からは後円部北側の内堀部分が水田となっていたことが確認できる。

## 2 周辺の遺跡

ここでは七興山古墳周辺の遺跡の分布について、古墳や古墳時代の集落の動向を中心に記述した。

古墳時代以外の遺跡の動向についてその概要を見てみると、藤岡市内における旧石器時代遺跡の分布は全体的に希薄である。七興山古墳の周辺では白石平原遺跡でA・T下位のブロック4群の調査が行われている。遺物の出

土としては上落合上野B遺跡の風倒木内からサイドスクレーパーと細石刃石核剥片が、三ツ木東原遺跡からチャート製の槍先形尖頭器が、白石中郷遺跡から黒曜石製の槍先形尖頭器が出土している。

縄文時代の遺跡として七興山古墳に近接する上落合上野B遺跡において、中期加曾利E3式期の竪穴住居2軒、配石遺構をはじめ、加曾利E4式期と称名寺式I式期の住居と土坑、堀之内式期の土坑が検出されている。E3・E4式期の住居は柄鏡形敷石住居である。

鮎川左岸では台地上を中心に前期から中期にいたる多数の集落が検出されている。前期の竪穴住居は猿田遺跡、滝遺跡、白石根岸遺跡で、中期の住居は白石大御堂遺跡、薬師原遺跡、竹沼遺跡から検出されている。白石北原遺跡では前期から後期の住居が10軒検出されている。大御堂遺跡からは晩期の土坑状遺構や土器埋遺構が検出されている。

鮎川右岸では中期末から後期初頭の柄鏡形敷石住居である中大塚縄文時代敷石住居が早くから周知されている。この他に自然堤防上から扇状地末端にかけて滝下遺跡で前期の竪穴住居が、上栗須寺前遺跡で後期の住居が検出されている。

七興山古墳周辺においては弥生時代の遺跡は稀薄である。竪穴住居は上落合同遺跡で2軒が検出され、その内の1軒は中期前半から中頃に位置づけられる。この他に遠賀川式土器が上落合同遺跡、白石大御堂遺跡から、中期の土器が大御堂遺跡や緑埜水押遺跡や緑埜上郷遺跡から出土している。滝遺跡からは後期の土器が出土している。高崎市吉井町域の黒熊栗崎遺跡においては後期の集落が検出されているが、藤岡市域において同時期の竪穴住居は確認されていない。

古墳時代の古墳および集落については後述する。

奈良・平安時代の集落としては、上落合同遺跡、上落合同B遺跡、上落合上野遺跡がある。古墳時代後期から継続した集落は規模を縮小傾向が見られる。

鮎川左岸では東原II遺跡、白石上郷遺跡、白石大御堂遺跡、白石根岸遺跡などの調査事例が知られている。白石北原遺跡では掘立柱建物検出されている。上流では大工ヶ谷遺跡で竪穴住居が検出されている。

猿田川沿いの猿田水田址遺跡は平安時代、浅間B軽石下から水田が検出されている。緑埜遺跡群や緑埜上郷遺

跡においても浅間B軽石下の水田・畠が検出されている。白石根岸遺跡においても水田を検出している。

また、猿田川の流路を遡った高崎市吉井町黒熊地区では、上信越自動車道の建設に伴い黒熊栗崎遺跡、黒熊八幡遺跡の調査が行われ、上位段丘面上に形成された奈良・平安時代の集落が検出されている。さらに西側には9世紀中頃から11世紀の間継続した寺院遺構を検出した黒熊中西遺跡がある。

鮎川右岸は自然堤防に接した地点を中心に道下B遺跡、滝前D遺跡、滝前E遺跡、稲荷屋敷遺跡などで集落の調査が行われている。滝前C遺跡では平安時代の畠を検出している。

須恵器、瓦の生産遺跡、遺構としては竹沼窯址群八幡窯址、同切通窯址が発見されている。図幅外になるが下日野金井窯址群では窯址と鉄精錬遺跡が検出されており、一帯が古代の窯業地帯となっていたことが知られている。

中・近世の遺跡としては白石大御堂遺跡で13世紀中頃に創建され、14世紀代まで継続したと考えられる寺院址の調査が行われた。苑池を伴う構造は浄土教の影響を受けているとされた。

当該地域は15世紀後半になると平井城を拠点とする関東管領上杉氏の支配がおよぶところとなる。図中には示していないが岡の砦、落合の砦、白石の砦などが七興山古墳に近接して存在する。

最後に七興山古墳が築造された6世紀前半の時期の集落の動向、古墳の築造状況について整理してみたい。

古墳時代の集落遺跡の動向について見ると古墳時代前期の住居が検出された遺跡としては上落合同遺跡、上落合上野遺跡がある。上野B遺跡では弥生時代からの過渡期の様相を有する土器を検出した住居が見られた。前期の住居は4軒検出している。下位段丘北側の後背湿地に接して展開する上落合同遺跡および上落合同B遺跡においては西平寄りでは6世紀代から奈良・平安時代にかけての集落が、東平寄りでは古墳時代前期に始まり平安時代まで継続する集落が形成されていた。

鮎川左岸の竹沼遺跡では古墳時代前期に始まり、古墳時代後期、平安時代へと継続する集落が確認されている。

鮎川右岸では調査遺跡は認められない。

中期の集落は鮎川左岸の滝遺跡、猿田遺跡で竪穴住居



が検出されている。ともにその後、後期の古墳が近接して築造されている。上流の薬師原遺跡、緑埜水押遺跡においても住居が検出されている。いずれの遺跡においても多数の住居が検出されることはなく、白石稲荷山古墳や宗永寺裏東塚古墳などの古墳築造状況に見合う集落の様相については不明である。

鮎川右岸では滝前遺跡で中期の方形周溝墓2基が検出されている。

後期の遺跡としては七興山古墳の北側に位置する前述の上落合岡遺跡の他に西側に隣接する上落合上野遺跡をあげることができる。検出された竪穴住居27軒のうちの約半数は6世紀前半から中葉頃の時期が約半数で、6世紀後半から7世紀初頭になると減少傾向にあるという。

鮎川左岸では竹沼遺跡で竪穴住居50軒、滑石製模造品の玉作工房址11軒が検出されている。緑埜上郷遺跡、緑埜鳥遺跡においても住居を検出している。

鮎川右岸では道下B遺跡、滝前遺跡、滝前C遺跡、滝前D遺跡、滝前E遺跡、滝下遺跡、新堀遺跡など近接して分布する遺跡から竪穴住居が検出されている。道下B遺跡では6世紀後半から8世紀初頭まで継続した祭祀遺構が検出されている。土師器・須恵器の杯を中心とした土器集積が認められ、滑石製模造品を伴っていた。

七興山古墳の周辺遺跡における古墳時代の水田や畠などの生産地の動向については不明である。

古墳の分布について藤岡市域全体の概要を述べると神流川左岸と鮎川の流域に大規模な古墳群が形成されている。扇状地内部における古墳分布は極端に稀薄になっている。

藤岡扇状地の東側、神流川左岸には下流から戸塚古墳群、野見塚古墳群、小林古墳群、神田・三本木古墳群が形成されている。この中には前方後円墳も含まれるがその大半は6世紀後半から7世紀の群集墳を構成する小規模円墳である。

戸塚古墳群は円墳を主体とし、下栗須地区を中心に『上毛古墳総覧』に74基が登載されている。稲荷塚古墳は直径20mの円墳で、振文鏡、石製模造品が出土しており、4世紀末から5世紀前半の築造と考えられている。

野見塚古墳群は墳丘長53mの戸塚神社古墳を中心に小林地区の野見周辺に分布する古墳群である。戸塚神社古墳は自然石乱石積の横穴式石室を有する6世紀後半の前

方後円墳である。

小林古墳群は本郷地区を中心に150基ほどが群集していた。堀之内遺跡群の発掘調査では底部穿孔窟を伴う前方後円墳や方形周溝墓など4世紀代の墳墓と6世紀後半から7世紀代の古墳が検出されている。小林C号墳は導入期の横穴式石室を有していた。6世紀後半には墳長57mの前方後円墳諏訪神社古墳や本郷二子山古墳が築造されている。

小林古墳群に隣接する段丘斜面からは本郷埴輪窯跡が検出されている。埴輪窯は2基が調査されているが周辺の観察から南北500mほどの範囲におよんでいるものと考えられている。

小林古墳群の南西、小丘陵上には6世紀後半築造の前方後円墳別所堂山古墳が立地する。

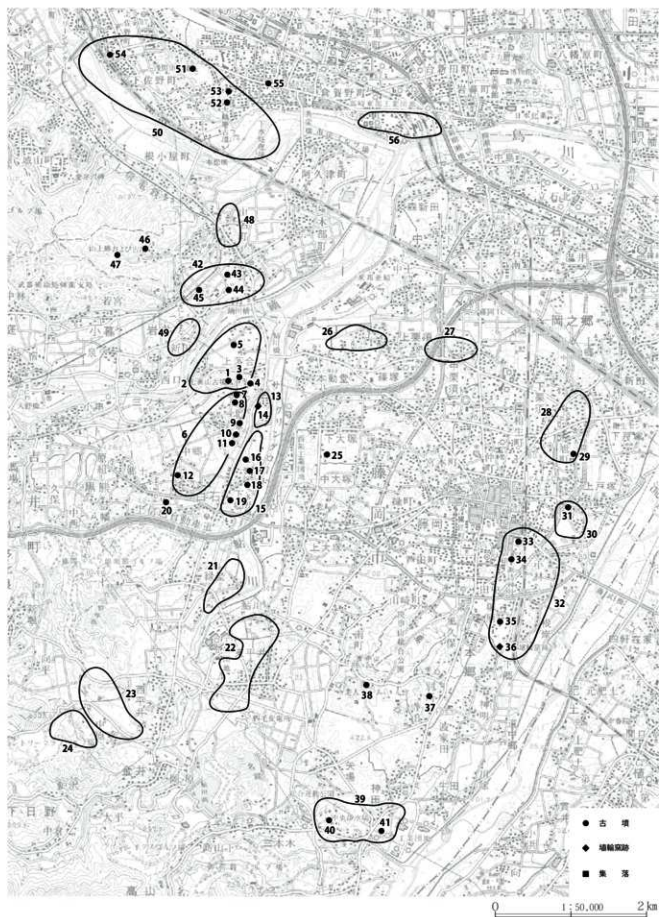
神流川流域の古墳群で最上流域に形成されたのが神田・三本木古墳群である。三本木地区からは三角縁神獣鏡が、神田地区からは内行花文鏡の出土が伝えられているが前期古墳の存在は確定されていない。高橋塚古墳は6世紀後半に築造された墳丘長24mの前方後円墳があるが、その他は中小規模の円墳で横穴式石室を主体部に有するものが主体である。

鮎川右岸には東平井古墳群が形成されている。東平井古墳群は時沢・飛石・塚間・川破の4支群から構成されており、400基弱の古墳が群集している。前方後円墳や埴輪を有する古墳の存在も知られているが主体は7世紀代の円墳である。

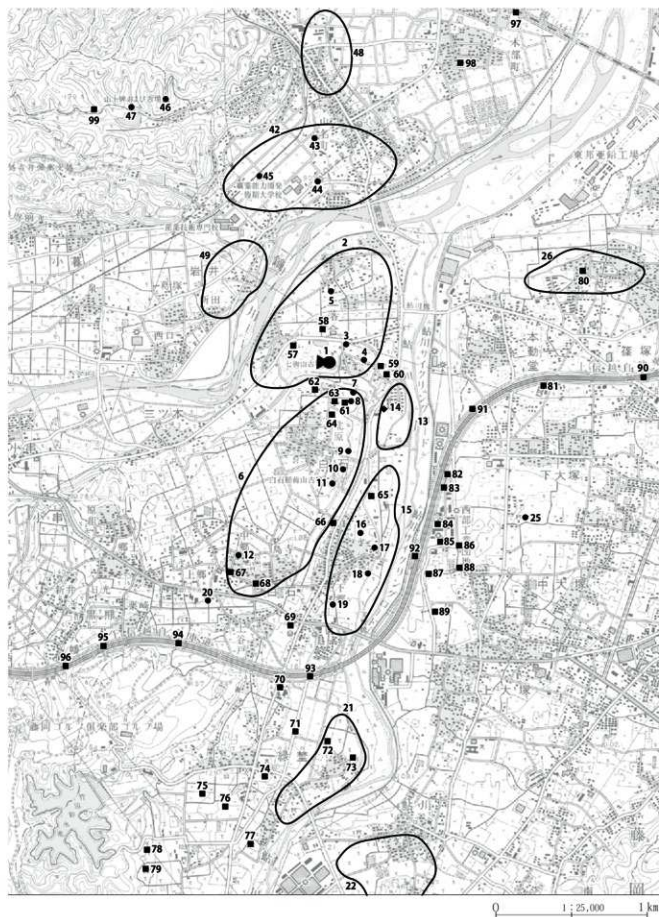
白石古墳群と同じ鮎川左岸では緑埜古墳群が形成されている。この他に鮎川左岸に大平古墳群、金井古墳群が、西平井の丘陵斜面に南坂古墳群や金山下古墳群など7世紀代を中心とした古墳群が形成されている。

藤岡扇状地の扇端部には上栗須地区や篠塚地区に小規模な古墳群が形成されている。中大塚所在の平地神社古墳は6世紀後半に築造された直径33mの円墳で、模倣積の横穴式石室を有する。上栗須遺跡や上栗須寺前遺跡の調査では5世紀後半から6世紀前半の円墳も検出されている。古墳の築造は7世紀代まで継続している。

鏡川の左岸下位段丘面上には山名古墳群が形成されている。山名古墳群は6世紀後半に築造された墳丘長69mの前方後円墳である山名伊勢塚古墳を中核に、6・7世紀代の中小規模円墳約60基から形成されていた。



第3図 七奥山古墳周辺の古墳分布



第4図 七奥山古墳周辺の遺跡分布

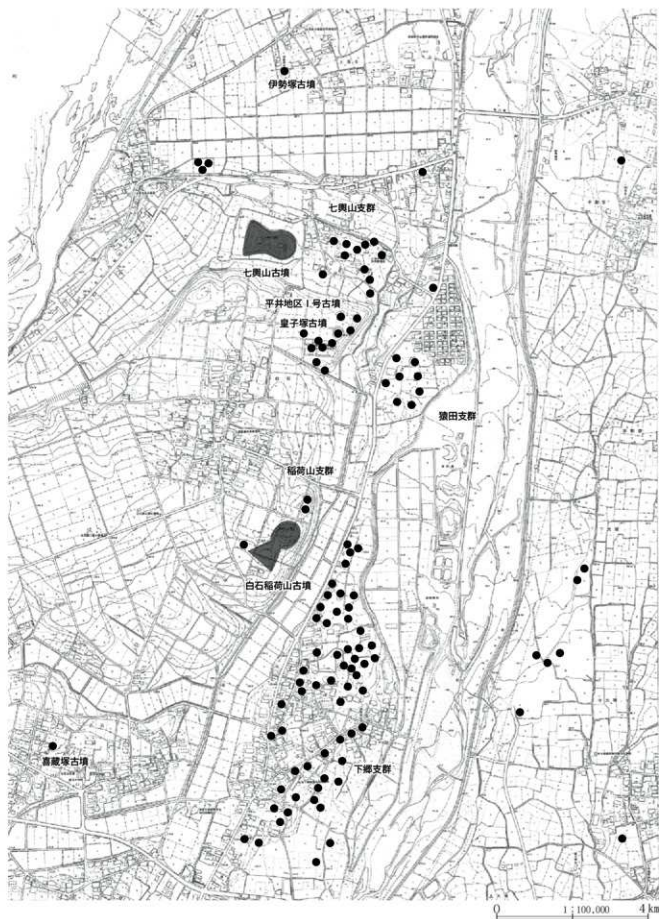
## 第1章 発掘調査と遺跡の概要

第1表 七興山古墳周辺の遺跡一覧

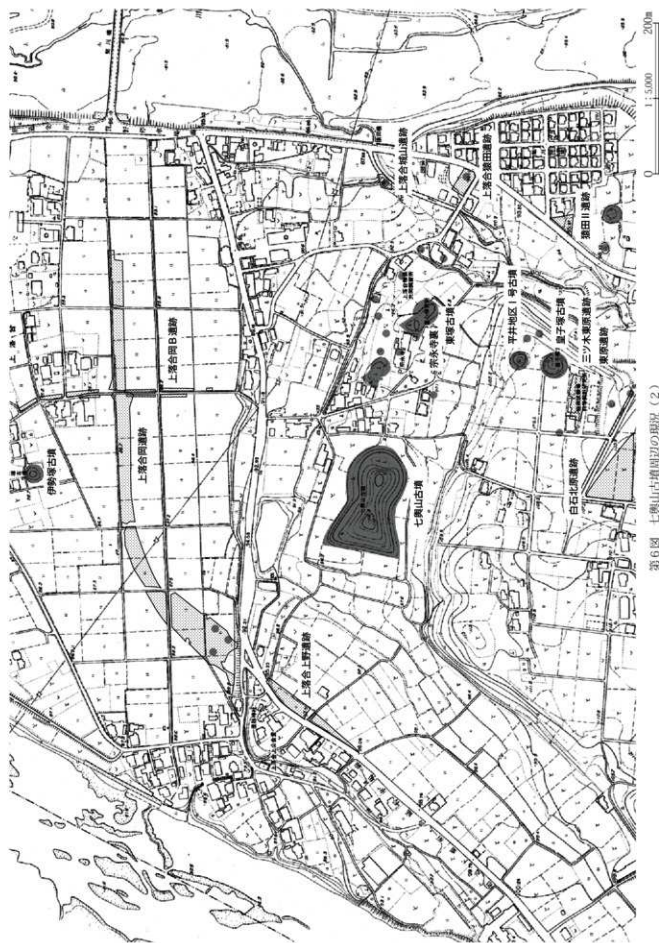
文献番号は巻末の参考文献に対応

No	所在地	概 要	文献
1	七興山古墳	藤岡市上落合字七興 本報告の古墳。墳丘長146mの前方後円墳。中庭をはさみ二重の周壁が巡る。6世紀前半の築造。	1~4
2	白石古墳群七興山支群	藤岡市上落合 七興山古墳を中心に宗永寺裏西塚古墳、宗永寺裏東塚古墳、伊勢塚古墳など16基の存在が確認されている。	
3	宗永寺裏西塚古墳	藤岡市上落合字七興 墳丘長50mの前方後円墳。主体部に横穴式石室を有する。6世紀後半の築造。	1
4	宗永寺裏東塚古墳	藤岡市上落合字七興 墳丘長53mの前方後円墳。宗永寺境内に保管される舟形石棺を出したとされる。5世紀後半の築造。	1
5	伊勢塚古墳	藤岡市上落合字岡 直径28mの円墳。主体部は横穴式の横穴式石室。6世紀後半から末の築造。	5
6	白石稲荷山古墳	藤岡市白石 白石稲荷山古墳を中心に9基の古墳が確認されている。	
7	平井地区1号古墳	藤岡市三ツ木字東原 直径30mの円墳。主体部は凝灰岩の加工石材を積み上げた横穴式石室。単鳳頭大刀、銅象嵌円鏡大刀の副葬品を出上。6世紀後半の築造。	6
8	皇子塚古墳	藤岡市三ツ木字東原 直径30mの円墳。主体部は凝灰岩の加工石材を積み上げた複室構造の横穴式石室。単鳳頭大刀柄頭他の副葬品を出上。6世紀後半の築造。	7
9	十二天塚北古墳	藤岡市白石字稲荷原 長軸23m、短軸22mの方墳。主体部は礎石。5世紀前半の築造。	8
10	十二天塚古墳	藤岡市白石字稲荷原 長軸36.8m、短軸26.8mの方墳。主体部は礎石と想定される。5世紀前半の築造。	8
11	白石稲荷山古墳	藤岡市白石字稲荷原 墳丘長約140mの前方後円墳。主体部に2基の礎石を有する。5世紀前半の築造。	9~11
12	高城塚古墳	藤岡市白石字中郷 直径約25mの円墳あるいは方墳と考えられている。凝灰岩を使用した葺石円形横穴の横穴式石室を有する。7世紀後半の築造。	
13	白石古墳群窟田支群	藤岡市白石 円墳17基を擁す。直径21mの円墳である窟田古墳は横穴式の横穴式石室を有する。	
14	窟田陣輪跡跡(窟田Ⅱ)	七興山古墳の東方に位置する。埴輪塚1基と灰塚を擁す。	12
15	白石古墳群下郷支群	藤岡市白石 萩原塚古墳をはじめとした5基が確認されている。墳丘長57mの前方後円墳白石二子山古墳や直径20mの円墳である江原塚古墳は既に消滅している。	
16	萩原塚古墳	藤岡市白石字遠 墳丘長40mの前方後円墳。主体部は自然石瓦石積の横穴式石室。6世紀後半の築造。	1
17	新原塚古墳	藤岡市白石字遠 円墳。鉄地銅象嵌の頭椎大刀柄頭を出した。6世紀後半の築造。	1
18	能越塚古墳	藤岡市白石字遠 直径15mの円墳とされる。主体部は横穴式の横穴式石室。6世紀後半の築造。	1
19	天王塚古墳	藤岡市白石字淵 直径25mの円墳。6世紀後半の築造。	1
20	埴塚(八幡塚)古墳	藤岡市白石字遠 直径23mの円墳。凝灰岩使用の葺石円形横穴式石室を有する。7世紀後半の築造。	1
21	緑葉古墳群	藤岡市緑葉・白石 船川左岸の微高地に形成された7世紀代の群集墳。	1・13
22	東平井古墳群	藤岡市東平井・船川 6世紀後半から7世紀にかけて形成された群集墳。4つの支群からなり、300基以上が確認されていた。	14・15
23	南坂古墳群	藤岡市西平井 丘陵上に分布する群集墳。30基弱が確認される。7世紀代の形成。	1
24	金山古墳群	藤岡市金井 丘陵尾根上の傾斜変換跡付近に形成された7世紀代の群集墳。主体部は横穴式石室。	1
25	平地神社古墳	藤岡市中大塚字宮前 直径33mの円墳。主体部は横穴式の横穴式石室。6世紀後半の築造。	1
26	藤塚古墳群	藤岡市藤塚 5世紀後半から7世紀にかけて形成された群集墳。	1
27	上栗原古墳群	藤岡市上栗原字白山・寺東 5世紀後半から7世紀にかけて形成された群集墳。上栗原遺跡、上栗原寺前遺跡として調査が行われている。	1・16・18
28	戸塚古墳群	藤岡市下戸塚 6世紀後半から7世紀代に形成された群集墳。約60基が確認されている。	1
29	稲荷塚古墳	藤岡市上落合字稲荷原 直径約20mの円墳。掘文鏡、直刀、滑石製鏡面品が出上。5世紀前半の築造。	1
30	野見塚古墳群	藤岡市下戸塚・小林北 戸塚神社古墳を中心とした古墳群。6世紀後半から7世紀の形成。	1
31	戸塚神社古墳	藤岡市上戸塚字野野 墳丘長53mの前方後円墳。主体部は自然石瓦石積の横穴式石室。6世紀後半の築造。	1
32	小林古墳群	藤岡市小林・粗平・本郷 神川川左岸に沿って形成された群集墳。150基以上が確認されている。一部は堀之内遺跡群として調査されている。古墳時代前期の集落・前方後方形を含む方形周溝墓も検出されている。	1
33	富戸塚古墳	藤岡市藤岡461-8 後円部の直径33mの前方後円墳と考えられる。主体部は横穴式の横穴式石室。6世紀後半の築造。	1
34	諏訪(諏訪神社)古墳	藤岡市藤岡字東東甲 墳丘長57mの前方後円墳。主体部の横穴式石室は凝灰岩加工石材を積み上げている。6世紀後半の築造。北側に凝灰岩加工石材を使用した横穴式石室を有する円墳。諏訪神社北古墳がある。	1
35	本郷二子山古墳	藤岡市本郷字塚原 墳丘長33mの前方後円墳。主体部は不明。埴輪が採集される。6世紀後半の築造。	1
36	本郷陣輪跡跡	藤岡市本郷字塚原 神川川左岸の河岸段丘の裾斜面を利用した築造されている。2基の跡跡が調査されている。灰原部分は宮下1遺跡群として発掘調査が実施されている。	1・20
37	別所堂山古墳	藤岡市本郷字堂山 墳丘長34mの前方後円墳。主体部は凝灰岩の加工石材を積み。6世紀後半の築造。	1
38	藤岡6号古墳	藤岡市藤岡 7世紀後半築造の円墳。方頭大刀を出上。	21
39	神田・三本木古墳群	藤岡市神田・三本木 6世紀後半から7世紀にかけて形成された群集墳。200基以上が確認されている。	22
40	茂原神社古墳	藤岡市神田 丘陵上に築造された円墳。前期古墳と想定される。	1
41	高城塚古墳	藤岡市神田字塚原 墳丘長24mの前方後円墳。主体部は凝灰岩使用の葺石円形横穴式石室。6世紀後半の築造。	1
42	山名古墳群	高崎市山名町 山名伊勢塚古墳を中心に6世紀後半から7世紀にかけて形成された古墳群。約60基が確認されている。	23
43	山名伊勢塚古墳	高崎市山名町 直径69mの前方後円墳。主体部は凝灰岩加工石材を積んだ横穴式石室。6世紀後半の築造。	24
44	河原1号古墳	高崎市山名町河原 直径13mの円墳。主体部は川原石と凝灰岩加工石材を使用した横穴式石室。6世紀前半の築造。	25
45	山名原口1遺跡1号古墳	高崎市山名町 直径約17mの円墳。主体部は凝灰岩の加工石材を使用した横穴式石室。6世紀後半の築造。	25
46	山ノ上古墳	高崎市山名町山神谷2104 直径15mの円墳。主体部は凝灰岩を使用した葺石円形横穴の横穴式石室。7世紀中葉の築造。古墳の傍らに山ノ上跡がある。	25

No	所在地	概	要	文献
47	山ノ上西古墳	高崎市山名町甲2086	山ノ上古墳の西方250mに位置する。直径約10mの円墳。主体部は凝灰岩を使用した	25
48	山ノ上合古墳群	高崎市山名町上合	6世紀後半から7世紀にかけて形成された群集墳。	25
49	岩井古墳群	高崎市吉井町岩井	6世紀後半から7世紀にかけて形成された群集墳。	23
50	會賀野・佐野古墳群	高崎市會賀野町	4世紀から7世紀にかけて形成された古墳群。	25
51	浅間山古墳	高崎市會賀野町東上正六313	墳丘長174mの前方後円墳。4世紀末葉の築造。	25
52	大鷲登古墳	高崎市會賀野町内下正六661	墳丘長123mの前方後円墳。4世紀末葉の築造。	25
53	小鷲登古墳	高崎市會賀野町内下正六661	墳丘長87.5mの前方後円墳。主体部に舟形石棺を有する。5世紀後半の築造。	25
54	徳山古墳	高崎市下佐野町藏玉塚	墳丘長61mの前方後円墳。主体部は凝灰岩を使用した葺石切組積の横穴式石室。6世紀後半の築造。	25
55	安楽寺古墳	高崎市會賀野町上町867	直径約30mの円墳。主体部は横口式石塚の形態をした横穴式石室。7世紀末葉。	25
56	會賀野東古墳群	高崎市會賀野町	6世紀後半から7世紀にかけて形成された群集墳。大志寺群・大道南群からなる。約160基が確認されていた。	25
57	上落合上野遺跡	藤岡市上落合上野	旧石器時代石器2点。縄文時代中期・後期、古墳時代前期・中期、奈良・平安時代住居。	26
58	上落合園遺跡	藤岡市上落合園	弥生時代、古墳時代前期・中期・後期、奈良・平安時代住居。7世紀代築造の円墳3基を抽出。南北方向の農道部分は上落合B遺跡として調査される。	28-29
59	上落合城山遺跡	藤岡市上落合字城山	古墳1基。中世井戸。	27
60	上落合協田遺跡	藤岡市上落合字協田	縄文時代後期土坑、古墳1基を抽出。	30
61	東原遺跡	藤岡市三ツ木字東原	皇子塚古墳の南西からは2基の円墳が検出された。7世紀の築造。三ツ木東原遺跡と同一の遺跡。	31
62	東原II遺跡	藤岡市三ツ木字東原	奈良・平安時代住居を抽出。	31
63	三ツ木東原遺跡	藤岡市三ツ木字東原	古墳時代住居。7世紀代の円墳5基を抽出。	31
64	白石北原遺跡	藤岡市白石字北原	縄文時代草創期尖頭器。縄文時代中・後期住居。平安時代掘立柱建物を抽出。	30
65	協田遺跡	藤岡市白石字協田	縄文時代前・中期の住居。古墳時代中期の住居と古墳3基を抽出。	1
66	園遺跡	藤岡市白石字園	縄文時代前期住居、古墳時代中期住居を抽出。直径28mの円墳の主体部は横穴式石室。6世紀後半の築造。	32
67	白石上郷遺跡	藤岡市白石字上郷	奈良時代住居を抽出。	33
68	白石中郷遺跡	藤岡市白石字中郷	船先形尖頭器表裡。	33
69	白石前原遺跡	藤岡市白石字前原	近世墓を抽出。	33
70	薬師原遺跡	藤岡市緑芝字薬師原	縄文時代中期住居、中・後期土坑。古墳時代中期住居。円墳2基を抽出。	33
71	シモ田遺跡	藤岡市緑芝字シモ田	縄文時代後期の土坑を抽出。	33
72	緑芝水押遺跡	藤岡市緑芝字水押	縄文時代中期土坑。古墳時代中期住居を抽出。	33
73	殿治谷ノ下遺跡	藤岡市緑芝字殿治谷ノ下	縄文時代後期配石・土坑を抽出。	33
74	緑芝上郷遺跡	藤岡市緑芝上郷・西郷	旧石器時代遺物包含層。古墳時代中期・後期住居。江戸時代屋敷を抽出。	33
75	大ヶ谷遺跡	藤岡市緑芝字大ヶ谷ノ下	縄文時代前期土坑。奈良・平安時代住居を抽出。	33
76	緑芝島遺跡	藤岡市緑芝字島	旧石器ナイフ出土。縄文晩期土器を抽出。古墳時代後期住居を抽出。	33
77	竹沼遺跡	藤岡市緑芝字竹沼院	縄文時代中期住居。古墳時代前期住居。古墳時代後期住居(滑石製模造品の玉造工房を含む)を抽出。	34-35
78	竹沼塚地群八幡塚地	藤岡市西平井	奈良・平安時代住居。平安時代の須恵器窯2基を抽出。	33
79	竹沼塚地群切通し塚地	藤岡市西平井	平安時代の須恵器窯1基とその灰原を抽出。	33
80	西原遺跡	藤岡市緑塚字西原	平安時代住居を抽出。	38
81	福荷屋敷C遺跡	藤岡市本動堂字福荷屋敷	平安時代住居を抽出。	38
82	滝下B遺跡	藤岡市中大塚字滝下	縄文時代前期土坑。古墳時代後期住居。平安時代以降の溝・土坑を抽出。	37
83	滝下遺跡	藤岡市中大塚字滝下	縄文時代前期住居。古墳時代後期住居。古墳時代中期古墳2基を抽出。	36
84	滝前遺跡	藤岡市中大塚字滝前	古墳時代中期の方形周溝墓。古墳時代後期の住居。平安時代住居を抽出。	36
85	滝前B遺跡	藤岡市中大塚字滝前	中世土坑を抽出。	37
86	滝前D遺跡	藤岡市中大塚字滝前	古墳時代溝。平安時代溝・土坑を抽出。	37
87	滝前上遺跡	藤岡市中大塚字滝前	古墳から奈良時代住居を抽出。	37
88	中大塚縄文時代後期石住居跡	藤岡市中大塚字鎌倉	縄文時代中期末から後期初頭の桶形石居住居を抽出。	37
89	滝下B遺跡	藤岡市中大塚字滝下	古墳時代後期から平安時代住居。古墳時代後期から奈良時代の祭壇遺構を抽出。	36
90	上栗須寺前遺跡	藤岡市上栗須寺薬師前	縄文時代後期住居。古墳時代から平安時代住居。古墳時代前期円形溝講道、中・近世溝・土坑を抽出。古墳1基は5世紀後半から6世紀代の築造。	17-19
91	福荷屋敷遺跡	藤岡市本動堂字福荷屋敷	平安時代住居を抽出。	38
92	滝前C遺跡	藤岡市中大塚字滝前	古墳時代後期住居。平安時代式冢遺構を抽出。	38
93	白石大御堂遺跡	藤岡市白石字大御堂・前原他	13世紀中頃創建の寺院。配石墓、火葬跡、火葬墓、土坑墓など抽出。	39
94	白石柳原遺跡	藤岡市白石字柳原	縄文時代前期住居。奈良・平安時代住居。浅間B群石下木田を抽出。	40
95	黒黒崎遺跡	高崎市吉井町薬師・平地	銅川右岸の高台段丘面上に位置する。縄文時代から平安時代の住居を抽出。	41
96	黒黒崎遺跡	高崎市吉井町六幡・徳山	銅川右岸の中位・高台段丘面上に位置する。縄文・弥生・平安時代住居を抽出。	42
97	田端遺跡	高崎市阿久津町田端	古墳時代後期から奈良・平安時代の住居。飛鳥から奈良時代にかけての瓦を出土した寺院等も抽出される。	43
98	山名ノ下遺跡	高崎市山名町ノ下	古墳時代から平安時代の住居を抽出。	24
99	でいせい遺跡	高崎市山名町大谷	瓦の散布地。榎子葉七片産華文片を持し丸瓦が採集される。寺院あるいは瓦窯。	44



第5図 七奥山古墳周辺の現況(1)



第6図 七瀬山古墳周辺の地図(2)

## 第1章 発掘調査と遺跡の概要

白石古墳群は七興山支群、稲荷山支群、猿田支群、下郷支群の4支群から構成されている古墳群でその範囲は南北2.5kmを測る。

七興山支群は七興山古墳を中心に下位段丘面上に位置する一群とその北側の最下位段丘面上に築造された伊勢塚古墳を含んでいる。分布調査で16基が確認されている。

藤岡市教育委員会による発掘調査により上落合岡遺跡では6世紀後半と7世紀の円墳合計3基が調査された。主体部はいずれも横穴式石室である。K-2号墳は埴輪が樹立されていた。鮎川寄りでは上落合城山遺跡で直径12mの円墳の周堀を調査した。上落合猿田遺跡でも直径18m円墳の周堀を検出している。ともに築造時期は不明である。

稲荷山支群は白石稲荷山古墳をはじめ上位段丘面に築造された古墳群である。分布調査では9基が確認されている。北端に平井地区1号古墳や皇子塚古墳を、南端には喜藏塚古墳や境塚古墳を含んでいる。

藤岡市教育委員会により、皇子塚古墳の南側に位置する三ツ木東原遺跡と東原遺跡の調査で合計7基の円墳が検出されている。K-5号墳を除き直径10m余りの規模で6世紀末から7世紀代の築造である。

猿田支群は鮎川左岸の扇状地面上に築造された円墳を主体とする支群である。模様積の横穴式石室を有する猿田古墳が周知の古墳である。分布調査で17基を確認している。藤岡市教育委員会によりK-1号から3号の3基が調査されているが詳細は不明である。

下郷支群は猿田支群の南側、鮎川左岸の扇状地面上に南北に帯状に分布している。分布調査では55基を確認している。

藤岡市教育委員会による発掘調査により、滝遺跡では6世紀後半に築造されたA K-1号墳が検出された。直径20mの円墳で、横穴式石室、埴輪樹立が確認されている。新領塚古墳からは鉄地銀象嵌装の頭椎大刀が出土している。

白石古墳群の変遷についてその概要を記すると、現在のところ古墳群の周辺には前期古墳が確認されていない。

白石稲荷山古墳とその北側に位置する十二天塚古墳、十二天塚北古墳は5世紀前半の築造と考えられている。白石古墳群の形成はこの時期に開始されたものと考えられる。その後の首長墓系列としては七興山支群では5世

紀後半には宗永寺裏東塚古墳が、6世紀前半に七興山古墳が築造され、6世紀後半の宗永寺裏西塚古墳へと継続している。6世紀後半のそれ以外の前方後円墳としては下郷支群の萩原塚古墳、白石二子山古墳が築造されている。

これらの首長墓の下には各支群とも直径30m級の円墳皇子塚古墳、平井地区1号古墳、堀越塚古墳、伊勢塚古墳などが築造されており、その下位に多数の小円墳が築造されるという重層的な古墳築造状況が認められる。

7世紀には稲荷山支群の南端に喜藏塚古墳と境塚古墳の葦石切積横穴式石室を有する古墳が築造される。

白石古墳群の猿田支群内からは猿田埴輪築造跡が検出され、古墳に隣接して埴輪窯が操業されていたことが明らかになっている。猿田II遺跡の調査においては猿田川に面した斜面に設けられた埴輪窯4基が検出された。窯跡は鮎川側にも確認されている。

七興山古墳周辺の古墳時代から平安時代にかけての集落遺跡動向については田野倉武男氏により詳細な検討がなされている。本稿の記述についても田野倉氏の成果を参照したところが多い。

## 第3節 発掘調査の方法と経過

### 1 調査の方法と経過

七興山古墳は東西方向に帯状に伸びる下位段丘面に沿うように東西方向に長軸を置いて築造されている。1971(昭和46)年度に墳丘測量から周堀が二重に圍繞することが想定された。史跡指定範囲の変更によって周堀部分の範囲を確認すること検討され、地元地権者との調整を経る中、トレンチ3カ所を設定し、調査に着手することとなった。調査期間は1972(昭和47)年3月21日から4月21日までである。

調査は、準備期間を経て、3月28日に後円部後方、東側に設定したAトレンチの掘削から開始した。次にCトレンチ、Bトレンチと続いた。

Aトレンチは図面の作成、写真撮影の段階では後円部東第1トレンチ、第2トレンチと呼称していたようである。東西方向のトレンチで、北側に接する宅地との地境



に平行するように配置され、長さ10mのトレンチを4カ所、縦列で、合計40mの長さで設定した。

Bトレンチは後円部の南東方向にあたる位置に配置したトレンチである。北西から南東方向に延びたトレンチの長さは15mである。後円部南東トレンチと呼称されていた。

Cトレンチは南北方向の長さ15mのトレンチで、墳丘の長軸方向と直交させることを意図した配置である。調査時にはくびれ部南側トレンチと呼称されている。

遺構の記録は、実測図化と写真撮影により行った。遺構の図化は、各トレンチの50分の1の平面図、20分の1の土層断面図を作成した。

各トレンチの位置は、古墳の墳丘裾に打設されていた指定範囲を示すコンクリート杭を見返りとして300分の1の平面図に記録された。

遺構写真は、6×9判と35ミリのモノクロフィルム、35mmのリーパーサルフィルムにより撮影をした。

埴輪を主体とした出土遺物は洗浄・注記を済ませた後にトレンチ毎に仕分けして収納された。この時点ではA・B・Cのトレンチ名で注記が行われている。

#### 調査日誌抄

1972（昭和47）年

- 3月28日 作業開始。Aトレンチ1区と4区から掘削を開始する。
- 3月30日 Aトレンチ3区の掘削を開始する。
- 3月31日 Aトレンチ2区の掘削を開始する。
- 4月3日 Cトレンチの掘削を開始する。Aトレンチ1・2区写真撮影。
- 4月6日 Bトレンチの掘削開始する。
- 4月10日 Aトレンチ土層断面、平面図実測作業。
- 4月13日 A・Bトレンチの位置、平面図に図化。
- 4月14日 Bトレンチ土層断面実測。その後、埋め戻し作業を行う。
- 4月17日 Cトレンチ掘削作業。その後写真撮影。
- 4月18日 Cトレンチ平面図、土層断面図作成。併せてCトレンチの位置を平面図に図化する。その後、埋め戻し作業を行う。

## 2 整理事業の方法と経過

七麴山古墳の調査成果・出土遺物の整理事業は、2年次にわたり実施された。第1年次は、2009（平成21）年10月1日から2010（平成22）年3月31日までの間に平成21年度緊急雇用創出基金事業として、佐波郡玉村町所在の箱石浅間山古墳、高崎市所在の不動山古墳の整理事業とともに実施された。

第2年次は2010（平成22）年4月1日から平成2011（平成23）年3月31日までの間に平成22年度緊急雇用創出基金事業として太田市所在の猿楽遺跡の整理事業とともに合わせて実施された。

第1年次には出土遺物の接合・復元作業を中心に、合わせて遺構図面の編集作業を行った。第2年次は、出土遺物の実測から始まり、報告書刊行に至るまでの間の諸作業を実施した。

遺構図面については、編集作業の終わった下図をデジタル専攻でデジタルトレース、版下作成を行った。出土遺物の実測に際しては、その一部について器械実測により素図を作成し、これを精図した。器形の復元が困難な資料については、断面のみ実測を行い、これに拓本を貼付した。作成した実測図はトレース作業を行い、デジタル専攻で遺構図面と合わせて版下作成作業を行った。

記録写真類は、遺構写真についてはデジタル専攻でネガフィルムをスキニングし、写真図版のレイアウト・版下作成作業を実施した。遺物写真は当事業団写真室でデジタル写真撮影を行い、デジタル専攻でレイアウト・図版作成作業を実施した。

報告書の出稿にあたっては原稿、挿図、写真のいずれもデジタルデータ化を行っている。

上記の経過を経て、2010（平成22）年12月に『七麴山古墳』として発掘調査報告書の刊行を行ったところである。

掲載資料については、台帳作成後収納作業を行った。掲載を断念した埴輪・土器などは出土トレンチ・地点ごとに分類後収納した。

## 第4節 七興山古墳の現状と既往の調査と研究成果

### 1 七興山古墳の現状

七興山古墳は国指定史跡であることから墳丘部分には調査が及んだことはない。墳丘形状や規模などについては梅澤重昭氏による『群馬県史』資料編3における記述内容が基礎的な見解の一つとなっている(梅澤1989)。

梅澤氏の記述によると七興山古墳は前方部を西面する前方後円墳で、三段築成であると推定されている。主軸線の方向は真西より16度北に寄った方向であるとされる。墳丘長は146m、後円部径84から85m、前方部幅は102から104mの範囲とされる。くびれ部は64m前後の幅を計測できるとする。後円部は東側が大きく削平を受けているが、頂部の平坦面の径は14m前後と推定されている。前方部頂部も後世の土盛りにより変形が加えられており、古墳の原形は前方部と後円部の頂部が同じ高さであったと考えられている。後円部の標高は110.7mであるとされる。

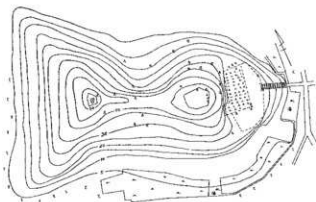
墳丘表面には葺石が施され、埴輪樹立があったことも指摘されている。鞍部からは家形埴輪の破片が採集されている。

内部主体については不明としながらも横穴式石室が推定されている。

築造年代については白石古墳群中における位置付けと、著しく前方部墳丘が発達した形態から6世紀後半の時期が考えられた。

内堀部分についても藤岡市教育委員会による史跡整備に先立つ調査の際にその対象となっていないことから従来からの知見が踏襲されている。前述の『群馬県史』資料編3によれば内堀は最小幅20m内外で構築されたものと推定されている。内堀部外縁の範囲は、主軸線上で184m内外、前方部前線線上で146m内外、後円部径で124mと記されている。

その後、中堤、外堀、外周堤については後述するように藤岡市教育委員会による調査より新たな知見が得られている。



第7図 『史蹟名勝天然記念物調査報告書』第1輯掲載の七興山古墳墳丘図

### 2 既往の発掘調査

七興山古墳は1927(昭和2)年に国史跡に指定された後、2回の発掘調査が行われている。第1回目は本報告の1972(昭和47)年の調査である。2回目は1988(昭和63)年度から3カ年度にわたり実施された藤岡市教育委員会の調査である。この他に数回にわたり白石古墳群に対する分布調査や発掘調査が行われている。ここではそれらも含めた調査歴の整理をしておきたい。

1929(昭和4)年に『群馬県史跡名勝天然記念物調査報告書』第1輯(群馬県1929)が刊行されている。この中にその当時の七興山古墳の現況と墳丘平面図が掲載されている。報告の中では、梅澤氏が『群馬県史』資料編3の中で指摘されているように、後円部北側の畑に塋(中堤)の名残があり、埴輪が散布していることから塋の上に埴輪が立てられていたものと推定している。

また、1929(昭和4)年には、後藤守一・相川龍雄両氏により、白石稲荷山古墳の発掘調査が行われている。その報告は『多野郡平井村白石稲荷山古墳』として1936(昭和11)年に公表されている(群馬県1936)。

これに先立ち、1933(昭和8)年に発表された後藤守一・相川龍雄「白石古墳群の研究(一)」の中で後藤氏らは七興山古墳を含む「平井村大字白石及美土里村落合に亘って散在する大小數十基の古墳は「白石古墳群」(又の名を稲荷山古墳群)の名に相応しい「古墳群」を形成してあると認めることができる」としている。そして、白石古墳群の範囲、地形、集落との関係、緑野屯倉との関係について論述している。白石古墳群の研究は古墳を単体ではなく古墳群として研究することの重要性が初めて学会に提示された史的論考として良く知られて

いるところである（後藤・相川1933）。

後藤氏は、1936年刊行の調査報告書において、白石古墳群の章で、白石古墳群を稲荷山古墳群・七興山古墳群・猿田古墳群・下郷古墳群の4小群に分け、個々の特徴を記録している。この4支群については現在までこの区分に沿った認識が継承されている。

この中で七興山古墳については墳丘平面図・断面図が掲載され、古墳の立地、形状の概要等が記されているが、あまり特筆すべき点を見出し得なかったようで、墳丘中腹から円筒埴輪が発見されること、後円部頂上で家形埴輪を発見したことなどの内容にとどまっている。ただ、墳形から見ると「稲荷山古墳群中、七基の前方後円墳中、発達の極に達したものであり、或る意味では、これを本古墳群の王座を占めるもの」としている。

後編では白石古墳群中における白石稲荷山古墳の位置づけについて記されているが、群中の7基の前方後円墳の変遷については、前方部と後円部の高さなどの比較による墳形の推移から、「稲荷山古墳—十二天塚」＝「七興山古墳—宗永寺二前方後円墳」＝「萩原塚—二子山古墳」の順序を想定し、七興山古墳は稲荷山型と二子山型の中間に位置づけている。そして、白石古墳群を「緑野屯倉首及びその部族の墳墓」と推定している。

1935（昭和10）年には群馬県下一斉に古墳分布調査が行われ、その成果は1938（昭和13）年に『上毛古墳総覧』として公開された。この中で、七興山古墳の周辺では旧平井村の大字白石に178基、大字三ツ木に22基、美土里村大字上落合に72基の合計約270余基の古墳が確認されている。この中には前方後円墳約20基が含まれるとされた。

1952（昭和27）年には群馬大学の尾崎喜左雄氏の指導した史学研究室により、後藤氏らが命名した「白石古墳群」の中の猿田古墳群、下郷古墳群を中心とした古墳を対象にした「白石古墳群」の調査が行われている。調査対象には小規模古墳も多数含まれ、墳丘平面図や当時開口していた横穴式石室内部の実測図が作成されている。また、元禄6年の古地図、明治9年頃の地籍図における古墳の記載状況も検討されている。この時の調査成果と考察は1989年に『白石古墳群調査報告書』として刊行されている（藤岡市史編さん委員会1989）。

その後、藤岡市教育委員会により1982・83（昭和57・

58）年に実施された遺跡詳細分布調査においては、白石古墳群における古墳数は83基（前方後円墳10基）に減少している。七興山支群も七興山古墳の他に宗永寺境内に宗永寺裏東塚古墳・西塚古墳、天神塚古墳、宗永寺東円墳が確認されるのみとなっている。

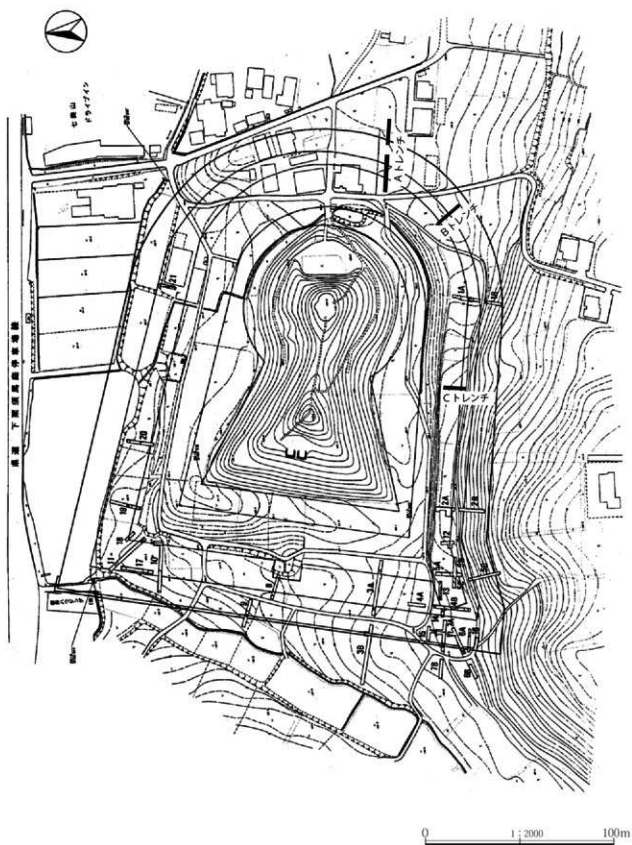
1988（昭和63）年度から1990（平成2）年度の3カ年に渡り、藤岡市教育委員会による範囲確認調査が実施された。調査区は国指定範囲外にトレンチを設定して行われたため、遺構の確認には制約が伴っていた。第1年次は墳丘の南側から前方部にかけての部分で、8本のトレンチが設定された。第2年次には墳丘の南西側から前方部にかけて北西側までの範囲に12本のトレンチが設定された。第3年次は墳丘の南西側から前方部北側、後円部北側にかけての範囲で10本のトレンチが設定された。合計30箇所のトレンチ調査の結果、外部施設として墓石、埴輪列、内堀、中堤帯、外堀、外堤帯、三重目の溝を有することが確認された。

刊行された3冊の報告書（藤岡市教育委員会1990・1991・1992）から範囲確認調査で得られた調査成果の概要について記すると、七興山古墳は前方部を西面させる3段築成の前方後円墳で、主軸方向はN-77°-Wである。墳丘の規模は、墳丘長145m、後円部径87m、前方部幅106m、くびれ部幅56m、墳丘高は前方部、後円部とも16mである。

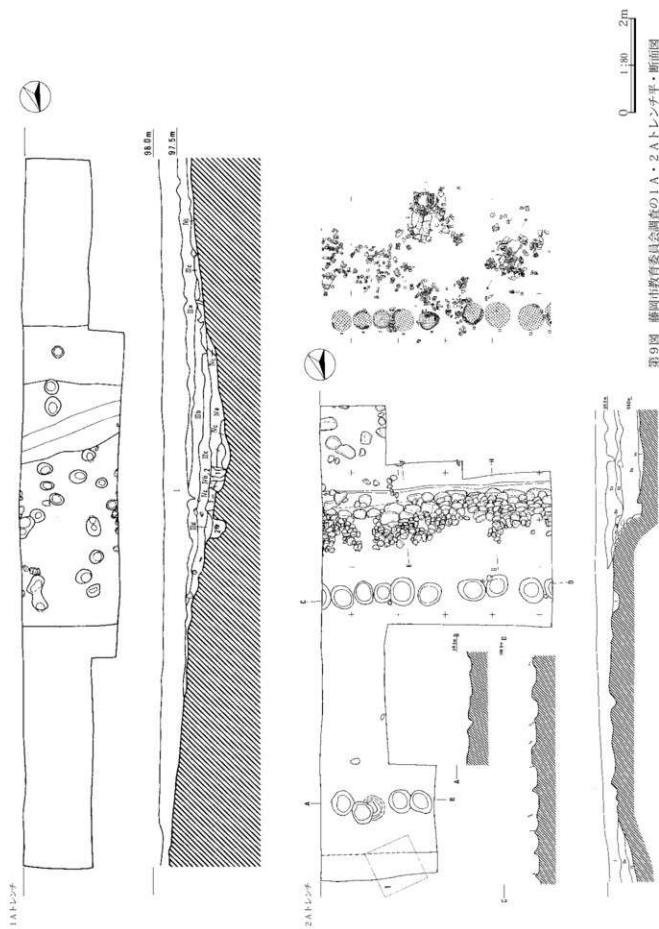
中堤帯は幅23mで馬蹄形に巡り、主軸線上の前方部方向に方形の造り出しが付設されていた。前方部南西方向の隅にも造り出しが付設されているとされる。

外堀は、前方部前面から北側が幅17mと広く、古墳の南側では幅7mと狭くなっている。前方部南西隅は中堤の形状に合わせて張り出している。外堤帯は幅14mで巡り、前方部南西隅は張り出している。前方部前面を中心に外堤帯の外側にはさらに三重目の溝（外周溝）がコの字状に巡る。内堀は湛水していた可能性が指摘されている。その他は空堀と推定されるという。三重目の溝を含めた兆域の長軸方向の長さは257mを測る。

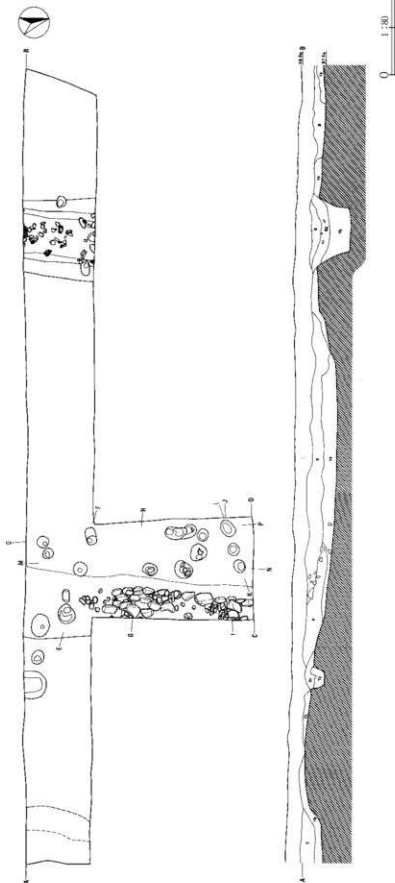
中堤帯・外堤帯ともに墓石、埴輪列があり、特に中堤からは2列の円筒埴輪列が検出されている。埴輪列は普通円筒埴輪と朝顔形埴輪の組み合わせで、密着した状態で樹立している。この2列の埴輪列は4m前後の幅があるという。形象埴輪は人物、馬、器財埴輪の盾、家など



第8図 調査トレンチと藤岡市教育委員会のトレンチの関係



第9図 藤岡市教育委員会調査の1A・2Aトレンチ平・断面図



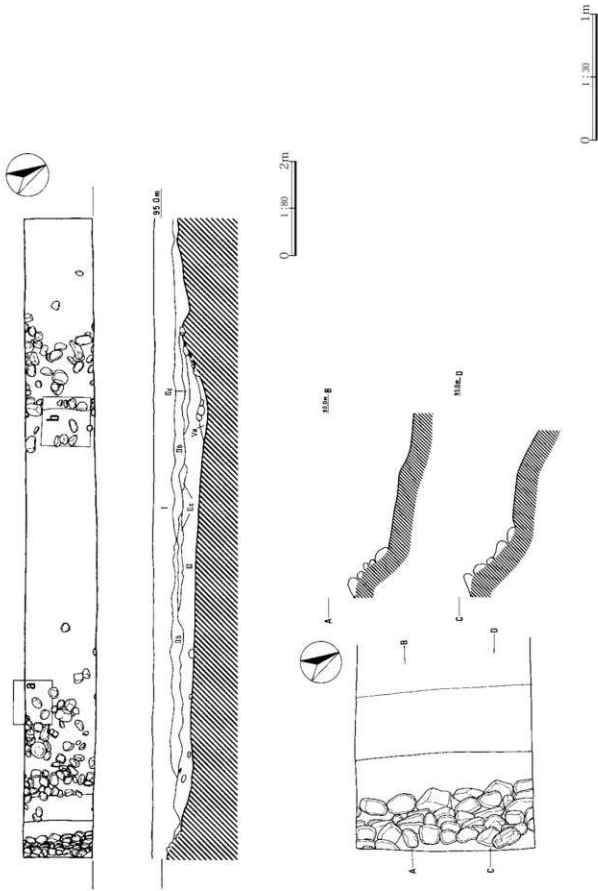
福岡市教育委員会調査時の基本土層

- I層 (灰褐色土層) 耕作土、As-Aを含む。
- Ia層 (灰色土層) As-Aと青灰色粘土でまだら模様を呈している。
- Ib層 (灰色土層) 炭分粒子を含み、かたくしまっている。
- IIa層 (黒灰色土層) As-Aの純層。
- Ib層 (灰褐色土層) As-Aを含む、かたくしまっている。
- IIIc層 (暗褐色土層) As-A、ローム粒子、黒色土粒子を含む。
- IIId層 (灰褐色粘質土層) 粘土層、砂利層が互層に入り混入している、人為的に盛られた土。
- II層 (黒色土層) As-Bを含み、遺物を包含する。
- IIa-1層 (黒色粘質土層) 砂利、As-Bを含む、かたくしまっている。
- IIa-2層 (黒色粘質土層) 砂利、青灰色粘土、炭分粒子を含み、かたくしまっている。
- IIa-3層 (暗褐色粘質土層) 灰褐色粘土と青灰色粘土でまだら模様になっている。
- IIa-4層 (暗褐色粘質土層) 灰褐色粘土と青灰色粘土でまだら模様を呈し、As-Bを含む。
- IIa-5層 (青灰色粘質土層) 青灰色粘土と灰褐色粘土で互層になっている、下面にAs-Bを部分的に含む。
- IIa-6層 (青灰色粘質土層) 青灰色粘土と灰褐色粘土で互層になっている、As-B、炭分粒子を含む。
- IIb層 (黒褐色土層) As-Bの純層。

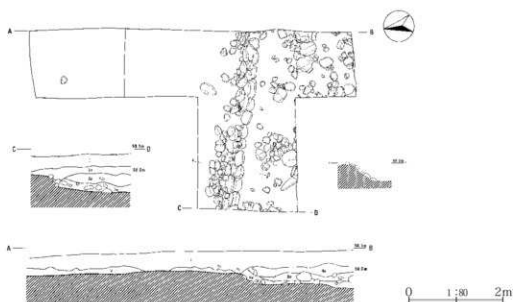
- IIIc-1層 (灰色粘土層) 青灰色粘土のプロックを含み、かたくしまっている。
- IIIc-2層 (青灰色粘土層) 部分的にAs-Bを含む。
- IIIc-3層 (灰色粘土層) 炭分粒子、As-Bを含む、かたくしまっている。
- IIIc-4層 (暗褐色粘質土層) 炭分粒子を多量に含む、As-Bはわずかにみられる。
- IIIc-5層 (青灰色粘質土層) 青灰色粘土プロック、As-Bを含む、かたくしまっている。
- IIIc-6層 (灰色粘土層) As-B、崩壊片を含む。
- IIId-1層 (黒色粘質土層) ローム粒子を若干含む、かたくしまっている。
- IIId-2層 (暗褐色粘質土層) 炭分粒子を多量に含む、かたくしまっている。
- IVa層 (黄褐色土層) ローム粒子を多量に含む。
- IVa層 (黄褐色土層) 山の利を若干含む。
- IVb層 (黄褐色土層) 山の利を多量に含む、かたくしまっている。
- IVc層 (黄褐色土層) 山の利、ローム粒子、黒色土粒子を含む。
- Va層 (暗褐色土層) 中絶帯・外周帯が明確化したもの、ローム粒子を含み、かたくしまっている。
- Vb層 (暗褐色土層) 中絶帯・外周帯が明確化したもの、ローム粒子を主体に黒色土粒子を含み、かたくしまっている。

「七瀬山古墳埋蔵品調査報告書」頁より

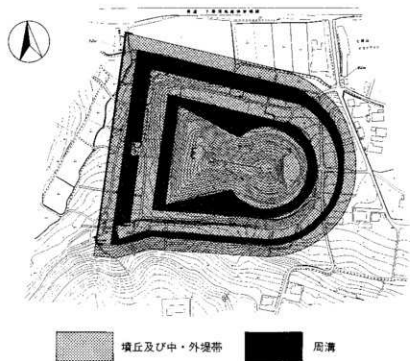
第10図 福岡市教育委員会調査の7Aトレンチ平・断面図



第111図 藤岡市教育委員会調査の8トレンチ平・断面図



第12図 藤岡市教育委員会調査の12トレンチ平・断面図



第13図 七興山古墳兆域模式図

が検出されており、その在り方は古墳主軸線上、前方部前面の中堤帯造り出し部、前方部南西方向隅の中堤帯造り出し部などの限られた場所から出土したとされ、周堤土の一角に形象埴輪が配置されていたと推定されている。

この他に土師器・須恵器が少量ずつ出土している。

本報告では範囲確認調査で設定されたトレンチの中から、本報告のAトレンチ、Bトレンチの状況と比較するために、墳丘南側に設定された1Aトレンチと2Aトレ

ンチの平面図・断面図と写真を掲載した。また、Aトレンチ外堤内縁、Cトレンチ中堤外縁で検出した石積の状況と比較するために7Aトレンチ、8トレンチ、12トレンチの平面図・断面図と写真を掲載した。

1Aトレンチは後円部南側に設定されたもので、本報告のBトレンチとCトレンチの中間に位置している。

中堤帯の一部と外堀を検出している。中堤帯は本報告の3トレンチと同様、既に削平を受けていた。築成面は



平坦面・傾斜面ともに版築が施されていたとされる。外堀は断面がV字状をなし、その傾斜面には葺石が確認されていない。最下面の標高は96.3mである。堤帯への立ち上がり部分には幅30cm前後の溝が検出されている。この小溝は中堤帯築成時の規格溝と理解されている。また、中堤帯傾斜面から外堀にかけて柱穴痕が多数確認され、中には底面に礫を伴うものもあった。なお、このトレンチの南側に設定された1Bトレンチからは幅2.4mの外堤帯の一部とこれに続く人為的な傾斜面が確認されている。

2Aトレンチは本報告のCトレンチの西側、前方部前縁を南側に延長した位置に設定されている。2Aトレンチにおいても中堤帯の一部、外堀が確認された。幅6.4mの中堤帯上面では内外2列の埴輪列が樹立時の原位置に基底部を残して検出されている。中堤帯外側の傾斜面には版築後45度前後の傾斜で葺石が確認されている。葺石は30cmから60cm大の細長い礫を根石とし、その上に10cmから40cm大の礫を積み上げていた。根石の標高は98.6m前後と、98.8m前後である。このトレンチの南側に設定された1Bトレンチでも人為的な傾斜面が確認された。

7Aトレンチは前方部南西設定されたもので、外堀帯の一部と外周溝が検出されている。外堀帯から葺石の一部が検出されている。根石の標高は97.35mである。葺石の状況は2Aトレンチと類似している。

8トレンチは前方部前面、墳丘主軸線上に設定されたもので、中堤帯の一部、外堀、外堀帯の一部を検出した。中堤帯はこの部分で外方に突出していたことが想定されている。外堀の幅は7.5mである。中堤帯、外堤帯から葺石を検出している。根石の大きさがやや小振りである。葺石面の傾斜は中堤帯で35度前後、外堤帯で23度前後である。根石の標高は94.5m前後である。

12トレンチは2Aトレンチの西側に設定されたトレンチで、中堤帯の一部と外堀が検出された。中堤帯の傾斜面からは葺石が検出された。傾斜は35度前後である。葺石は根石に25cmから40cm大とやや大振りな礫を据え、これより上位には10cmから40cm大の礫が積まれている状況は他トレンチ検出の葺石と同様である。根石の標高は97.7mである。

範囲確認調査においては大量の円筒埴輪と少量の形象埴輪と土師器、須恵器が検出されている。これらについ

ても3冊の報告書からその概要を転記するとともに、特徴を示す資料を中心に一部実測図を掲載しておく。

円筒埴輪には普通円筒と朝顔形埴輪の2種が出土している。円筒埴輪の器形は胴部が寸胴で、口縁部・基底部が短く外反するものである。高さは1m以上の大型品の存在が確認されている。口径・底径を見ると25cmから30cm前後と40cm大の2種類に分けられるとされる。

口縁部は単口縁（Ⅰ類）と貼り付け口縁（Ⅱ類）に大別される。Ⅰ類は口縁部の端部の形状、外反の度合いからaからeに細分されている。Ⅱ類も口縁部端部の形状、貼り付け部の形状、厚さ、器面調整の相違によりaからmに細分されている。

第1次調査の報告ではトレンチごとに出土埴輪の口縁部の様相が異なっていたことが指摘されている。

突帯はV123（『範囲確認調査報告書』Vの123を表す。以下同じ）で7条、V126で6条以上が貼付されていることが知られる。断面形は台形を呈し、中央が凹む形状が主体と報告されている。稜が丸みを帯びた個体、断面三角形の個体も少量見られた。なお、第14図のM1から台3の細分については本報告のために作成したものである。

透孔は1段2孔の円形透孔が大半である。位置については完形品が少ないため不明であるが、規格性は見られないとされる。V131は半円形の稀少例である。

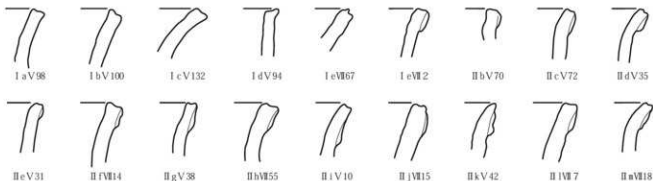
線刻は×印、右下がりの斜線、逆U字形の事例が報告されている。

外面調整は基本的にタテハケが主体で、少量、二次調整ヨコハケが見られるという。タテハケは断続的な繰り返しが多く、突帯貼付後に施す事例もある。二次調整ヨコハケは、断続的に施されている。一部の段に見られるだけで、各段には見られない。

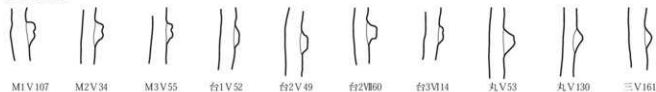
内面調整はタテ・ヨコ・ナメハケ調整、指ナデ調整、ヨコナデ調整の組み合わせによる。口縁部にはヨコハケが施される事例が見られる。

基底部については第1突帯の貼付位置による分類と基部粘土板の製作の相違により、7分類されている。突帯の位置についてはⅠ類が突帯が基部にあり、そのまま底部になっている。Ⅱ類が突帯の位置が底部から2cmから4cm位の高さに位置する。Ⅲ類が突帯の位置が底部から5cm以上の高さに位置すると規定されている。基部粘土

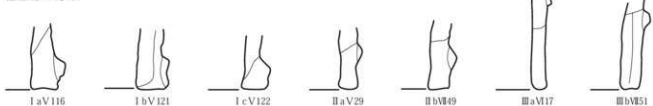
口縁部の分類



突帯の分類



基底部の分類



第14図 藤岡市教育委員会出土円筒埴輪の分類模式図

板の製作についてはaが幅5cm前後の粘土板による。bが幅5cmから10cm前後の粘土板を貼り合わせる。cが幅3cmほどの低位置突帯が基部になると規定されている。

胎土については片岩・赤色岩粒・チャートが多く混入することが指摘されている。焼成については外面に黒斑が見られないことから窯窯焼成とされる。色調については赤褐色系と淡褐色系があり、赤褐色系が主体とされる。少量ではあるが灰色を呈する須恵質のものも含まれることも指摘されている。

朝顔形埴輪は、V124に代表されるように口縁部の器形について、頸部が短く大きく内彎しながら立ち上がり、端部で外反して開く形状であるとされる。器面の調整は肩部にヨコハケ、他はタテハケである。

形象埴輪は器財埴輪、人物埴輪、馬形埴輪が検出されているが出土量は少量である。盾形埴輪は、前部西側に設定した3Aトレンチ、3Bトレンチ、前部前面、主軸線上の中堤帯部分に設定した8トレンチから破片が

1点ずつ出土している。

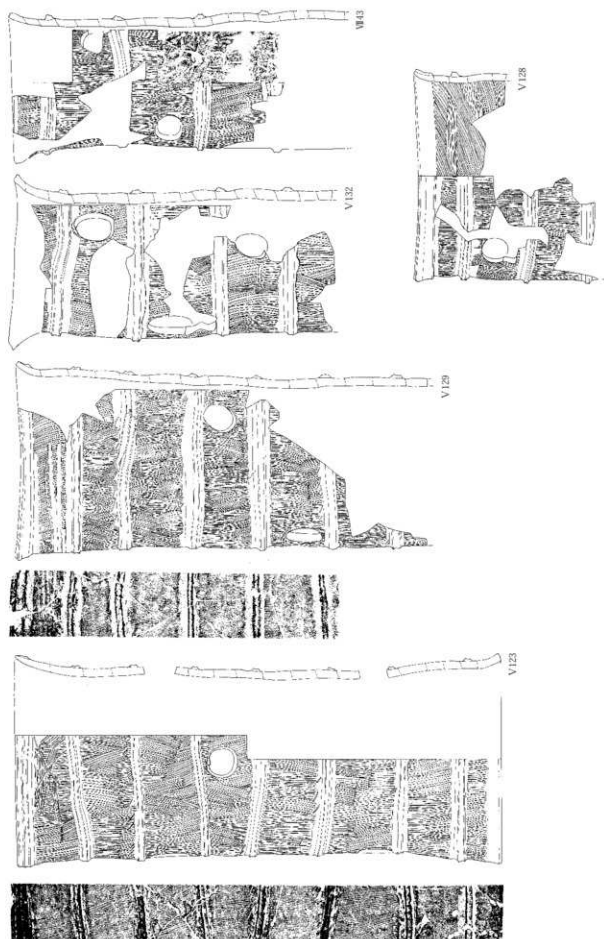
人物埴輪は、8トレンチから肩部1点、頸飾りの見られる頸部2点、小径の半身像上着裾部2点が出土している。また、靴とされる小片もあり、全身表現の人物像が存在するとされる。前部北西隅部に設定された10トレンチからは手の甲の破片が出土している。

馬形埴輪の鈴が10トレンチから出土している。

土器は、前部南西方向隅で中堤が方形に造り出し状になる13トレンチから手捏土器2点と須恵器杯蓋模倣の土器器杯が出土している。

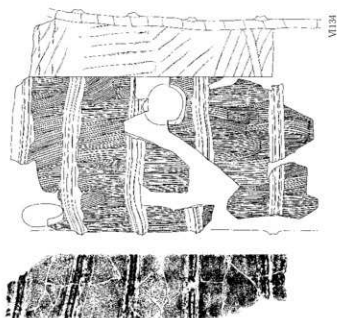
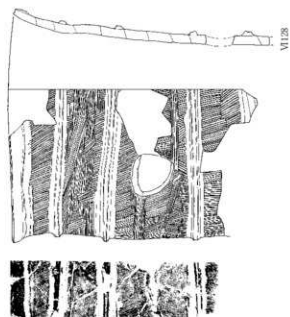
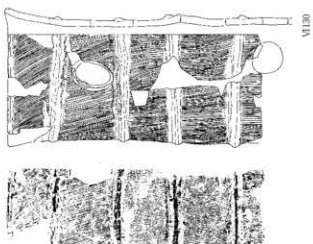
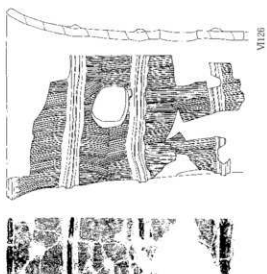
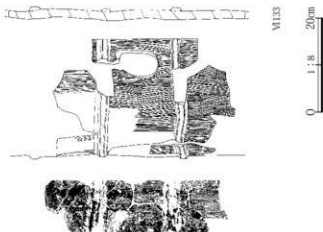
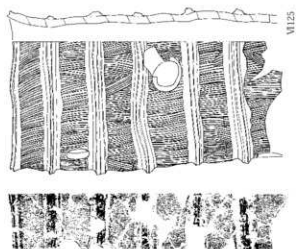
須恵器は、前部前面に設定された8トレンチの外堀内から横瓶が出土している。この横瓶は6世紀中葉に位置づけられる渋川市中ノ塚古墳出土例に類似し、これよりも古い段階のものであるとの見解が示されている。また、前部南西方向隅の外堤帯に設定した16トレンチからも横瓶が出土している。

範囲確認調査時の見解では七興山古墳は6世紀初頭に

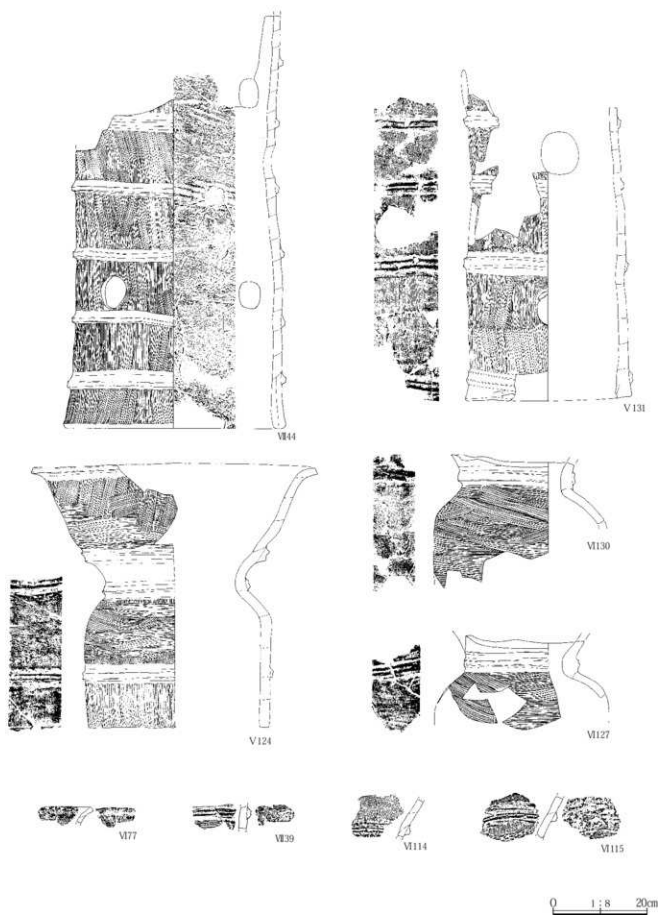


第15図 藤岡市教育委員会調査時出土円筒埴輪(1)

0 1:8 20m

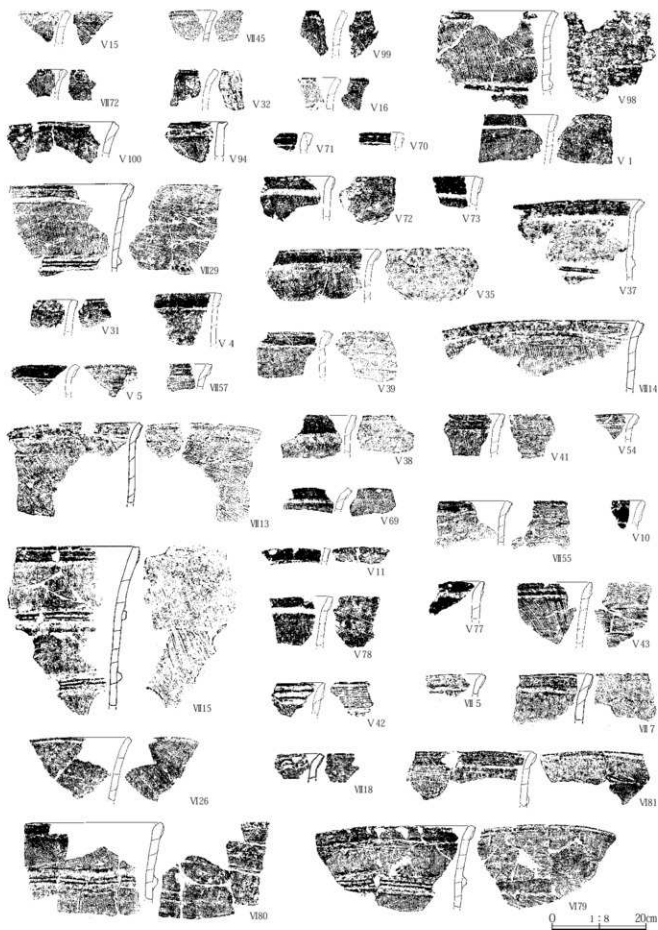


第16図 藤岡市教育委員会調査時出土円筒片輪(2)



第17図 藤岡市教育委員会調査時出土円筒埴輪(3)

第1章 発掘調査と遺跡の概要

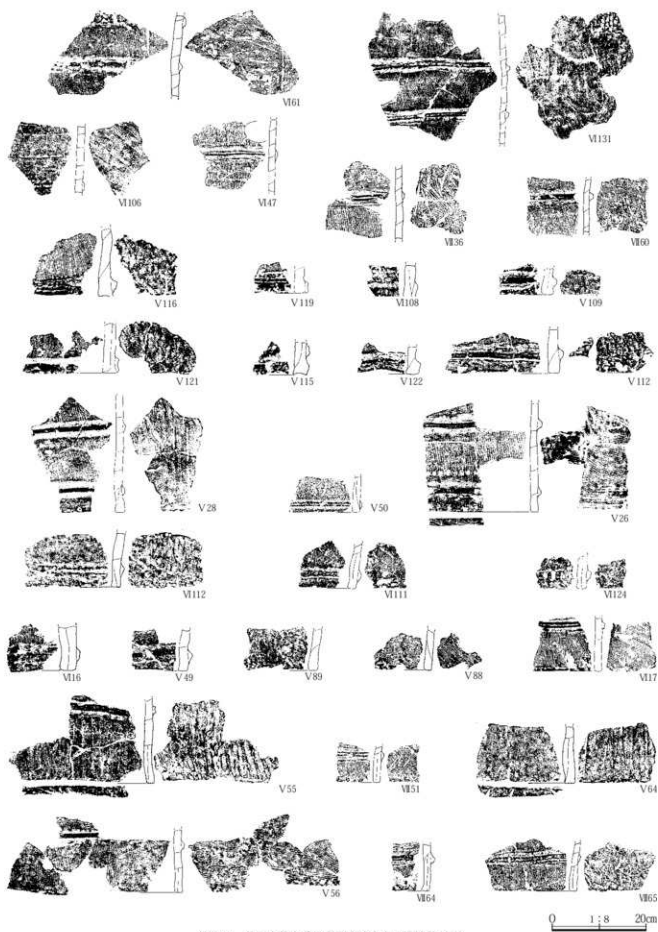


第18図 藤岡市教育委員会調査時出土円筒埴輪(4)



第19図 藤岡市教育委員会調査時出土陶片(5)

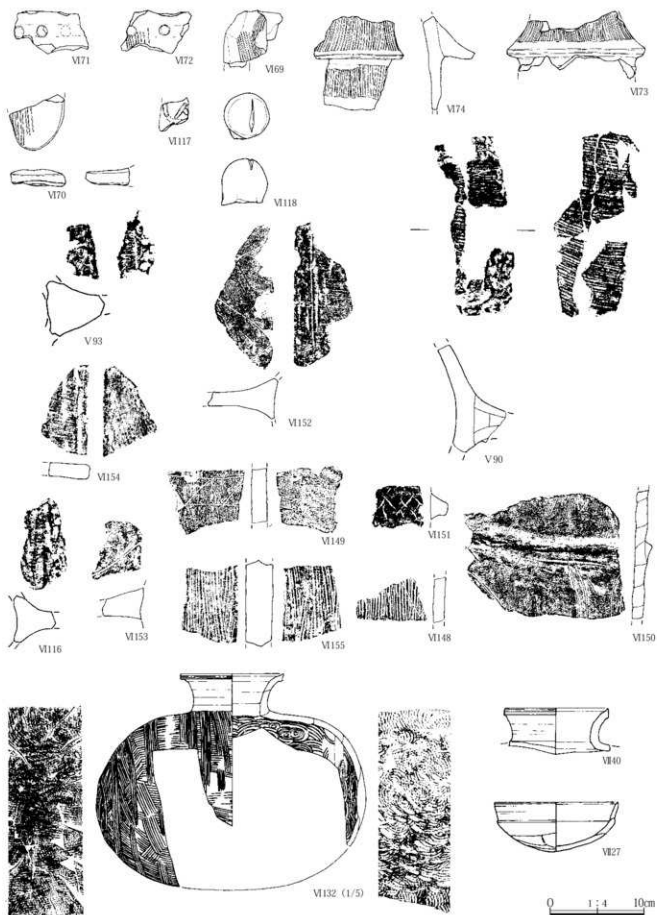
0 1:8 20cm



第20図 藤岡市教育委員会調査時出土円筒埴輪(6)



第4節 七興山古墳の現状と既往の調査と研究成果



第21図 藤岡市教育委員会調査時出土形象埴輪・土器

築造された古墳と推定されている。

### 3 既往の研究成果

七興山古墳についての発掘調査は、本報告の調査と藤岡市教育委員会による3次の範囲確認調査の2回であるが、1の項でも記したよう後藤・相川両氏による考察(後藤・相川1933)や、『群馬県史』資料編3における梅澤重昭氏の論述(梅澤1981)をはじめ七興山古墳や白石古墳群についてはこれまでに数多くの論考が発表されている。七興山古墳の内部主体については情報が全く無いことから、検討の対象となる属性は、墳丘形状、墳丘企画、出土埴輪が中心となり、築造年代やその成立の背景についての論及がなされている。ここでは七興山古墳に関するこれまでの研究動向について時系列に沿って抄録しておきたい。

早くには尾崎喜左雄氏が、七興山古墳の成立について、「緑野屯倉の氏に対する中央政府からのバックアップ」によるものとし、6世紀前半の築造と考えている(尾崎1970)。同7年、甘粕健氏により『日本書紀』の安閑天皇元年(534)の条に記された武蔵国造の乱の記事について、埼玉・群馬県地域の古墳の様相との関連から実証的に吟味しようとした論文が発表されている(1970)。

川西宏幸氏は七興山古墳の埴輪について5世紀中葉から後葉に比定される氏の円筒埴輪編年のⅣ期とした(川西1978)。川西氏の見解は、その後の七興山古墳に対する年代観の検討に大きな影響を与えた。

梅澤重昭氏は、七興山古墳の墳丘形態について、太田天神山古墳や不動山古墳のような5世紀後半に位置付けられる古墳と同種の平面企画が推定できるが、著しく前方部の発達した形態は、5世紀代から6世紀前半に位置付けられるものではなく、その築造年代は緑野屯倉成立後の6世紀後半の時期とした(梅澤1981)。その後、藤岡市教育委員会による調査成果などを踏まえ、築造年代について6世紀中葉に修正している(梅澤1994)。被葬者については緑野屯倉を管理する立場にあったとの考え方を示している(梅澤1995)。

田中広明氏は本報告のAトレンチに近い、後円部後方の内堀内から出土した5条6段と二次調整ヨコハケを施された5条6段以上の構成の円筒埴輪を紹介する中で、七興山古墳の築造年代については墳丘の形状から6世紀

後半とした(田中1983)。

築造企画については飯塚卓二氏により、5世紀末葉から後葉に築造された大阪府土師ニサンザイ古墳(墳丘長290m)の2分の1の規模に造られた相似墳であることが指摘された(飯塚1986)。飯塚氏は七興山古墳の築造年代については5世紀末から6世紀代と考えている。

七興山古墳と同様に土師ニサンザイ古墳と相似関係にある古墳としては、赤塚次郎氏により愛知県斯夫山古墳(墳丘長151m)が挙げられている。赤塚氏は斯夫山古墳の築造年代を6世紀第1四半期とし、その被葬者を継体大王擁立に一定の役割を果たした尾張連氏と考えている(1986)。

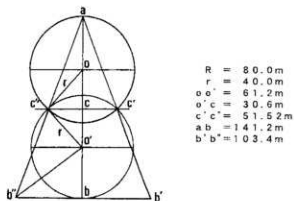
田口一郎氏は群馬県内の前方後円墳における初期横穴式石室の導入を検討する中で、七興山古墳の主体部が横穴式石室である可能性を指摘、その築造年代を6世紀前半と考えた(1989)。

右島和夫氏は、七興山古墳の円筒埴輪の中に二次調整のヨコハケが認められること、中堤から人物、器財埴輪が出土していることが群馬県内の人物埴輪の初現期に限定的に認められる樹立形態であるとの見地から、古墳の築造は5世紀第3四半期から第4四半期にかけてとすることが妥当とした(右島1990)。その後、右島氏は、群馬県内の形象埴輪の組成とその変遷を検討し、七興山古墳出土埴輪の内容との比較からその築造年代を6世紀前半と訂正している(1995)。

白石太一郎氏は円筒埴輪の一部に二次調整のヨコハケを有するものがあることから5世紀末の築造としている(白石1992)。その後の論文の中では、6世紀前半としている(白石2008)。

藤岡市教育委員会による調査の担当をした志村哲氏は、円筒埴輪の様に二次調整のヨコハケメや半円形透孔の存在など5世紀代の古い様相を残しているとしながらも、外堀から出土した須臾器横瓶の特徴を6世紀中葉以前とし、築造年代については6世紀初頭とした(藤岡市教育委員会1992)。『藤岡市史』では6世紀前半と幅を持たせた記述をしている(藤岡市史編さん委員会1993)。

車崎正彦氏は、6世紀後葉に盛期のある低位置突帯の資料が認められる七興山古墳の埴輪について、検討の余地を残しながらも、埼玉稲荷山古墳などに近い年代を与える可能性をあげている(車崎1992)。



第22図 梅澤重昭氏作成七興山古墳墳丘規格図



第23図 飯塚卓二氏作成七興山古墳墳丘規格図

橋本博文・加部二生両氏は『前方後円墳集成』の中で七興山古墳を5世紀後半に比定される集成編年の8期に位置づけた(橋本・加部1994)。その後、加部氏は築造年代について6世紀前半の9期としている(2009)。

高橋克壽氏は、七興山古墳の埴輪が大府日置荘埴輪窯の埴輪群と類似することから6世紀後半に位置づけている(高橋1994)。

坂本和俊氏は、七興山古墳に対する研究史を整理するとともに、出土埴輪の系譜、七興山古墳と関連する氏族、緑野屯倉の経営基盤と幅広い視点から七興山古墳の成立

について言及した。その築造時期は出土埴輪と須恵器・土師器の様相から6世紀中葉から後半とした(1995)。

若狭徹氏は5世紀後半の群馬県西部地域における首長墓系列について考察する中で七興山古墳の成立についてふれている。その中で、5世紀後半の群馬県西部地域では、従来の墳丘企画を継承した100m級の前方後円墳が多数築造される状況にあり、そのような古墳動向の中で、七興山古墳のような新設計企画に基づく盟主墳級の大型前方後円墳が造出されるということを説明することは困難であるとし、その成立は6世紀代に求められるべきとした(若狭1995)。その後の論文の中では6世紀前半に位置付けている(若狭2008)。

猿田II遺跡(埴輪窯)から出土した埴輪群の検討を行った山田俊輔氏は、七興山古墳の埴輪を陶巴古窯址群の須恵器編年のTK10からMT85型式の埴とした。そして、保渡田古墳群と七興山古墳の埴輪の間には型式の断絶が大きく、外部からの埴輪製作に関する新情報が導入されたものとし、今城塚古墳の埴輪にその系譜を求めることが妥当としている(山田2004・2008)。

築造年代についてはこれまでに見てきたように5世紀後半、6世紀前半、6世紀中葉、6世紀後半とそれぞれの説にわかれていたが、範囲確認調査の成果の公表を経て、6世紀前半とする考え方が多くなりつつある。

## 第2章 発掘調査の記録

### 第1節 調査の概要

#### 1 検出された遺構と遺物の概要

後述するように今回報告する調査では墳丘外方に設定した3箇所のトレンチを掘り下げることによりそれぞれから中堤と外堀の一部を検出した。

出土遺物は遺物収納箱(60cm×37cm×15cm)に13箱分出土している。その大半は埴輪である。この中から円筒埴輪143点、形象埴輪53点を資料化し、掲載した。この他に七興山古墳には直接伴わないが縄文土器5点、古墳時代前期から平安時代の土師器6点、中・近世の軟質陶器1点を遺構外出土の遺物として掲載した。

未掲載の埴輪片は円筒埴輪1219点、形象埴輪63点、土師器は23点、須恵器は1点、軟質陶器は2点である。

#### 2 基本土層

本調査時においては調査地点ごとに土層の堆積状態を記録したものの、それらを総合的に整理することは行われていない。中堤の残存上面は「褐色粘質土」に、周堀の掘り込みは「乳白色ローム層」に到達していること、周堀内に火山灰が堆積していたことは残された土層断面の記録から確認することができる。

前掲の第10図下に藤岡市教育委員会が調査を行った際の基本層序の観察内容を参考に提示しておく。藤岡市教育委員会の調査においては各所の外堀埋没土内から浅間B軽石の一次堆積層が確認されている。同教育委員会は1990(平成2)年度の調査に際して、前方面北西隅寄りの北側側面に設定した19トレンチの土層断面の土壌分析を行っているが、榛名二ツ岳渋川テフラの堆積は確認されていない。

また、同じく藤岡市教育委員会の実施した上落合岡B遺跡の調査においては調査区南の深掘り地点の土層の分析が行われている。その結果、浅間C軽石、榛名二ツ岳渋川テフラ、浅間B軽石、浅間A軽石の4種類のテフラが検出されている。

### 第2節 検出された遺構と遺物

#### 1 調査された遺構

##### (1) Aトレンチの調査

Aトレンチは後円部の後方、東側に設定されたトレンチである。設定方向は東西方向である。墳丘主軸線の方は北から西方向に74度振れていると考えられているが、Aトレンチはこの墳丘主軸線よりも約17m南方向の位置に主軸線とほぼ平行するように設定されている。後円部の中心から放射状に延びる位置に設定されているものではない。調査区の西端は墳頂から約32mを測る位置にある。

調査区は、当初、幅1.5m、長さ10mのトレンチを縦列に4箇所設定して、西側から東側に向かって1区から4区と呼称した。西端の1区と東端の4区の掘り下げを行ったところ、1区から埴輪および多数の川原石の出土を見たため、順次、2区、3区と調査区を拡充したことにより、結果的に長さ40mにわたる調査区を調査するようになったものである。

1区からは中堤上面とその外縁部分が検出された。2区は外堀底面から外堀外縁の傾斜面が検出された。

中堤部分の確認面である「褐色粘土質層」の上面には小規模の凹凸が多数認められたが、これは地表面からの攪乱を受けたために生じたものと考えられる。結果的には中堤部分に盛土の有無、埴輪樹立の痕跡を観察することはできなかった。

中堤外縁から外堀底面に移行する傾斜面の角度は土層断面図上で約20度を測り、極めて緩やかに掘り込まれていた。外縁の石積は残存状況が不良であった。原形は後述するCトレンチの石積と同様の状況であったと考えられるが、傾斜面の途中部分に1・2段確認されたにとどまった。使用された川原石は長軸を横方向に向けて置いていた。大きさは不揃いで、長さ0.2mから0.3mを測った。

検出部分の外堀底幅は図上で約5.4mである。掘り込みは「乳白色ローム層」にまで達しており、その形状は平坦である。深さは中堤確認面から90cmである。埋没土中では上半部に黒色土が堆積しており、この層中から埴輪



第24図 七興山古墳墳丘図と調査トレンチの位置

片や川原石が出土している。底面との間には黄色土、ロームブロック、黒褐色土が堆積していた。底面から上方100cmの高さに軽石の堆積が確認されている。底面の標高は約94.4mである。

外堀外縁は内縁の傾斜とほぼ同様の状況で立ち上がっていた。土層断面図上での角度は32度である。斜面からは石積が検出されている。石積に接した掘り込み部分には埋没土に混ざって大量の川原石が入り込んでいた。

内縁の石積が想定される墳丘後部部の企画線上に位置しているのに対し、外縁のそれは列が直線を描いている。その方向は墳丘企画線の描く弧線とは合致しないもので、北から西方向に48度振れた方向である。東端は短く直角に折れているようにも見える。

この石積については調査時には別の古墳が近接して築造されており、その葺石の一部が検出されたとの見解が日誌に記されている。

調査時に石積部分は断ち割られ下位の土層の堆積状態が観察されている。第25図によれば、石積の下位は一度地山の層まで掘り込んだ後に、褐色土、黒色土や白色土、黄色土の混土、ロームブロック、黄色土の4層を10から30cmの厚さで積み上げ、表面に石積を行っていることが認められた。

調査時の所見のようにこの石積が七興山古墳とは別の古墳の葺石であるとすれば七興山古墳の外堀の一部を埋め戻して墳丘が築造されていることになり、その周堀が七興山古墳の外堀を掘り込んで存在することとなるが残された土層断面図にはその記録は見られない。

調査範囲が狭く、石積の基底部が完全に検出されていないこともあり、一定の判断を下すことは困難であるが、これらの石積が後世の所産でないとなれば、この部分に外堀を区切り、中堤と外堤を結ぶ渡り状の施設あるいは張り出し部分があった可能性が考えられる。

石積の検出された立ち上がり部分は外堤の一部と考えられる。検出された部分は外堀と同時に一度掘り下げられた後に、再度、土砂を埋め戻すことにより築成されたものと想定できないであろうか。

調査は2区と3区の間約5mの未調査区が存在する。ここから4区東端までは外堀の外方に設定されたトレンチである。3区では底幅2.5m、深さ0.4mの掘り込みが検出されている。上層から暗褐色土、黄色土、褐色

土の3層が堆積し、これらの上層に2の軽石が堆積していたことが記録されている。外周溝の可能性も考えられるが断定はできない。4区では耕作土以下自然堆積の状況が確認された。

本トレンチの調査により、埋没土中からは埴輪が多く出土したものの中堤上面上の原位置から出土したものは全くなかった。埴輪の出土量が多かったのは1区である。1区からは掲載資料の円筒埴輪1・2、朝顔形埴輪の口縁部5・7、同一個体の肩部と胴部と考えられる8と9など、大型破片が出土している。形象埴輪では144の靴を背負う双脚表現の男子人物埴輪、146の女子人物埴輪胴部、147の人物埴輪胴部が1区と2区から出土した破片が接合している。168の鳥形埴輪頭部がこの調査区からの出土である。2区、3区からも145の男子人物埴輪頭部、151の人物鼻、153の人物頭部破片をはじめとした一定量の埴輪が出土しているが大型破片に復元されたものはない。4区からは埴輪の出土はなかった。

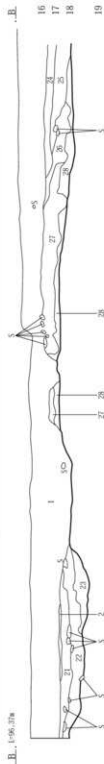
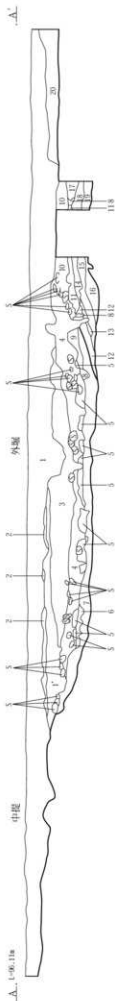
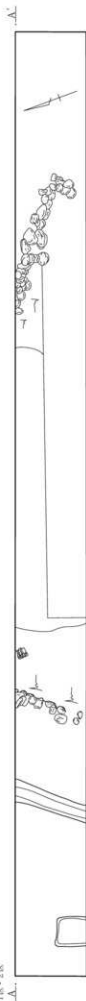
なお、複数の調査関係者の記憶によれば本調査区中から須恵器模倣の土師器杯が出土していたとされるが現存しない。

## (2) Bトレンチの調査

Bトレンチは後部部南東方向に設定した調査区である。概略、後部部の中心から放射状に延びる位置を意図して設定されたものと考えられる。墳丘主軸線の方向から南方向に約45度振れている。トレンチの規模は幅1.5m、長さ約15mである。調査区の北西端は墳裾から32mの距離にある。

検出した掘り込みは外堀と考えられる。掘り込みの底幅は約5.2mである。深さは中堤外縁の残存部上端との差が約1mである。外堀外縁の方は上層からの攪乱を受けて残存状態が悪かった。底面は比較的平坦であるが、中堤外縁の基底寄りで一段深く掘り込まれている状況はCトレンチと共通している。これは、藤岡市教育委員会の調査時に規格溝と呼称されている。中堤外縁斜面の傾斜は約27度、下半部の傾斜は強く、中位に変換点を有し、これより上方は緩やかに立ち上がる。埋没土は暗褐色土である。底面から2層目中には川原石が多く混入していた。

中堤外縁の掘り込みの上端近くから長さ0.3m以上の川原石2石が並んで検出された。石積の一部と考えられ



## Aトレンチ (後円部東方部分) 北壁土層断面

- 1 褐色土 耕作土
- 1' 褐色土
- 2 軽石層
- 3 黒色土 一部に軽石を含む
- 4 黄色土 粘質、軽石の混入が認められる。
- 5 ロームブロック
- 6 黒色土と褐色土の混土層
- 7 黒褐色土 粘質、ローム、黒色土・褐色土が混在する。
- 8 褐色土
- 9 黄色土・黒色土、黄色土の混土層

## 10 黄色土 ロームが多く混入。

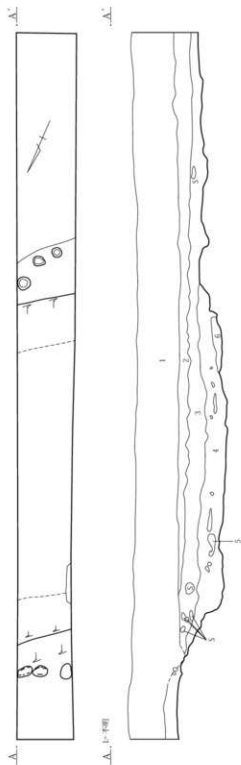
- 11 ロームブロック
- 12 黒色土・白色土・黄色土の混土層 9層に類似する。
- 13 黒色土 しまりない。
- 14 黒色土・白色土・黄色土の混土層
- 15 黄色土を主体とする白色土・黄色土との腐葉土

## 16 褐色土 粘質、軽石の混入はみられない。

- 17 黒色土
- 18 黄色土と黒色土の混土層 腐葉をなした黄色土の混入が多い。
- 19 褐色土 白色土・黄色土を混入する。
- 20 黒色土
- 21 暗褐色土 軽石を混入する。
- 22 黄色土
- 23 褐色土 ロームを混入する。
- 24 暗褐色土 21層に類似、黒色土を含む。
- 25 暗黒色土 やや軟質。
- 26 黄土色土 粘質。
- 27 褐色土 ローム、黄色土が混入し、斑状を呈する。
- 28 褐色土 黒色土を含み、粘質。



第25図 Aトレンチ平・断面図



第26図 Bトレンチ平・断面図

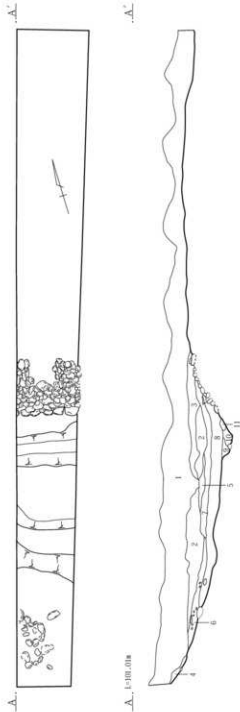
Bトレンチ土層断面  
 1 褐色土 層内土  
 2 黒色土 Aトレンチ3層に相当。  
 3 黄色土 Aトレンチ4層に相当。  
 4 暗褐色土 土質が強い。Aトレンチ7層に相当。  
 5 ロームブロック 4層中に混入する状況。  
 6 黄褐色土



写真1 Bトレンチ土層断面







Cトレンチ (詰堀くびれ部) 西壁土層断面

- 1 褐色土 耕作土、砂質。
- 2 暗褐色土 砂質。軽石を多く混入する。
- 3 褐色土 黒みをおびる。2層が現作を受けたもの。
- 4 褐色土 小礫・砂利を含むが粘性に富む。
- 5 褐色土 軽石を含み砂質。
- 6 褐色土 やや黒みを帯びる。5cm前後の礫と小礫を多く含む。
- 7 黄褐色土 粘性に富むが前層ほど砂質になる。
- 8 黄褐色土 粘性に富むが前層ほど砂質になる。
- 9 黄褐色土 粘性に富む。中に2・3層黒色土が帯状・ブロック状に混入する。9～10層は短期間に堆積した可能性がある。
- 10 黄褐色土 9層に類似する。
- 11 褐色土 やや黒みを帯びる。混入物は9層に類似する。

第27図 Cトレンチ平・断面図



写真2 中壁外縁石検出状況



る。この2石の西側、調査区壁面寄りには小ピットが検出され、中に川原石が入り込んでいた。外堀外縁側の立ち上がりでは上端に沿うように直径0.2mから0.25mのピットが検出された。深さは東側と中央が0.2m、西側が0.3mである。

調査区内から少量ではあるが埴輪が出土している。円筒埴輪では器形を推定できるような大型破片の出土はなかったものの91から107を資料化した。178は形象埴輪基台部である。中堤寄りの調査区西側壁面では中堤から倒れ込んだような状態で大型破片が出土していることが写真撮影されているがこれが178と考えられる。円筒埴輪とした110も178と同形の個体とした方が適当と考えられる。

### (3) Cトレンチの調査

Cトレンチは墳丘南側くびれ部の南方向に設定された調査区である。墳丘調査区の北端は墳裾から37mの位置にある。トレンチの規模は幅1.5m、長さ約15mである。中堤から外堀部分が検出された。調査区北端から南方向に7.8mで中堤外縁の上端に達する。ここまで中堤上面にあたるが、地表面からの耕作他の影響を受け、盛土の有無、埴輪樹立の痕跡などを確認することはできなかった。

中堤外縁の斜面には石積が施されており、一部に攪乱を受けていたが基底部から高さ0.5mまでが残存している。上端は削平を受けている。

基底石は長さ0.2mから0.3mの比較的大振りの川原石が長軸を横方向にして据えられていた。この上に順次小振りな川原石が積み上げられている。上方に行くに従って外面に現れる川原石の面積は小さくなって見えるが、上位におかれた小型の川原石は小口積みされており、奥行きは0.2mほどを有している。検出した面が限られていたこともあり、縦方向の目地は認められない。横方向も下位の川原石との関係を適時調整して積み上げられている。石積の傾斜角度は約31度である。

外堀の断面形状は底面に平坦面が認められないものである。全体にはレンズ状を呈しており、中堤外縁寄りから南側に向かって徐々に浅くなっている。調査区内で外堀外縁部の上端が検出されているのかは不明確である。

底面の中堤外縁寄りには下幅0.3mほどの小溝が掘られている。調査時の所見では比較的短期に埋填した可能

性があると記録されている。中央から南側寄りには下幅0.9m、高さ0.1mほどの靴部が見られる。

外堀の埋没土は下半には7層、8層と黄褐色土の堆積が認められたが、7層の上面には軽石の層が薄く堆積していたことが記録されている。

『群馬県史資料編』3における記述や藤岡市教育委員会の調査所見によれば七興山古墳は北方向に舌状に張り出していた上位段丘面の北縁の一部を切断して選地されているとされる。調査区南側の地山面は直径8cmほど礫を多量に含む暗褐色土である。このような地山の検出状況が先の指摘を証明することになるのであろうか。埋没土下層にはこの地山が崩壊して流入したと考えられる砂礫を含む層が認められる。

底面の標高は中堤石積の基底部で99.17m、小溝の底面で99.02m、調査区南端で99.34mである。

調査区内から少量の埴輪が出土している。111から143として掲載した円筒埴輪は大半が小片であったが、111が口縁部から胴部1段、112が胴部2段の資料で器形を復元することが可能であった。形象埴輪は196を器種不明の個体として掲載したにとどまった。

## 2 出土した遺物

### (1) 円筒埴輪

円筒埴輪には普通円筒埴輪と朝顔形埴輪が見られた。普通円筒埴輪は139点、朝顔形埴輪は4点、合計143点について資料化を行い、掲載した。出土地点別の掲載数はAトレンチ89点、Bトレンチ20点、Cトレンチ33点、出土地不明1点である。資料の選別に当たっては、藤岡市教育委員会による報告の内容を参照しながら全体形状、各部位の形状、器面調整などを考慮し、これに胎土、焼成などを加味して行った。

### 円筒埴輪

**全体形状** 本報告中の資料の中には全体形状を知り得る資料はなかった。これは既述したとおり、調査が幅1.5mのトレンチ調査であったこと、中堤上面の削平が著しく、各資料が原位置を保った状態で出土したものでないことなどに起因すると考えられる。各段の構成についても胴部段数、突帯の本数の全容を把握することはできなかった。一部、残存状態が良好であった個体としては1

の口縁部から胴部3段におよんだ個体、2の口縁部から胴部2段にいたる個体をあげることができる。

**各部位の特徴** 口縁部の直径を復元することが可能であった個体としては1の直径45.2cm、2の直径34.5cm、4の40.2cm、111の直径46.2cmがある。口径の復元からは少数の個体からの類推であるが直径40cm以上と35cm前後の大小2種類の法量の資料が存在していたことが想定される。

器形全体の中で占める口縁部の割合は小さい。立ち上がりの長さは口径の大きい1で18cm、4で17.5cm、112で12.2cm、小さい2で8.6cmである。

口縁部は総じて上半部が外半して立ち上がるものであるが、先端の形状により、単純に外反して立ち上がる形状の口縁（Ⅰ類）と先端の外面に粘土帯（紐）を貼付して肥厚させた口縁（Ⅱ類）に大別される。

Ⅰ類は2に代表される。10から18、91から93も同様の形状を呈する資料と考えられるがいずれも直下の突帯に至らない間で破断しており、朝顔形埴輪の口縁部破片が含まれている可能性も高い。形状は上半部に至り外反し

て立ち上がるものである。2の先端は平面を有している。他に断面形がM字状を呈するものも見られたが、藤岡市教育委員会分類の1a、1dが多数を占めていた。17が1cに近い形状であったが既出資料ほど外縁がつままれて突出していない。26は単口縁であるが先端の内外面に粘土塊の付着が認められる資料である。ひび割れの補修とは異なるようであり、土製品が付属していた可能性も考えられる。

Ⅱ類の貼付口縁については前述のとおり藤岡市教育委員会分類においてはaからmまでの13分類されている。本報告の資料についてこれらの分類内容にあてはめてみるとⅡaからⅡgまでの各形式の事例が認められ、多彩な状況にあった。

胴部の形状は既出資料と同様で、各段とも直径に大きな変化がなく、寸胴を呈するものと考えられる。胴部径を復元することができた個体としては3の直径43.0cm、29の41.2cm、110の直径34.8cm、112の直径38.2cmがある。

底径については6が直径32.2cmに復元された。やや細身であることから朝顔形の一部か形象埴輪の可能性も考えられる。

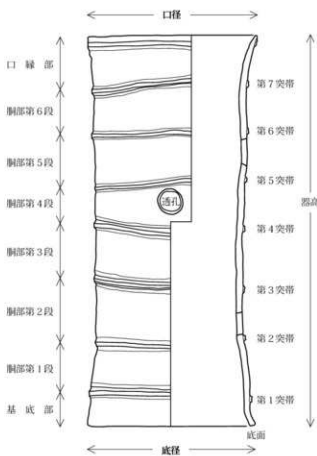
底面については藤岡市教育委員会調査資料の中には板目痕や棒状刺突痕が見られるとされるが、本報告資料においては総じて丁寧なナデが施されている。器厚は1.5から2cmほどである。

**突帯** 突帯の貼付は全体で何条を有していたのかは不明である。4に代表されるように貼付状況は全体にやや粗雑な傾向が見られる。円筒本体に対し水平を欠くものや、波状を呈する資料も少なく無かった。

突帯の発達具合は総じて弱いものが多かった。

突帯の断面形状は台形を呈するもの（台）、中央が凹みM字状を呈するもの（M）、三角形を呈するもの（三）の3者が見られる。台形とM字形の2者は上側の稜が下側よりも突出して高いもの（1）、上下の稜の高さが均衡するもの（2）、下側の稜が上側より高いもの（3）に細分され、分類には台1、台2、台3、M1、M2、M3、三の7細分が可能である。幅は上幅、下幅、両者の割合などでさらに細かな相違が見られる。

実際の掲載資料の中では95個体107本の突帯の中でも断面三角形の事例はきわめて小數で、5本だけであり、断面台形の台1・台2あるいは断面M字形のM1・M2



第28図 円筒埴輪各部位の名称

が主体であった。一個体の中でも断面形状の異なる突帯が貼付された資料も認められた。

突帯貼付について見ると断続ナデ技法Aを採用した資料が認められる。30の残存状況からは最下段の突帯だけでなく胴部中位の突帯にも採用されていることがわかる。28から30・62・67などでは突帯の粘土を粗くナデつけた後にヨコナデを加えているが、突帯下部には団子状の凹凸が残っている。33は特に顕著な事例である。1は突帯貼付後のヨコナデが良好に施されており、下部の凹凸はほとんど認められないが、突帯の上部にヘラ状工具を想定させるナメの擦痕が見られるものである。突帯割付線の可能性も指摘されるものである。

突帯の剥落した部分の器面を観察したが突帯貼付に先立つ刺突、沈線などの割付線は確認できなかった。

底面近くに第1突帯を貼付するいわゆる底部突帯については本報告中にも一定の割合で存在することが認められた。藤岡市教育委員会分類のⅠ・Ⅱ・Ⅲの3分類とも存在が確認できた。本報告資料の中ではⅡの底面から2から4cmの位置に突帯を貼付した事例が多く見られた。

**透孔** 透孔の残存状態が良好な資料は少なかった。その形状は円形を志向するもの正円の形状を呈するものは数で、縦横に変形をきたしたものが大半であった。切開は刀子状の工具で行われている。61は切開面にナデを重ねている。各段ごとの配置については残存状態の関係から検討することができなかった。110は長方形の透孔を有することから形象埴輪の基部である178と同様の器種である可能性が高い。本来は形象埴輪として報告すべき資料であったものであろう。

**器面調整** 外面の調整は口縁部先端のヨコナデや突帯貼付後のヨコナデを除いてタテハケが主体である。一部、27・28のよう、二次的にタテハケが施された事例が見られた。

器面の調整は成形の進行に合わせて一定の高さを目途に、基底部から口縁部に向かって繰り返し行われたものと考えられる。73や74は段間の途中でハケメの開始(終了)が認められるが少数例である。ハケメ調整に使用された工具は複数の種類が見られた。2cm幅の中に見られるハケメの本数は16や123など4点が6本、48や67が16本である。この他は7・8本が41点、9から11本が66点、12から14本が21点であった。

48・64は突帯を挟み、途中で工具が変わっている事例である。

タテハケの他に27・28・50・132ではナメタテハケが施される事例が知られる。44・55・56・58では二次調整のヨコハケが施されている。ヨコハケはタテハケに対し直行するものが多く、幅の狭い工具を使用し、これを周回させたものと考えられる。

内面の調整は1や73では途中で方向が変わるものの、全面にハケメが施されている。これに対し、2や111では口縁部内面にナメ方向のハケメが、胴部内面にナデが施された事例である。

ヘラ記号31・100・102は口縁部外面に、55は胴部内面にヘラ描き沈線による斜線が見られる資料である。106は胴部外面に山形あるいは×印状の沈線が認められる。

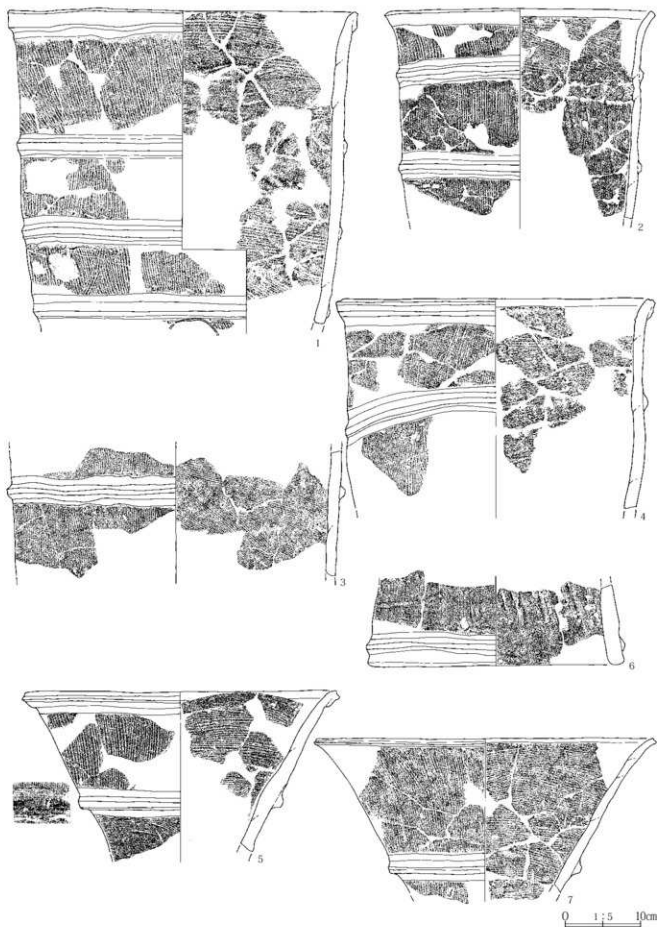
**赤色塗彩** 確実に塗彩が施されたとされる事例は確認できなかった。塗彩とは別に67・70のように器面に黒色の付着物が認められる個体が多数認められた。同様の黒色付着物については藤岡市教育委員会調査資料に対して行われた蛍光X線分析により、埴輪製作後に付着したマンガンであることが報告されている。報告では黒色塗布の可能性が高いことが記されている。今回報告の資料についても同様の成分と考えられる。

**胎土** 胎土は総じて砂粒の混入が目立つものであった。この傾向は形象埴輪についても同様である。169の盾の胎土が精選されていた他は形象埴輪においても砂粒の混入は目立っていた。

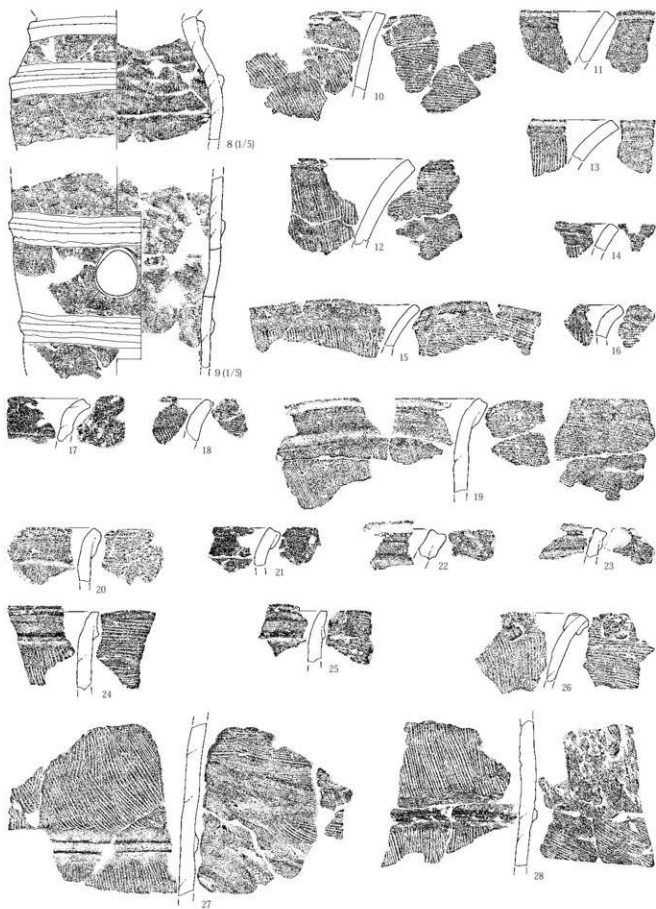
1の観察からは、混入物には礫大の結晶片岩を主体として、礫大の砂岩あるいは泥岩と考えられる堆積岩、石英粒、雲母片、黒色鉱物粒、白色鉱物粒、細砂大の軽石粒などが見られた。結晶片岩は粒径が5mmから1cm近いものも珍しくない。また、錆色をした結晶片岩も含まれている。この他に粗砂大の赤褐色粘土粒の混入が顕著である。海面骨針化石の混入も目視できるが特別に顕著と言えるような状況ではなかった。

30や33では結晶片岩、特に緑色片岩や黒色片岩の混入は少なく、チャートの混入が認められる。他に黒色鉱物粒、白色鉱物粒が多数含まれている。海面骨針化石はほとんど目視できない状況である。

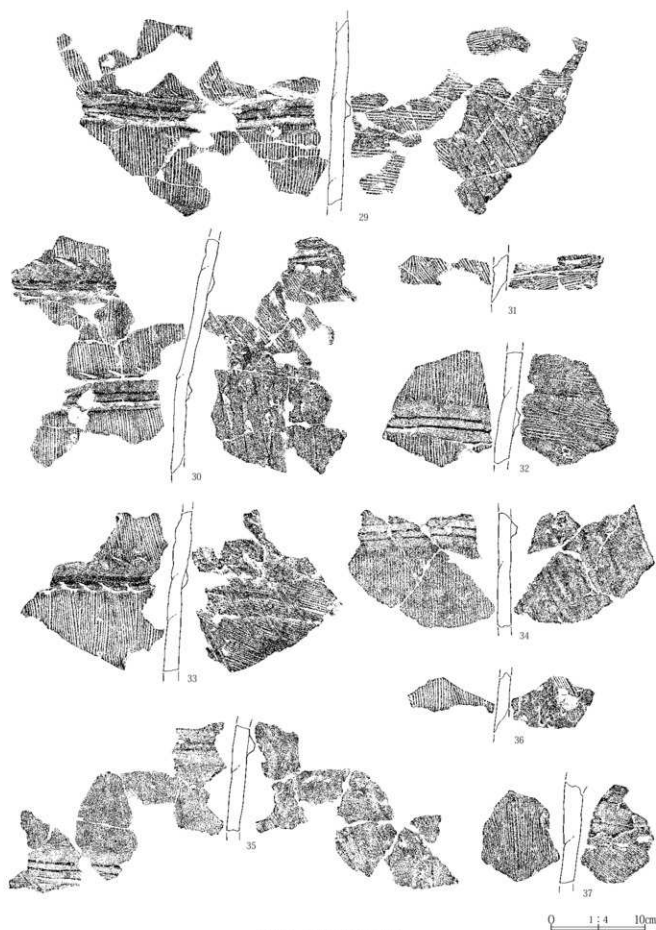
観察表では混入された砂粒の量によりA(多量)、B(普通)、C(少量)に3分類して観察表に記述した。A



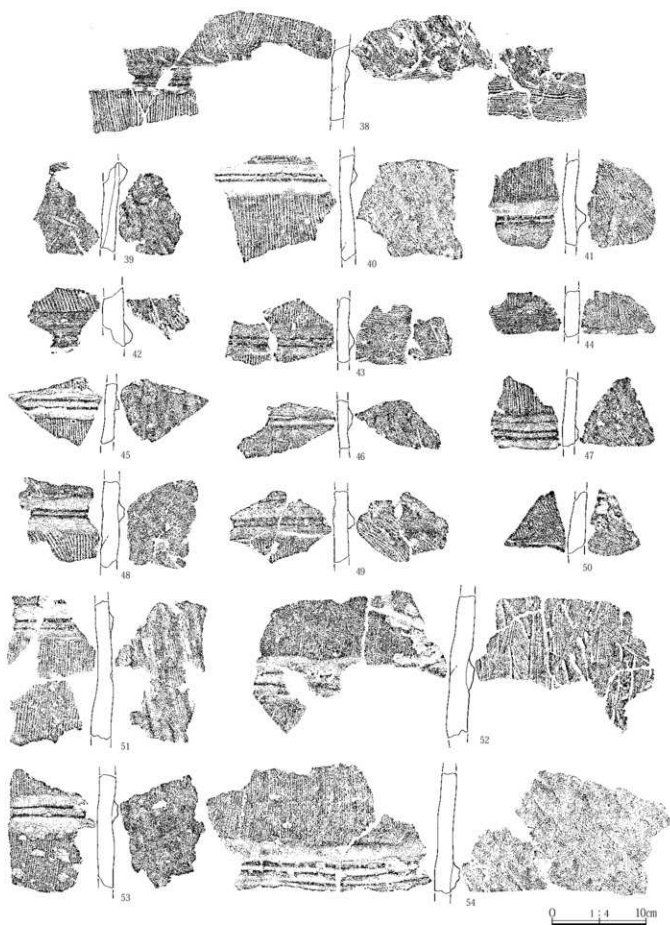
第29図 出土円筒埴輪(1)



第30図 出土円筒埴輪(2)

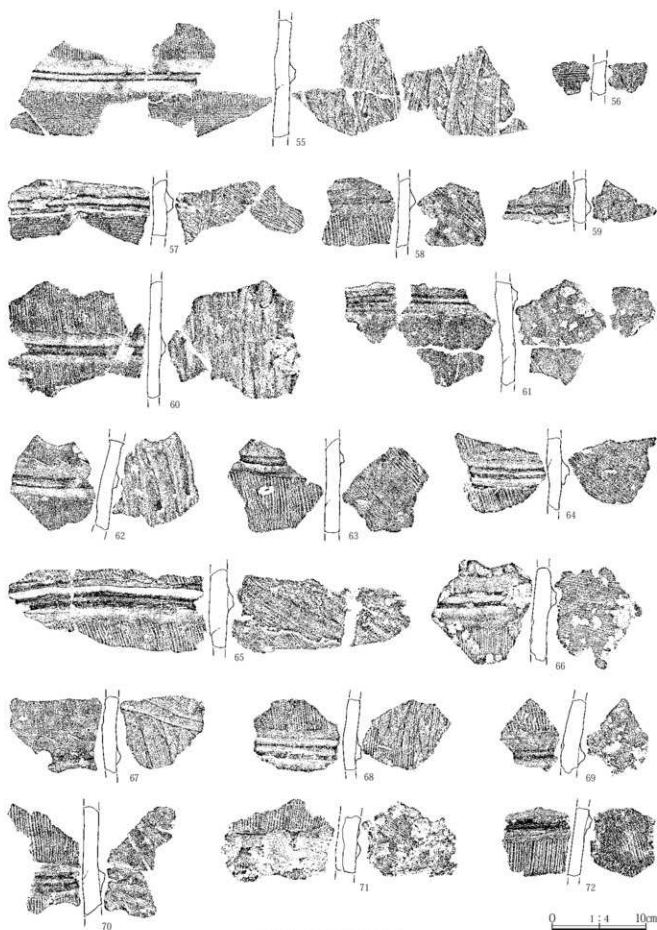


第31図 出土円筒埴輪(3)

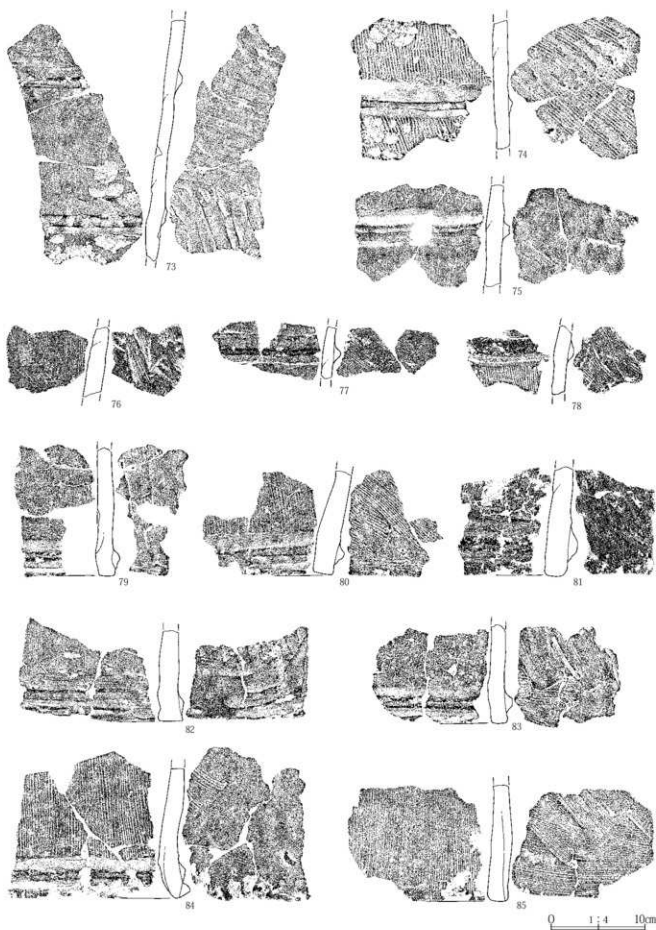


第32図 出土陶筒埴輪(4)

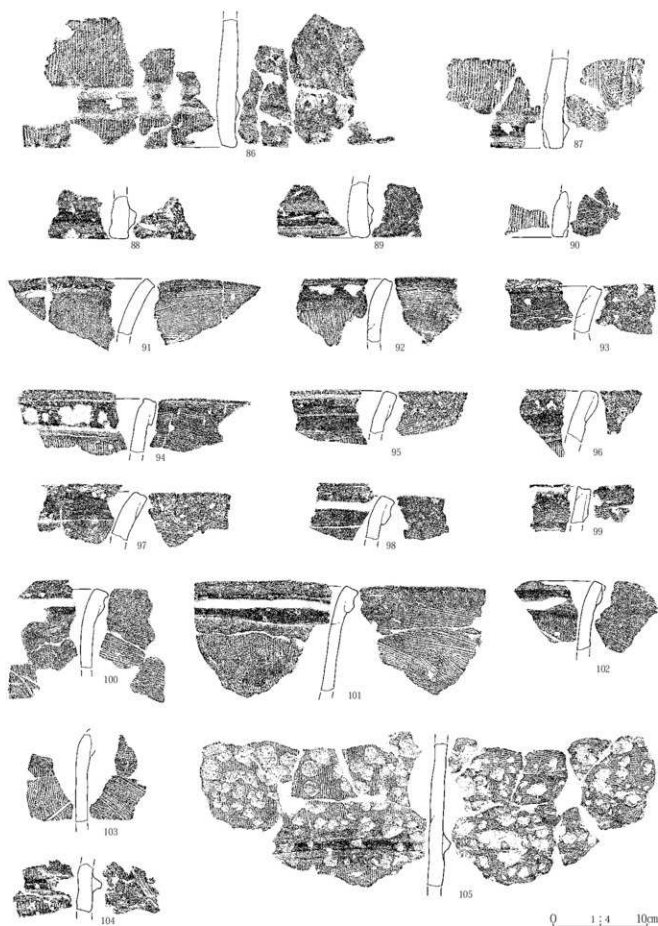




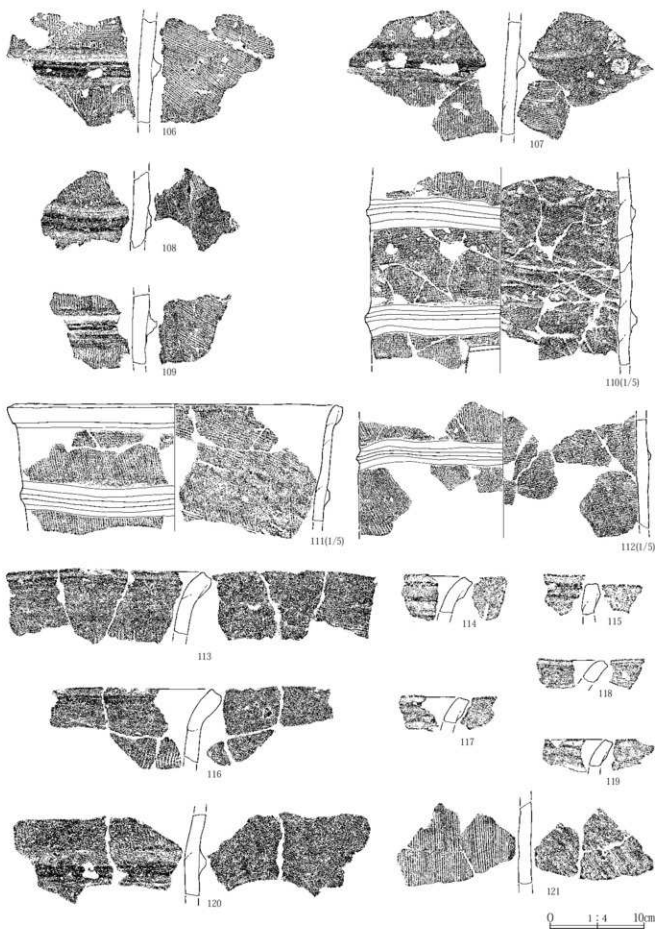
第33図 出土円筒埴輪(5)



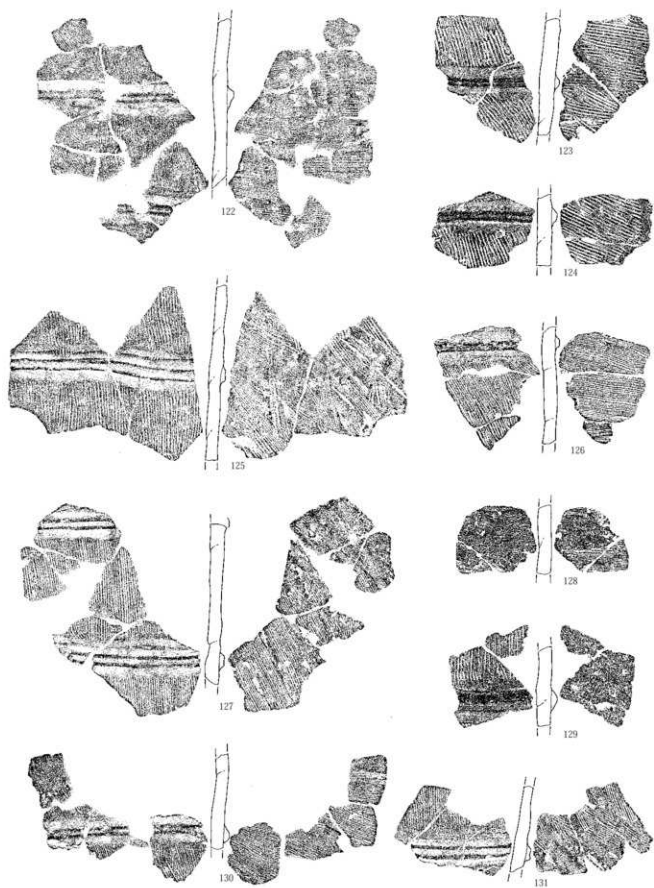
第34図 出土円筒埴輪(6)



第35図 出土円筒埴輪(7)

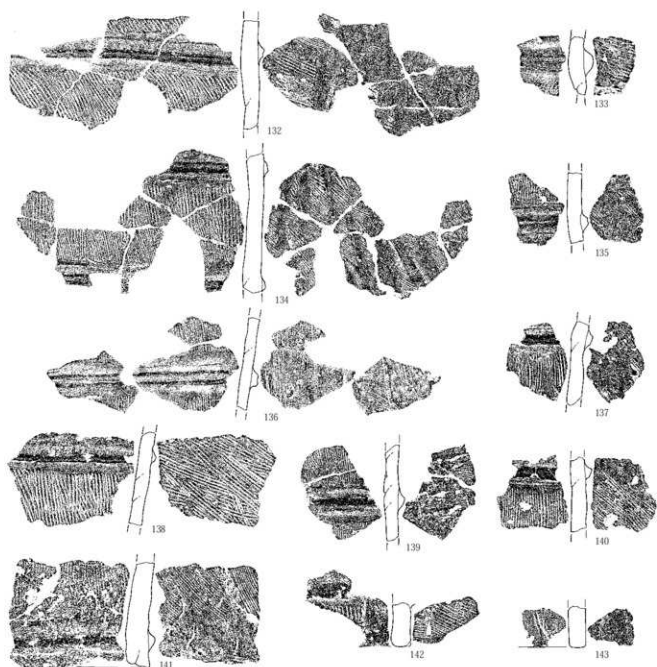


第36図 出土円筒埴輪(8)



第37図 出土円筒埴輪(9)

0 1:4 10cm



第38図 出土円筒埴輪 (10)

として115を、Bとして113を、Cとして12・13をあげることができる。

**色調** 色調は橙色や赤褐色が主体的であった。30や33など一部の資料は若干黄色味を帯びていた。

**焼成** 焼成は、窯室焼成で全体的に良好であった。焼成の度合いをA・B・Cの3段階、硬質の度合いを1・2・3の3段階に分け、これを組み合わせた分類内容を観察表に記述した。49・52・54などのように内面が還元状態を呈し、灰色味を帯びた資料も存在する。

**成形** 成形は突帯の各段間に相当するほどの高さで一作業単位が有ったようで、内面にわずかな接合痕や器面の起伏が残されている。

基部粘土板の高さは藤岡市教育委員会調査資料では3分類されているが、本報告資料では12から15cmほどの高さを有するものが多く見られた。71・74・83・84などには粘土板作成時の工作板に残されていた木目と考えられる圧痕が残されていた。

藤岡市教育委員会調査資料では粘土板の重ねが複数に

およぶものや粘土板を折って基部とする事例が報告されているが本報告資料においては破片資料が主体であったためにその有無については明確にできなかった。

藤岡市教育委員会調査資料に見られた焼成前のびび割れを補修した痕跡を有する資料は見られなかった。

底部調整は認められなかった。

#### 朝顔形埴輪

全体形状を知り得る資料は出土していない。5・7が口縁部、8・9が肩部から胴部にかけての残存である。12も口縁部の破片である可能性がある。胴部、基底部の破片は円筒埴輪と区別ができない資料も含まれているものと考えられる。

**形状** 5・7の資料から口縁部は斜め上方に向かって大きく外反して立ち上がる形状であることが知られる。突帯は全体の中心より下位に貼付されている。先端の形状には5の貼付口縁と7の単口縁との二種がある。

肩部から胴部への形状については8・9により理解される。これによれば肩部の張りは弱く、普通円筒より細身の胴部に移行している。胴部には円形の透孔が配置されている。

**突帯** 突帯の断面形状は断面台形あるいはM字形であるが、普通円筒のそれと大差は見られない。5は突帯上面に布目痕が残されていた。

**器面調整** 口縁部外面においてはタテ方向のハケメが施された後、突帯が貼付され、その周辺にヨコナデが施されており、普通円筒と同様の調整が認められる。内面にはナメヨコ方向のハケメが施されている。

8・9の肩部から胴部上段の器面にはナデが施されている。胴部下段には細かな単位のタテハケが施されていた。内面にはナデ調整が加えられているが、粘土紐の接合痕を消し切れていない。

#### (2) 形象埴輪

形象埴輪は完形に復元されたものは皆無で大半が破片の状態であった。その中でも、144から147の人物埴輪や178の器財埴輪基台部と考えられる資料のように比較的大型のまとまりを呈したのも見られた。

確認された器種は人物埴輪、鳥形埴輪、器財埴輪の盾形埴輪で、その他に器種を特定することができない資料

が多数認められた。本項で報告する資料数は合計で53点である。出土トレンチ別ではAトレンチから47点、Bトレンチから5点、Cトレンチから1点である。この他に人物埴輪の腕のほぞ部分や上衣裾部など12点が出土しているがこれらは小破片であったため未掲載資料とした。以下、本文中では器種ごとに順次、実測図を掲載し、観察の概要について記載していく。個々の資料に付した番号は円筒埴輪からの通番である。個々の観察内容については末尾の遺物観察表を参照願いたい。

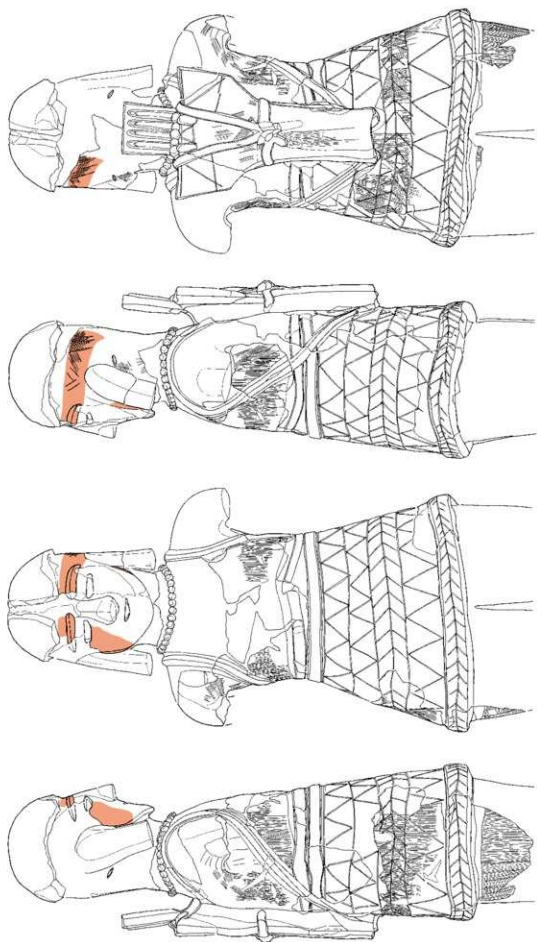
#### 人物埴輪

144から167は人物埴輪および人物埴輪に帰属すると考えられる部位の破片と考えられる。

144は男子人物で双脚表現の立像で背中に鞆を背負っている。Aトレンチ1区・2区から出土した破片が接合されたものである。残存部分は頭部から太腿部分で、残存高は69.2cmである。頭部から腹部までは比較的残存が良好であったが、右腕は上腕から先が、左腕は全てが欠損している。胸部部分も後補である。腰部から下位は前面の大半が後補である。甲冑の草摺表現が見られる。太腿部分も右側後面の一部が残存していただけである。

頭部は縦長で、頭頂部から顎先までは19.1cmである。髪は真中から左右に分けた振り分け髪で、頭部本体に薄い粘土板を張り付けて表現されているが、下端は大きく外反、頭部本体から離れていたと考えられ、原形を保った部分はなかった。148や150が同一個体である可能性があるが接点がなく、別途報告する。髪分け目は額から後頭部にかけて浅い溝状をなして丁寧に表現されている。残存状況から下位の髪は左右に束ね下げ美豆良にしていたことが分かる。下半は欠損している。美豆良の太さは3.5×2.0cmである。右側は全て後補である。

顔は額から顎先までの長さが12.9cmである。幅は目の下端で約12.2cmである。目は横長に切り込まれている。両目とも上まぶたが水平に下まぶたがわずかに弧をなしている。眉あるいは眼窩上突起は横位に粘土を貼り足して表現している。鼻は鼻頭が欠損しており後補であるが鼻筋がとおった端正な造りであったと想わせる。口も上唇が水平に、下唇がやや弧をなして開けられている。顎は頭部本体に粘土板を貼り足すことにより明確な輪部を形作っている。

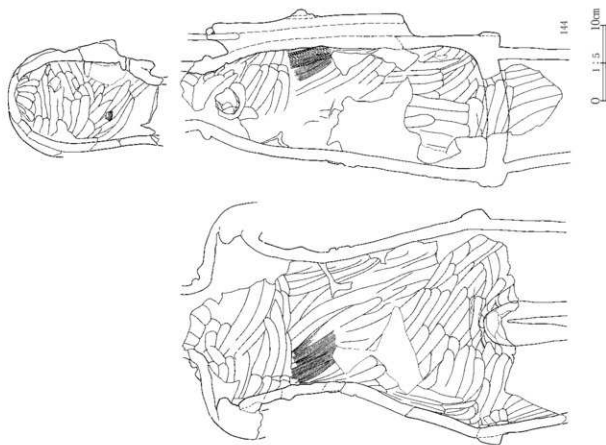


144

0 1:5 10cm

第39図 出土形象埴輪（1）





第40図 出土形象埴輪(2)

耳および耳孔の表現は見られない。左側頭部には美豆良の後側にへら状工具により刺突されたことによると考えられる長さ1.7cmの孔が貫通している。

左肩から美豆良の上端、後頭部には鉢巻状に幅2cmほどの範囲に器面の色調が変化し、黒味をおびている部分が見られる。彩色が施されていた可能性が高い。左目の下位、頬部分も変色している部分が見られる。ここも彩色が施された可能性がある。顎直下の頭部分も黒味をおびている。

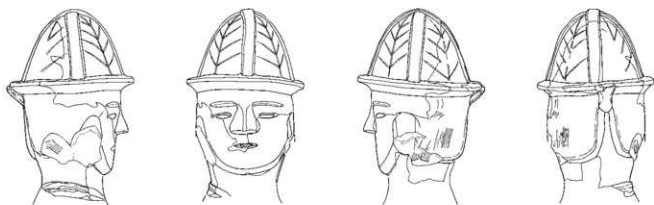
頸には直径0.8cmの粘土粒が貼付され、頸飾りが一周していたものと考えられる。

右腕は肩から先が欠損しているので具体的な所作は不明である。前面には剝離痕が認められる。成形は中央の粘土が肩口から差し込まれており、脇の下側には腕の粘土を支えるための粘土塊が前後に補足的に貼り足されていることが分かる。胸から腹部までの横断面は長円形である。外面にはタテ方向のハケメが見られるだけで具体的な着衣の表現は見られない。左胸の残存部上端には小

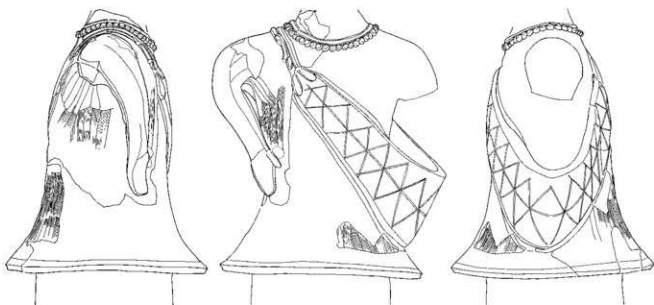
さな粘土の盛り上がりが残されているが何を表現したものであるかは不明である。

背中には鞆を背負っている。矢筒部からとび出した矢尻部分の表現は後補である。矢筒部の残存長は26.1cmで、中位の横幅は7.7cmである。厚さ2cmの側板も取り付けられ、中空の箱形に形成され写実的である。底面は底抜けである。矢筒部の形状は上半には大きく外方に翼状に延びる背板の上板が付いているが、下板は見られず、底面に向かって直線をなしている。上板にはへら描き沈線による文様が見られる。上端の頭には直径1.0cmから1.2cmの粘土粒が5個並んでいる。鎮留を表現したもののか。その下位には左右の両端に爪状の粘土粒が貼付され、この間にへら描き沈線による三角文が配されている。矢筒部外面には幅1.0から1.3cm粘土紐が貼付されている。中位には横方向の粘土帯が貼り付けられ、上下を2分している。これに肩の方から斜めに下がった紐が重なり、結び目を作り、端部は垂れ下がっている。

人物本体の背中には背負紐が幅1.2cmの粘土帯で表現



145



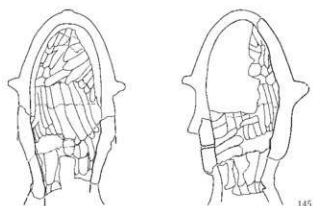
146



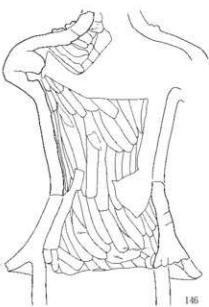
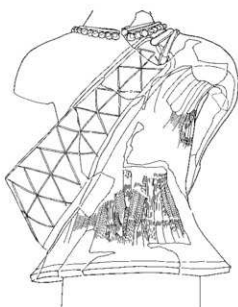
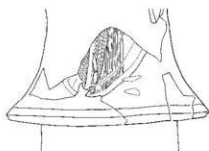
147

第41図 出土形象埴輪(3)

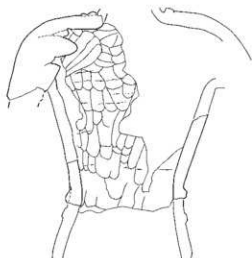
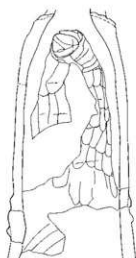
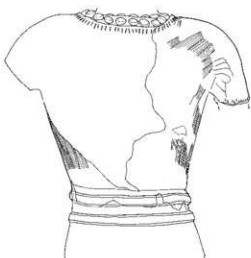
0 1:5 10cm



145



146



147

第42図 出土形象埴輪(4)

0 1:5 10cm

されている。両肩を越して脇の下を通り、矢筈部下端に戻ってくるものである。左右の紐の貼付状況は必ずしも均等でないことが分かる。また、人物本体の腰部には2本の粘土紐がめぐっているがこのうちの1本、上位の紐は鞆に付属するもので、腰に結びつけるための紐を表現していると考えられる。腹部に見られる剥離痕は結び目があった可能性を示している。

下半身は甲装で草摺が表現されている。上端は幅1.5cmから2.5cmの粘土紐が1周している。裾部分は粘土帯を幅2.5から3.5cmにわたり貼り、肥厚させている。この部分には綾杉文が充填されている。本体は横方向のヘラ描き沈線により4段に区分されている。上位の2段と最下段は各段内を沈線で細分して、三角文が配されている。上位から3段目だけは綾杉文の文様が配されている。

草摺の前面はその大半が欠損していることから、各種装具の装着については把握することができない。右側側面の中位に縁部が丸みをもつ粘土粒の残存と紐状の粘土が剥離した痕跡が認められるが具体的な意匠については不明である。

下半身は膝上部上位の一部が残存していただけである。筒状に成形した脚部2本を草摺の裾部直下で一体に接合している。外面にはハケメ調整が施されている。

内面の成・整形について述べると、顔側の内面は顎の部分が頭部から外側に張り出している。これに顎の部分だけに粘土を足し、顔の輪郭をつくっている。器面はナメヨコ、あるいはヨコ方向に指頭によるナデを施している。強い調子でナデしているため指一本一本の単位が比較的明瞭に残っている。成形の単位は口の切り込み部分と振り分け髪を貼る高さの2箇所に大きな区切りが認められる。草摺裾の部分は脚部2本をブリッジ状につないだ後、裾部を一周するように粘土紐をまわして成形をはじめている。成形は4回ほどの工程をへて頭部に達しているようである。そのつど、ナデの方向が少しずつ変わっている。内面は全体的にヘラナデであるが胴部上位の一部にハケメが残されていた。器面は全体に磨耗している。

145は男子の頭部部分である。Aトレンチ2区からの出土である。頭部に被る帽子の前面、顔の目より上位、額部分は後補である。鼻部分も欠損していた。残存高は23.9cmである。

帽子は短い跨を有し、頭部は尖っていたと考えられる。頂部から後方下端に垂下する幅1.7cmの扁平な粘土紐を貼付することにより左右に2分されている。おそらくは十字に粘土紐が垂下することにより4分割されていたと考えられる。帽子の器面には各区分ごとに綾杉文状の文様がヘラ描き沈線により施されていたと考えられる。跨の後側には髪分け目にかけて粘土紐が貼付されている。上端が欠損するため、断定はできないが髪を小さく束ねて、はね上げた可能性も考えられる。

顔の長さは帽子の跨から顎の先端までが11.2cmと推定される。幅は目尻部分で12.8cmである。髪は左右に2分し、顔の両側には下げ美豆良を垂らしていたと考えられるが左右両方とも基部で欠損していた。後頭部は粘土板を貼り足し、髪分け目が明瞭に表現されている。顎も頭部本体に粘土板を貼り足し、顎骨部分を表現する成形である。

目は横長に木の葉状に切り込まれていたものと考えられる。耳の表現は不明であり、耳孔は開けられていない。ただし、顎に接する位置の美豆良とは異なる剥離痕が認められることから耳環が裝飾されていた可能性が考えられる。口も木の葉状に切り込まれていた。

右側の頸には幅1cmほどの粘土紐が残存していた。頸飾りの装着を表現したのと考えられる。

器面は全体に磨耗が著しいため、帽子・顔面の彩色の有無を判別することが困難であった。左側の美豆良基部は黒色味をおびている。

内面の成・整形について述べると、頭部内面は全体的にタテ方向のナデが施されている。口が穿たれている高さで帽子の跨の部分の2箇所に調整の変換点が見られる。口から下位は顎部分から立ち上げた後、丁寧にナデしている。口から帽子までの間は後頭部内面が長いピッチでタテ方向であるのに対し、顔の内面にはヨコ方向のナデが施されていた。帽子の部分は指で押さえるようなナデである。頭部の径が小さくなるにつれて、粘土の接合痕が消しきれていない。

146は女子半身像である。Aトレンチ1区および2区から出土した胴部を中心とした破片が接合したものである。頭部は欠損している。基部も欠損しており、出土破片中にも本資料に対応すると考えられる個体は認められなかった。残存高は34.5cm。肩から指先までの長さは

21.7cm、上衣裾部の復元径は直径26.1cmである。

残存箇所は頸部から右肩・腕、胸部分上着の下半右側と背中側の広い範囲である。左肩・腕は欠損している。左手の延長方向は全く不明である。

頸は幅0.7cmほどの頸飾りにより装飾されている。粘土紐が一周しており、粘土紐の直下には直径0.8cmほどの粘土粒が並んでおり、紐に通された、あるいは紐から垂下する玉類が表現されたものと考えられる。

右手は中実の棒状品を曲げ、棒状に成形した先端を肩口に差し込んで接合している。手は右斜め前の腹部にそえられている。手のひらは親指を単独で造り、他の4指は一括してミトン状に造作されたもので、ヘラ描き沈線による区分もなされていない。

右肩から左脇腹・腰にかけては襷をかけたことがわかる。襷は上端につけられた2本の紐によって肩から下げられており、幅0.7cmから0.8cmの2本の粘土紐が貼付されている。この2本の紐は胸側では3本に増えている。中位に粘土の盛り上がり、剥離痕が見られる。胸部の器面上に剥離痕を見出すことはできないが結びの表現がなされていたことも考えられる。

襷本体は胴部本体に薄い粘土板を重ねて成形されている。上端の幅が約5.5cmで下方に向かって徐々にその幅を広げている。左側面は欠損していたが胴部本体に残された剥離痕から袋状を呈して前面にまわっていたものと考えられる。器面にはヘラ描き沈線による文様が施されている。

上着は下端に向かってラッパ状に外反している。端部は面をなして終息している。残存部分の観察からは襟元の表現や袖口の表現などは認められない。腰に帯の表現もなされていない。腕から手のひらには丁寧なナデが施されている。肩部以下は右肩の後方、肩甲骨付近はナデが見られる。他はタテ方向のハケメが重ねられている。

内面の成・整形について述べると、器面は基部との接合部分、上衣の裾が斜め方向に延びる部分で大きくくぼんでいる。他にウエスト部分、胸の横断面の基線部分で小さくくぼんでおり、7cm前後、粘土紐3本ずつの高さで成形の単位があったことがうかがわれる。

器面は全体にわたりナナメタテ方向の指ナデが施されており、胴部下位から腕の付根までが4回に分けて調整が加えられている。成形の単位と合致している。指の動き

は内面の右から左に向かって(腹から背中を見た場合の)動いている。ハケメは全く見られないが、わずかに粘土紐の接合痕を消しきっていないものもある。

肩部分は接合部分を外側からナデで器面調整した後、外側から差し込んだ腕の先端(柄状)をつぶすことなく外面側からおさえこむように肩に接合している。脇の下には胴体との間に粘土塊を入れて補強していることが見て取れた。

頸部分は最終的にナデ調整を加えているが、その前にヘラで器面を削り落としている。

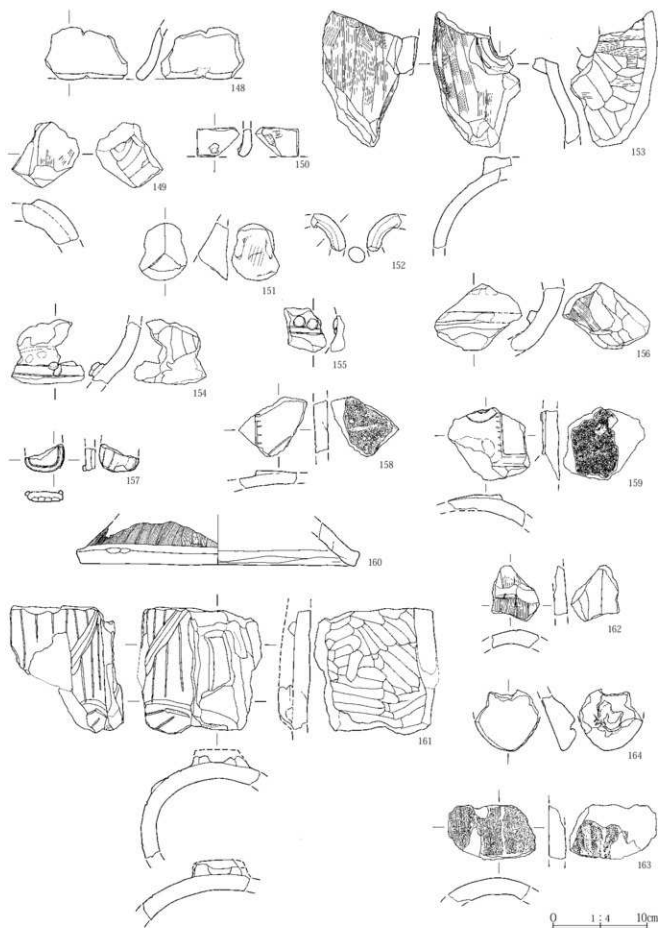
147は人物の肩から腰部分である。Aトレンチ1区、2区から出土した破片が接合したものである。145と類する点があるが直接接合する点はない。左胸部分に乳房の表現が見られないことから男子の可能性が考えられるが断定できない。後補の部分が多く含まれている。残存部分は右肩から背中の右側部、そして腰部前面の部分と左胸から脇腹部分が腰の背中側でかろうじて接合している。右腕は二の腕の上位までの残存である。左肩・腕は全て後補である。半身像と考えられるが残存部の下端が腰部までであることから全容を確認するにはいたらなかった。残存高は31.5cmである。脇の下部で横幅21.4cmを推定される。胸部の幅15.3cm、厚さ16.0cmである。頸には直径0.9cmの扁平な粘土粒2個が残存しており、頸の周りを頸飾りが一周していたと考えられる。

頸飾りの外側には、0.5cmほどの厚さで粘土を貼り付け、縁取りが造られ上着の襟元が表現したものと考えられる。これに沿ってヘラによる刻みが周回している。左胸の部分には着衣の合わせ目の表現はない。その他の部分の観察からも着衣の文様について見出せなかった。

右腕は中実で棒状に成形した部品の先端を肩口に差し込んで胴部と接合する方法は他と同様の方法である。残存部下端は弱い稜をなしており、上着の袖口が表現されている。襟元と同様、ヘラによる刻みが一周していたと考えられる。

腰には幅1.3から1.8cmの扁平な粘土紐2本が1.3cmの間隔を保って貼付されている。両者の間には特段文様などは施されていない。2本の粘土紐は帯を表現したのと考えられ、2本の細帯、あるいは太帯の上下両端の縁取りを表現したのと考えられる。

腰の残存部分には帯の上下に剥離痕が認められる。右



第43図 出土形象埴輪(5)

側面の剥離痕は上腕部から腕が延びた位置にあたることから、右の手のひらが腰部に添えられた痕跡である可能性が考えられる。帯周辺の彩色については不明であるが、一部の器面には黒色の付着物が見られる。

腰部前面には下位の粘土紐の上に粘土の重なりが見られるが上端が欠損している。この左腰寄りには下位の粘土紐と重なり、下方に延びる幅5cmの剥離痕が残されている。また、右腰寄りには下位粘土紐の直下に広範囲にわたる剥離痕が見られ、付属品が剥落してしまった痕跡と考えられる。結んだ帯の端部、大刀、鏡などが推測されるが断定するにはいたらない。

外面の調整は肩から腕にかけてナデが施されている他はタテ方向のハケメが重ねられている。

胴部内面は全体的に器面が磨耗しており、調整痕が確認しにくくなっている。帯より下位についてはナナム方向のナデが施されている。胴部から胸部は短い長さの単位で器面を押さえるようなナデが連続している。

腕を結合する際、肩部分は袖口から手を入れたように内側から肩口に向かってナデがくり返されている。肩の内面は手が届かなかったのか、粘土の接合痕が消しきれていない。

148・150は振り分け髪の一部と考えられる。144の人物埴輪に帰属する可能性が考えられるが接合点が見られないので別掲載とした。

149も振り分け髪の一部である。144とは別個体である。

151は頭部本体から剥落した鼻である。144・145と比較して大型である。152も人物の頭部破片である。151・152の破片から大型の顔を表現した人物の存在が想定され、盾持ち人が樹立されていた可能性が高い。152は耳環である。

154・155は頭飾りが装着された頭部分の破片である。156は肩をめぐる粘土紐と考えた。157は手甲を装着した手の甲と考えられる。4指の表現が見られる。144との識別は困難であった。158・159は上着の重ねの一部と考えたが馬装の可能性も検討する必要がある。

160は半身像の上着の裾部が残存したものと考えられるが、器財埴輪蓋の笠部裾の可能性を検討することも必要である。

161は挂甲表現の人物埴輪の一部、上半身下半から腰部が残存したものと考えられる。横断面は円形より長円

形を呈することも考えられる。粘土板を貼り付け箱形に成形した付属品は粘土紐を伴っている。胡蝶の可能性が考えられるが、なお検討を必要とするところである。

162・163は脚部の可能性を考えたい。164は双脚男子の脚部からはずれた爪先か踵と考えた。

165は人物の下半身部分の大型破片である。鞘に入った大型の刀子が装着されている。

166・167は縦横に突帯が貼付された形象埴輪の基台部である。166は筋肉が厚く、小口面と思われる面に円形の透孔を有している。一案は椅座する人物埴輪の基台部とすることができる。もう一案は家形埴輪の壁体あるいは基台部が考えられる。167も横断面が弧をなす破片である。突帯の交点に円形の貼付文が見られる。

人物埴輪は144の朝負男子人物、145の帽子を被った男子人物、146の環状の櫛をかけた女子、151・152の盾持人、161の挂甲武人、165の刀子を装着する人物、147の人物の最低8人の存在を確認することができた。

#### 鳥形埴輪

168は鳥の頭部破片である。嘴が欠損していることから種類は断定できない。右側面(鳥本体から見て)にのみ線刻が加えられていることからこの面が正面であったと考えられる。成形が中実で小型品であることから人物埴輪の付属品である可能性が考えられる。

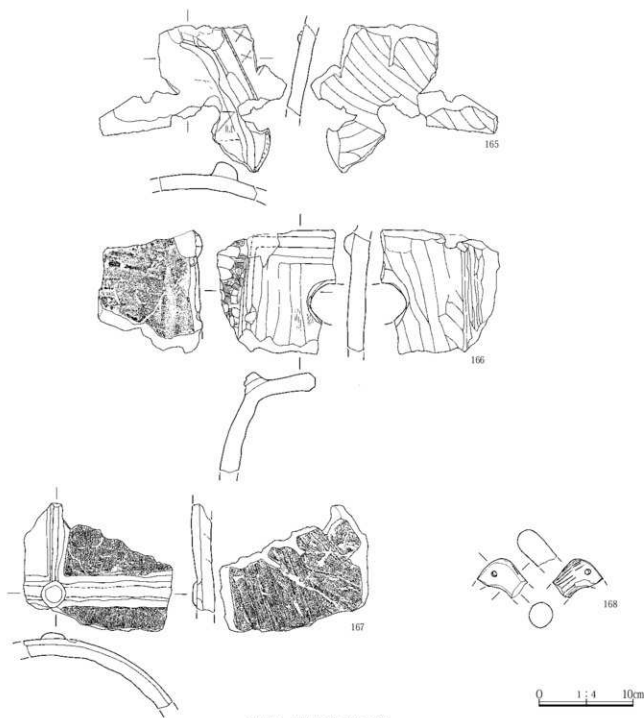
#### 器財埴輪

器種の確認できた資料としては盾がある。169は山形を呈する上辺部の破片である。ヘラ描き沈線による鋸歯文が配されている。173も盾面の下端から基部にいたる大型片である。突帯の上位にヘラ描き沈線による山形文とこれに重なる赤色塗彩が認められる。側部には鱗状に突出する盾面が剥離した痕跡が認められる。盾持ち人の盾面として考える必要もある。

171・172は小破片である。ヘラ描き沈線が見られることから盾を含む器財埴輪の可能性が考えられる。

174は円筒部の外面に鋸歯文あるいは波頭文がヘラ描きされている。残存部下端にヨコナデが見られることから狭い段間に文様が配されていたことも考えられる。器財埴輪あるいはヘラ描きの施された円筒埴輪と考えられる。175から177は小破片であるが外面に174と同様のヘラ刻き沈線が認められる。

178は器財埴輪の基台部と考えられる。本体部分は欠



第44図 出土形象埴輪（6）

損しており、器種は不明である。基底部も欠損しているが残存最下段が基底部であった可能性が考えられる。

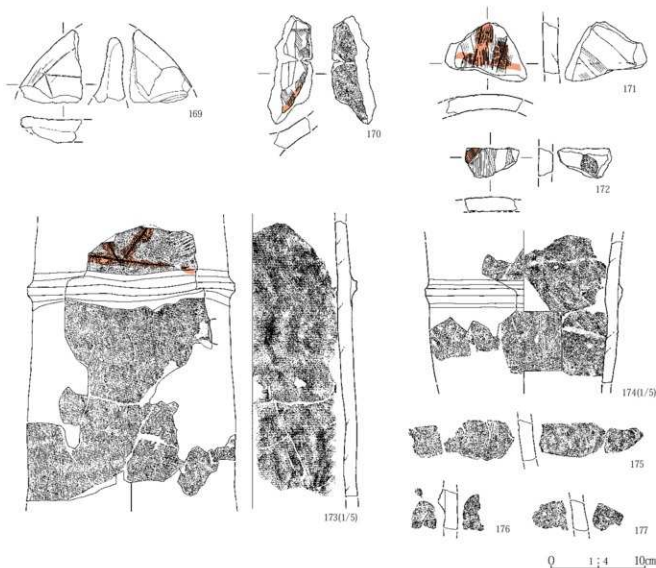
残存部は90.0cmを測る。胴部は突帯により区分され、6段分が残存するが各段ともいずれかに欠損部分がある。全体の形状は円筒状を呈するが、上位に向かって徐々に直径を狭め、残存最上段は弱く内彎ぎみに立ち上がっている。最下段の復元径は26.7cm、最上段は24.9cmである。各段の割り付けは最下段から順に16.9cm、14.8cm、

16.6cm、13.2cm、14.2cm、14.3cmである。

突帯は比較的均整を保って貼付されている。断面形状は弱いM形を基本としているようであるが最下段のそれは上縁が不明確で断面三角形に近い形状である。

透孔は最下段から数えて3段目の段間中位に直径3cmの円孔が配されている。4段目から6段目までの3段には段間いっぱい長方形の透孔が各段一対ずつ配されている。5段目は4段目とほぼ90度ずれているが、5段目、





第45図 出土形象埴輪（7）

6段目の関係はやわずれて精美さを欠いている。

器面の調整は磨耗が著しいものであったが外面には調整のハケメが充填されている。内面にはナデを主体に一部にハケメが認められる。

外面のハケメは最下段から3段目までがタテハケである。4段目は中位からナナメタテ方向に変わる。5段目はナナメタテハケあるいはナナメハケである。6段目は1単位の長さか短いナナメヨコハケ、ヨコ方向のハケメである。

内面は3段目から4段目にかけてナナメ方向のハケメを残す他は下半部がタテ方向の、上半部がヨコ方向のナデが丁寧に施されている。第4条から5段目の外面に黒色の付着物が認められる。

成形は高さ10cm程を1単位として8・9回で残存上端

にいたっている。器肉はほぼ一定である。

179は外面のハケメの方向がナナメ方向であることから178と同様の器種の一部と考えた。180・181は直線をなす、ヘラ切り痕が見られることから直方形の透孔の一部と考えた。

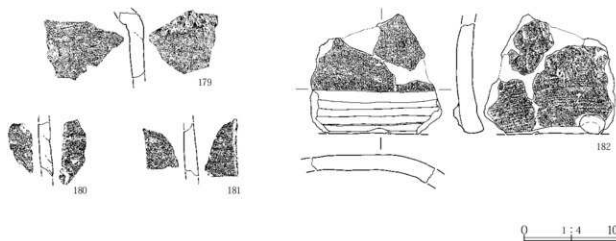
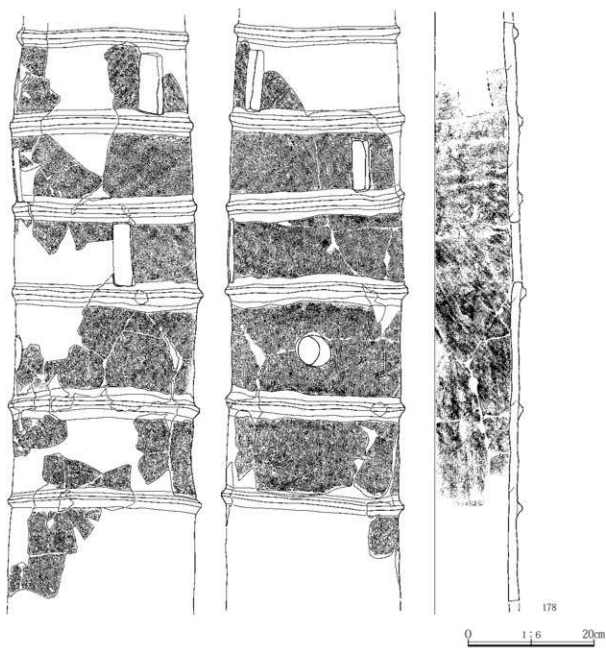
182は低位直突帯の基底部破片である。残存部の横断面形状の曲がり具合から家や椅座像の基台部の可能性を考えたい。

#### 器種不明の形象埴輪

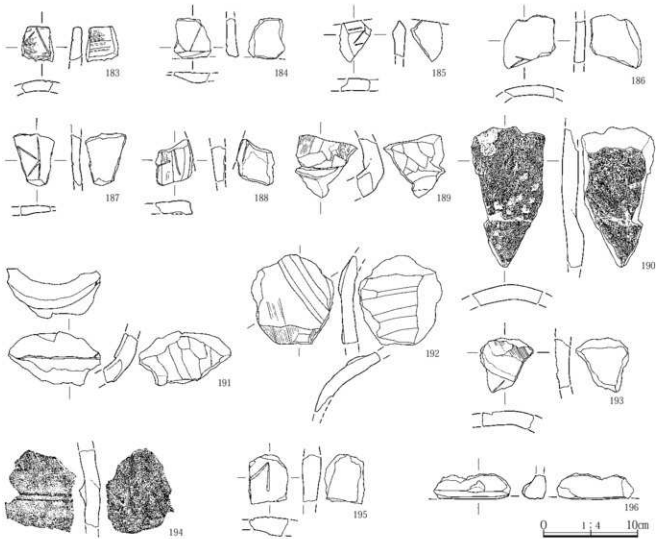
183から196は形象埴輪の破片であるが器種が特定できない資料である。

183は薄い板状を呈する。

184から188は板状の破片で本体から剥離したものである。いずれも器面にヘラ描き沈線が施されている。人物



第46図 出土形象埴輪(8)



第47図 出土形象埴輪(9)

の付属品の可能性が考えられる。

189と191は細部に相違があるものの屈曲して立ち上がる。本体の外面に薄く粘土を貼り足し、弱い稜をなしたもので、ナデが加えられていない。

190は筒状を呈する。

192は弱く弧をなす破片で、外面に粘土帯2条が貼付されている。馬の一部の可能性が考えられるが断定できない。

193、194は外面にヘラ描き沈線が見られる。

194は突帯を有することから174に類似するものか。

195は外面に幅広い剝離痕が見られる。

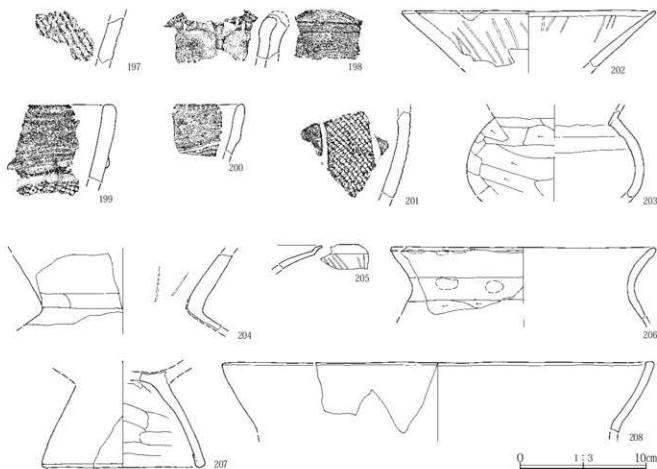
196は裾部と考えたが、円筒埴輪の口縁部先端の可能性もある。

### (3) 遺構外出土の遺物

3箇所のトレンチ調査に際し、七興山古墳と直接関わりのないと考えられる遺物が少量出土している。本項では縄文土器5点、土師器6点、軟質陶器1点を掲載した。

197から201は縄文土器で、いずれも深鉢の破片と考えられる。197は胴部破片である。出土地点は不明である。器面にはLR縄文を施文する。胎土中に繊維を混和する。色調はにぶい橙である。前期黒浜式に帰属すると考えられる。198は口縁部破片である。出土地点は不明である。波状口縁を呈していたか、突起部分は欠損している。器面には隆帯が貼付され、刻みが重ねられている。色調は褐灰である。時期は中期阿玉台式と考えられる。199は口縁部破片である。出土地点はAトレンチ1区である。先端直下に微隆起線文がめぐる。これより下にLR縄文が施文されている。色調は明褐である。時期は中期加

第2章 発掘調査の記録



第48図 遺構外出土の遺物

曾利 E 式である。200は口縁部破片である。出土地点は C トレンチである。波状を呈していたか。器面には縄文が施される。色調はにぶい黄橙である。時期は後期の可能性が考えられる。201は胴部破片である。縦位に垂下する沈線区画内に L R 縄文が施文されている。色調はにぶい黄橙である。時期は中期加曾利 E 式である。

191から196は土師器の破片である。202は A トレンチ出土の高杯である。203は B トレンチ出土の小型の壺か埴である。204は A トレンチ出土の壺である。205は A トレンチ出土の壺の可能性が考えられる。206は甕である。出土地点は不明である。207は B トレンチ出土の台付甕である。S 字状口縁台付甕の一部と考えられる。206は平安時代の所産、それ以外は古墳時代前期に帰属すると考えられる。

208は軟質陶器内耳鍋の口縁部の破片である。A トレンチ 1 区からの出土で中・近世の所産と考えられる。

191から208については巻末の遺物観察表も参照願いたい。

## 第3章 調査成果と整理のまとめ

### 第1節 調査の成果

最初に今回のトレンチ調査で確認された成果を再述しておく。後円部後方に設置したAトレンチにおいては中堤東側から外堀の掘込みが検出された。中堤上面は既に削平を受けており、埴輪樹立の様子を確認することはできなかった。外堀の底幅は検出長で5.4mである。後円部径との直交関係で見ればこれより狭くなるものと考えられる。中堤外縁、外堤内縁ともに立ち上がりの傾斜面に石積が施されていた。中堤側の石積みの位置は藤岡市教育委員会が想定した位置とほぼ合致するものであった。

注意されるべきは外堤側の石積である。この部分の石積みは、第25図の土層断面の記録にあるように、一度掘り込んだ部分を埋め戻し(10から19層)、その傾斜面に積み上げられたものである。狭い範囲の検出であったので完全に断定はできないが、石積みの方向は中堤側のような弧をなさず、直線と隅部からなるように見える。調査の所見にはないがこのトレンチの北側に中堤と外堤を連結する渡り状の施設があった可能性が考えられる。

渡り状の施設が検出された事例としては安中市薬瀬二子塚古墳において前方部両隅と後円部の主軸線上で内堀部分の掘り込みが浅くなっていることが指摘される。前橋市中二子古墳でも前方部寄りの2箇所に通路状の渡り施設が検出されている。高崎市綿貫観音山古墳でも外堀施設の前方部北東隅と後円部後方部分の掘り込みが浅くなっていた。前方後円墳の周堀全体が調査対象となることは皆無であることから証明することが困難であるが、同様の事例が他にも認められるものと考えられる。

なお、このAトレンチでは外堤外方にも掘り込みを確認したが時期、性格ともに不明である。藤岡市教育委員会が前方部前面で検出した外周溝との関係についても判断できない。

後円部南東方向に設定したBトレンチでは外堀の掘り込みを確認した。検出した底幅は5.2mである。中堤の傾斜面では残存状態が不良であったが石積の基底部分を

検出した。外堤側では小ピットが検出された。

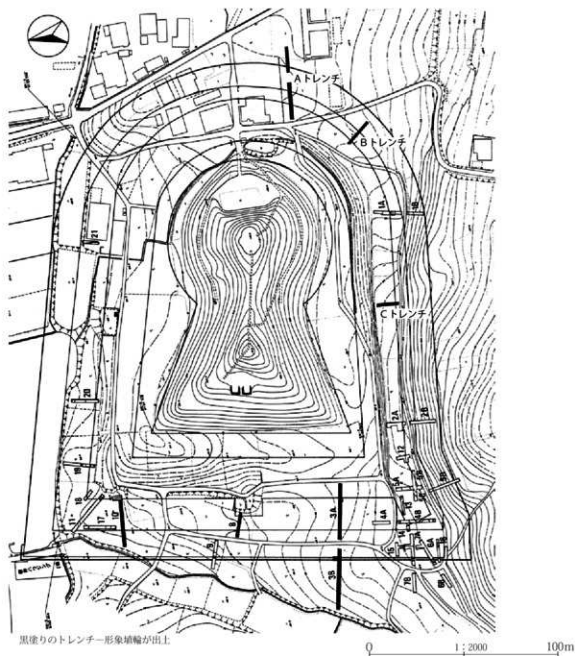
くびれ部外方に設定したCトレンチでは中堤の南側部分と外堀の掘り込みを検出した。中堤上面は削平を受けており埴輪の樹立状態について把握することはできなかった。中堤外縁の傾斜面では藤岡市教育委員会が調査した2A・8・12トレンチで検出したのと同様の石積が良好な状態で検出された。Cトレンチにおける中堤の検出位置は藤岡市教育委員会が想定した位置とほぼ一致していた。

Aトレンチ外堀の埋没土中には軽石の堆積が確認されている。調査時には同定されていないが堆積状況から浅間B軽石と考えられる。榛名二ツ岳沢川テフラについては記録されていない。藤岡市教育委員会調査時にも確認されていない。

3カ所のトレンチから出土した遺物の中で本古墳に伴うと考えられる資料は円筒埴輪、形象埴輪だけである。再三記述したとおり樹立時の原位置を保持していたものは皆無である。Aトレンチの外堀内からは土師器杯が出土したとされるが所在不明である。

円筒埴輪はA・B・Cいずれのトレンチからも出土している。藤岡市教育委員会が調査した2Aトレンチにおける検出状況を見ると中堤には内外2列の円筒埴輪列が続き、普通円筒埴輪に混じり朝顔形埴輪が一定数樹立されていたものと考えられる。

形象埴輪はAトレンチ内から人物埴輪、鳥形埴輪、器財埴輪の盾形埴輪が出土している。人物埴輪には双脚で全身表現と考えられる鞆を背負う男子(144)、被褥の男子(145)、振り分け髪(149)、甲冑表現の人物(161)、腰部に刀装具表現の見られる人物(165)、肩から環状の褌をかけた女子(146)、帯表現のある人物(147)、盾持ち人(151・153)が確認できる。鳥形埴輪(168)も人物の付属品である可能性が高い。基台部の破片の中で基台部(167)は貼付される突帯がやや繊細であることから椅座人物埴輪の存在を推定させる資料である。基台部(168)は基台部(167)と比較して造作がやや粗雑である点が検討を要する点である。人物埴輪の基台部の他に家の基台部分である可能性もあろうか。



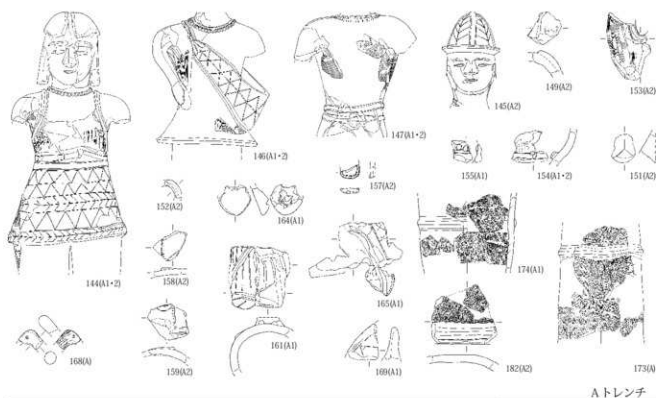
第49図 七興山古墳形象填輪出土トレンチ

これらの人物埴輪群の樹立位置については原位置を復元することが困難であるが、後円部後方からやや南側の中堤（渡り状施設も含まれるか）上に配列されていたものと考えられる。盾持ちは外堤側に近い2区からの出土であることから外堤に樹立されていた可能性も考えられるが、他の人物についても2区出土の資料があり細かく樹立位置を区分することは困難であった。

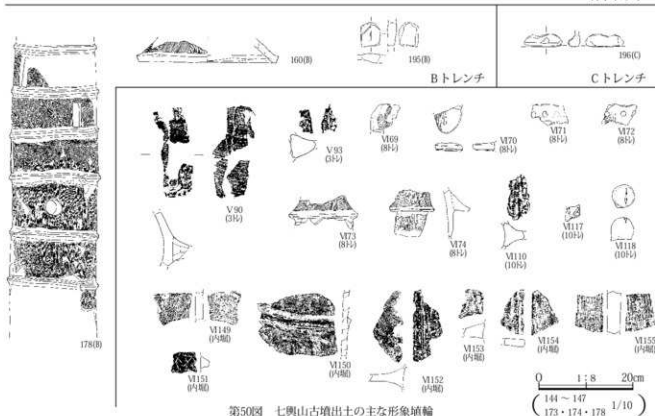
Bトレンチから出土した基台部（178）は7段以上の構成で残存高90cmの円筒部分である。本体部分は高崎市保護田八幡塚古墳出土の壺形埴輪や富岡市芝宮79号古墳

出土の蓋笠部のような器高の低いものと考えられる。編集の誤りから円筒埴輪の挿図中に入れた資料（110）も同様の器種と考えられる。人物埴輪の上着裾部破片と見た資料（160）が本体の一部である可能性も考えられる。この基台部（178）は堀内からの出土状況から考えると中堤上に樹立されていたと考えられる。

この長方形透孔を有する資料（178）は、これまでの先行研究において、二次調整ヨコハケを施す資料の存在とともに、七興山古墳の円筒埴輪の年代を古く位置づける根拠の一つとなっていたものである。本資料には口縁部、



A トレンチ



第50図 七奥山古墳出土の主な形象埴輪

0 1 8 20cm  
(141～147  
173・174・178 1/10)

基部ともに残存していないが、全体形状、胴部径の細さなどから円筒埴輪の範疇から除外すべきものである。

藤岡市教育委員会調査時の形象埴輪出土状況からは前方部分では中堤の3カ所で検出された造り出し部分にその樹立があると考えられていた。これと本報告の3箇

所のトレンチにおける出土状況からは中堤のいずれの場所にも等しく形象埴輪が樹立されていたのではなく、保渡田八幡塚古墳の集中区のように一定範囲（一定区画）内に人物埴輪（動物埴輪も含むか）が集中的に樹立されていた可能性が高い。

## 第2節 出土埴輪と七興山古墳の位置付け

### (1) 出土埴輪について

第51図は群馬県内の6世紀初頭から前半に位置づけられる前方後円墳から出土した円筒埴輪の中で比較的形状を知ることのできる多条突帯の資料を掲載したものである。1から9は七興山古墳出土の円筒埴輪である。

今回報告する七興山古墳出土の円筒埴輪はその全体形状を確認することができる資料はなかった。すべての個体が一律ではないが藤岡市教育委員会調査資料である6から9を見ると器高1m前後、7条8段構成あるいは6条7段構成の資料の存在が確認されるところである。口径は35cm前後と40cm前後の大小2種類があることは既に指摘されているところである。

朝顔形埴輪は今回報告分でも残存状態の良好な資料はなかったが4・5に見るように普通円筒と比較して胴部径が細い形状であることがわかる。

各部位の特徴としては貼付口縁の個体、低位置突帯の個体の存在があげられる。また、外面の調整は大半がタテハケであるが、一部に二次調整のタテハケや二次調整のヨコハケが施された個体が存在することも周知のとおりである。また、この点についても既に指摘されているところである<sup>(1)</sup>が、一部の個体において突帯貼付に際し、断続ナデ技法Aが採用された個体が存在することも第2章第2節1に記したところである。

10から12は七興山古墳に供給されたと考えられる猿田Ⅱ遺跡埴輪窯出土の大型円筒埴輪である。窯出土埴輪は山田俊輔氏により型式学的な検討が加えられている<sup>(2)</sup>。掲載の大型品は山田氏により第3段階、陶邑古窯址須恵器編年のT K10からM T 85型式に平行する時期に位置づけられた資料の一部である。全体形状を把握することができた資料はなかったがその特徴は多条突帯、貼付口縁、低位置突帯、外面調整タテハケなど七興山古墳出土埴輪との共通点が多く見られる。

21から23は6世紀初頭に築造された安中市築瀬二子塚古墳の円筒埴輪である。掲載した普通円筒は下半部の残存であるが基底部の長さが胴部段間長の約半分、広義の低位置突帯に含めて考えられているものである。外面

の調整は大半がタテハケである。透孔の形状も円形が主体である。また、掲載はしなかったが単口縁の他に貼付口縁の資料が一定量含まれている。

18から20は6世紀初頭に築造された前橋市前二子古墳出土円筒埴輪の一部である。形状は4条5段構成である。器高は60cm余、口径は45cm前後であった。器面調整はタテハケが主体で、一部にC種ヨコハケが見られる。

24から26は6世紀中葉に築造された前橋市中二子古墳出土の円筒埴輪である。形状は主に5条6段構成である。復元された器高は48cmから63.5cm、口径は21cmから40cmであった。器面調整はタテハケが主体であるが、C種ヨコハケがわずかに見られるとされる。

27から29は6世紀中葉に築造されたと考えられている富岡市堂山稲荷古墳（一之宮3号古墳）出土の円筒埴輪である。普通円筒埴輪の全体形状は4条5段構成である。27の器高は57cm、口径33.7cmである。器面調整はタテハケである。低位置突帯が認められる。貼付口縁の資料も存在するとされる。

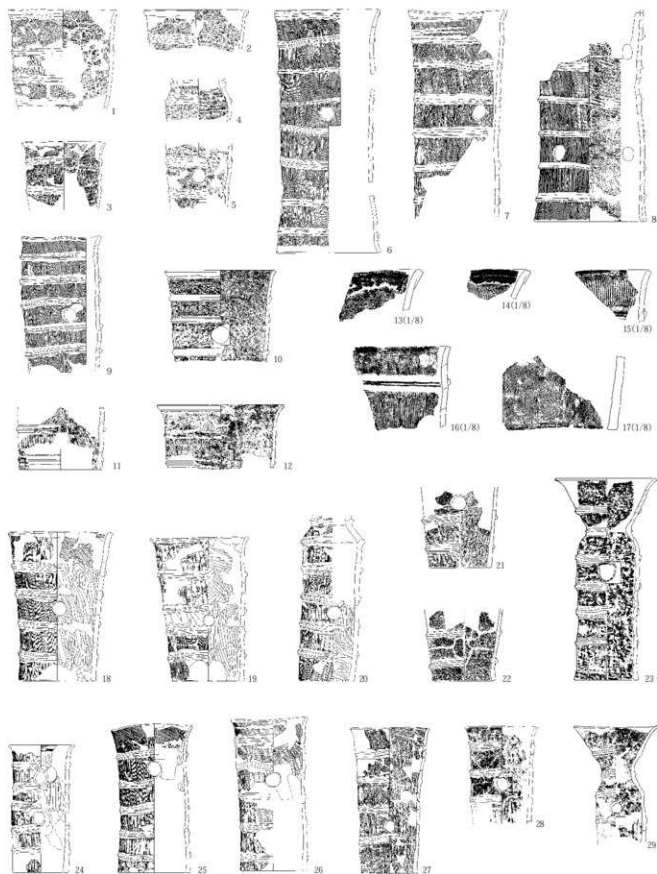
13から17は七興山古墳と同じ白石古墳群中の江原塚古墳出土資料で、貼付口縁の個体が存在することで知られている。貼付口縁の資料は七興山古墳、前述の築瀬二子塚古墳や堂山稲荷古墳の他は、高崎市綿貫観音山古墳や前橋市金冠塚古墳、太田市駒形神社埴輪窯跡集積場などと6世紀後半の前方後円墳、埴輪窯からの出土が認められる。江原塚古墳は直径20mの円墳で、横穴式石室の形状から6世紀後半の築造と考えられている。

低位置突帯の円筒埴輪については新山保和氏の集成・研究がある<sup>(3)</sup>。それによれば群馬県東部地域では円墳への樹立が3例見られるが全般的には前方後円墳を中心に採用されており、6世紀後半に盛行する。

以上のように6世紀前半の大型前方後円墳に採用されていた円筒埴輪の形状について見ると同じ多条多段でも築瀬二子塚古墳や堂山稲荷古墳出土例のように底部から口縁部に向かって徐々に径を大きくする形状のものの中二子古墳のように寸胴を呈するものがあることがわかる。七興山古墳の事例は後者であるが、中二子古墳には貼付口縁の事例は認められないようである。

結論としては今回は厳密な意味で埴輪の型式学的検討によって七興山古墳樹立の円筒埴輪の製作年代を導き出すことは困難であった。志村哲氏は円筒埴輪の検討結果





1～5七興山古墳（本報告書） 6～9七興山古墳（藤岡市教育委員会） 10～12扇田Ⅱ遺跡 13～17江原塚古墳（1/8）  
 18～20前二子古墳 21～23陸奥二子塚古墳 24～26後二子古墳 27～29堂山福崎古墳（ノ宮3号古墳）

0 1:16 40cm

第51図 6世紀前半の群馬県内出土円埴輪

に、周知から出土した須恵器横瓶の年代観を加味して6世紀前半の年代を提示している<sup>(4)</sup>。この横瓶について藤野一之氏は氏の須恵器編年のⅡからⅢ期、MT15からTK10型式に平行する時期と考えている<sup>(5)</sup>。また、先に記したよう七興山古墳出土埴輪の年代を6世紀中葉から後半に求めた山田氏は同じ本郷・猿田埴輪窯から供給された保護田古墳群と七興山古墳の埴輪では型的断絶が大きく、七興山古墳の埴輪生産にあたっては外部から埴輪製作に関する新情報の導入があったと考え、今城塚古墳にその系譜を求めることが妥当としている<sup>(6)</sup>。

ここでは今城塚古墳出土の円筒埴輪について詳細に論ずることはできないが、今城塚古墳に供給されたと考えられる新池遺跡埴輪C期の円筒埴輪を見ると、器高78cm、6条突帯7段構成の資料があり、単口縁で外面は1次調整のタテハケのみである。他に10条以上の多条突帯や貼付口縁の資料も認められる。今後、今城塚古墳出土資料の検討を通じて七興山古墳資料との共通性を把握する必要があることは山田氏の指摘すとおりである。なお、墳丘企画の類似性が指摘されている愛知県斯夫山古墳出土の円筒埴輪については、6条7段構成の存在が知られている。七興山古墳同様多条多段の構成であるが、ロクロ成形で、須恵質、器面にC種コハケが認められる「尾張型埴輪」と称されるものであり、両者の直接的な共通点は見出し難いものである。

## (2) 形象埴輪について

次に、七興山古墳出土の形象埴輪について検討してみたい。鞆を背負う男子人物(144) 双脚表現の全身像は太腿以下が欠損していることから、全身の規模について復元することは困難であるが、他の事例を参考すると人物高が85cm前後、全高が105cmから115cmと想定される。5世紀後半から末葉の保護田八幡塚古墳出土事例では人物高81・82cmに復元されている。6世紀後半の綿貫観音山古墳作では人物高105cmであることから本墳出土の人物は人物埴輪の表現が大型化する以前のものと位置づけることができよう。

この資料では鞆の矢筒部が箱形に造られている点が注目される。群馬県内出土事例では綿貫観音山古墳の3体と前橋市今井神社古墳群2号古墳出土の事例が知られるが、いずれも板状の粘土板で造られた鞆が背中に貼付されていた。また、太田市出土の掛甲装の人物埴輪も背中に

板状の鞆を貼付している。これらはいずれも6世紀後半段階に位置づけられるものである。

他県出土の鞆を背負う人物の事例としては大府町軽里4号墳、奈良県池田遺跡9号墳、茨城県舟塚古墳、埼玉県稲荷山古墳などを確認することができる<sup>(7)</sup>。

池田遺跡9号墳は5世紀後半築造の造出付方墳である。男子人物が背負う鞆の矢筒部は七興山古墳例と同様に箱形を呈し、上板が左右に延び、奴舩形している点も類似している。鍔は線刻で表現されている。埼玉県稲荷山古墳例も矢筒部が箱形に造られている。

乱雑な比較であるが、矢筒部の形状が箱形から板状へと時間的経過をたどったとすることが可能であれば、七興山古墳出土例は池田遺跡9号墳・埼玉県稲荷山古墳と綿貫観音山古墳・今井神社古墳群2号古墳との中間に位置づけられるものとなる。

次に、双脚人物像の靴爪先部分と考えた資料(164)について記しておきたい。同様の部位は藤岡市教育委員会調査時に8トレンチ西側から出土している。破片資料で器種の断定が難しいが、靴とした場合、爪先が基台部から水平に突出した状態にあったように観察できる。これに対し、本報告の資料は、先端がわずかに基台部から離れているだけで、他は基台部に接着されているようである。本報告の資料中には基台部天井部分が出土していないため断定はできないが、164は天井部がドーム状を呈する基台部に接合していた可能性を指摘しておきたい。

双脚全身表現のなされた人物埴輪の基台部の形状は扁平な円盤状から円筒形で天井がドーム状、楕円筒形へ変化することが指摘されている<sup>(8)</sup>。七興山古墳の靴と基台部の形状は天井がドーム状から靴が水平に装着される形に移行する段階にあることがわかる。

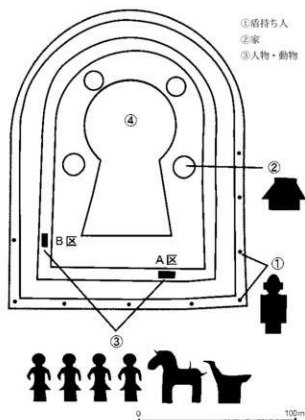
女子人物(146)の褌の表現は群馬県内では塚廻り3号墳や上芝古墳で左脇下が袋状を呈するものが見られる。肩部に紐の表現がなされるものは県内には類例がないと考えられる。埼玉県十条出土例が本例に近いようである<sup>(9)</sup>。いずれにしても6世紀後半になると群馬県内の女子人物において幅広い褌を肩から着用した事例は減少していることから七興山古墳出土女子の意匠はそれ以前に位置づけられるものと考えられる。

以上のように円筒埴輪、形象埴輪の型式的検討についてはこれまでの先行研究以上の詳細な年代を導き出す

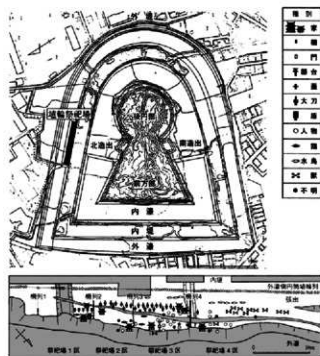
第2節 出土埴輪と七興山古墳の位置付け



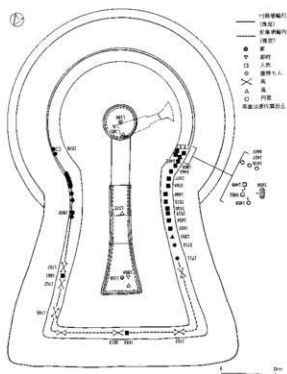
1 井出二子山古墳の形象埴輪出土状況(文献88)



2 保渡田八幡塚古墳の形象埴輪出土状況(文献89)



3 今城塚古墳の形象埴輪出土状況(文献90)



4 筒貫観音山古墳の形象埴輪出土状況(文献91を修正)

第52図 形象埴輪配列位置の変遷

ことが困難であった。今回の報告では七興山古墳の埴輪の製作年代については6世紀前半、その中でも中葉に近い時期という範疇にとどめておきたい。

(3) 埴輪配列について

七興山古墳では中堤の一定範囲に人物埴輪を集中的に配置していることがほぼ明らかになった。群馬県内の前方後円墳における人物・動物埴輪の樹立位置の変遷については橋本博文氏や右島和夫氏の先行研究がある。両氏とも、埴輪配列については、5世紀後半の保渡田八幡塚古墳のような周堤上から、6世紀後半の綿貫観音山古墳のような横穴式石室周辺の埴丘中段面へ移行していくことを明らかにしているが、橋本氏はその途中段階で6世紀前半から中葉には伊勢崎市剛志天神山古墳に見られるように埴丘上の前方部前端へと移動して行くと考えた<sup>100</sup>。これに対し右島氏は6世紀前半には5世紀後半の状況を踏襲して中堤上に埴輪配列がなされていたとしている<sup>101</sup>。

群馬県内の前方後円墳における人物・動物埴輪の樹立は、5世紀後半の築造とされる高崎市井出二子山古墳が初源期の一例となろう。井出二子山古墳の場合、後円部寄りの中堤北半部を中心に人物埴輪が配置されたと推定されている。ただ、中堤には蓋や家も配置されていた可能性がある。5世紀後半から末に築造された保渡田八幡塚古墳では中堤上に相応の数量の人物・動物埴輪の配列区が設定され、外堤には盾持ち人が配置される。

6世紀初頭においては前二子古墳では前段階の状況が継承され、中堤上に人物が樹立されていたと考えられる。一方、築瀬二子塚古墳においては配列の状況は把握できないが埴丘上から人物や馬形埴輪が検出されている。

次の6世紀中葉の前方後円墳では堂山稲荷古墳で後円部南側の中堤上に人物・馬・盾持ち人の配置が想定される。中二子古墳においても後円部南側の中堤に衝角付冑装の武人、全身立像の基台部が配置されていたとされる。また、保渡田八幡塚古墳では外堤に樹立されていた盾持ち人が中堤に一定の間隔を置いて配置されている。

6世紀後半になると高崎市綿貫観音山古墳や太田市二ツ山1号古墳などのよう横穴式石室が開く埴丘中段面上に人物・動物埴輪が列状に配置されるようになる。

このように6世紀前半の前方後円墳における人物・動物埴輪の樹立位置については二形態あることがわかる。一つは中二子古墳、堂山稲荷山古墳のように5世紀後半

以来の形態であるが後円部（横穴式石室）寄りの中堤上への配置である。配置位置・内容に相違があるものの6世紀前半の築造とされ、真の継体天皇陵とされる大原府今城塚古墳における形象埴輪群の配列も中堤上である。

これに対し、もう一つの埴輪配列である埴丘上に形象埴輪群を樹立した築瀬二子塚古墳や剛志天神山古墳の状況は、帆立貝式古墳では広く採用されているが、前方後円墳における採用は客体的なものであったと考えられる。大型前方後円墳において中堤から埴丘への本格的な移行は綿貫観音山古墳になってからと考えられる。

以上のように前方後円墳における人物・動物埴輪の配列位置の変遷過程を確認した時、中堤上の一定範囲内に人物埴輪を樹立していたことが想定される七興山古墳は、6世紀後半の綿貫観音山古墳や二ツ山1号古墳より早い時期に位置づけられることになる。同時期の前方後円墳としては中二子古墳や堂山稲荷古墳が考えられるが、前節で見たように円筒埴輪の比較からは詳細な前後関係を求めることが困難である。

人物・動物埴輪の配列位置がどの段階で中堤から埴丘上に移動するのかという点については榛名山二ツ岳降下軽石に覆われていた高塚古墳の対する検討が重要となつてこよう。高塚古墳ではくびれ部南側の埴丘上から全身表現の甲冑装人物埴輪が出土しているが、榛名山東麓の標高の高い地点に築造されたこの古墳が群馬県内における大型前方後円墳の系譜の中で埴輪配列の変遷過程を確認するに相応しい古墳であるかがやや考慮を要するところである。この点も含め今後に期したい。

註  
 1 志村哲・山田俊輔他2004『協田日遺跡の調査』『国立歴史民俗博物館研究報告』第120巻  
 2 註1文献と同じ  
 3 新山保和2007『群馬県出土の低位置突帯埴輪』『研究紀要』25 群馬県埋蔵文化財調査事業団  
 4 志村哲編1992『七興山古墳範囲確認調査報告書』Ⅶ 群馬県教育委員会  
 5 藤野一之2009『群馬県における古墳時代須恵器編年』『群馬・金山丘陵調査報告』駒沢大学考古学研究室  
 6 山田俊輔2008『上毛野における畿内系埴輪の地域波及と展開』『古代文化』第60巻第1号 古代学協会  
 7 一瀬和夫・車崎正彦編2004『考古資料大観』第4巻  
 8 若松良一他1987『討論群馬・埼玉の埴輪』あさき社  
 9 塚田良通1996『人物埴輪の型式分類』『考古学雑誌』第81巻第3号  
 10 橋本博文1980『埴輪器式論』『塚廻り古墳群』  
 11 右島和夫1995『上野型埴輪』の成立』『研究紀要』群馬県埋蔵文化財調査事業団  
 紙面の都合で調査報告書の掲載は削愛した。

## 参考文献

- 1 藤岡市史編さん委員会1993『藤岡市史資料編原始・古代・中世』
- 2 藤岡市教育委員会1990『七興山古墳範囲確認調査報告書』V
- 3 藤岡市教育委員会1991『七興山古墳範囲確認調査報告書』VI
- 4 藤岡市教育委員会1992『七興山古墳範囲確認調査報告書』VII
- 5 藤岡市教育委員会1988『伊勢塚古墳・十二天塚古墳範囲確認調査報告書』III
- 6 藤岡市教育委員会1992『平井地区1号古墳範囲確認調査報告書』VIII
- 7 藤岡市教育委員会1989『皇子塚古墳範囲確認調査報告書』IV
- 8 志村哲1989「十二天塚古墳の築造年代について—採集遺物からみた築造年代の分析—」『群馬県史研究』29群馬県史編さん委員会
- 9 群馬県1936『多野郡平井村白石稲荷山古墳』群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告第3輯
- 10 藤岡市教育委員会1986『白石稲荷山古墳範囲確認調査報告書』I
- 11 藤岡市教育委員会1987『白石稲荷山古墳範囲確認調査報告書』II
- 12 志村哲・山田俊輔他2004『猿田Ⅱ遺跡の調査』『国立歴史民俗博物館研究報告』120
- 13 藤岡市教育委員会1985『F2 緑埜地区遺跡群Ⅰ』
- 14 群馬県教育委員会1981『東平井古墳群』
- 15 藤岡市教育委員会2000『東平井古墳群平地前遺跡』
- 16 群馬県埋蔵文化財調査事業団1989『上栗須遺跡・下大塚遺跡・中大塚遺跡』
- 17 群馬県埋蔵文化財調査事業団1993『上栗須寺前遺跡群Ⅰ』
- 18 群馬県埋蔵文化財調査事業団1994『上栗須寺前遺跡群Ⅱ』
- 19 群馬県埋蔵文化財調査事業団1996『上栗須寺前遺跡群Ⅲ』
- 20 藤岡市教育委員会1991『藤岡東部地区遺跡群Ⅲ』
- 21 東京国立博物館1983『東京国立博物館目録古墳遺物編篇（関東Ⅲ）』
- 22 藤岡市教育委員会2004『東京電力中東幹線一部増強に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 23 高崎市教育委員会2008『山名古墳群』
- 24 高崎市教育委員会2008『山名伊勢塚古墳』
- 25 高崎市史編さん委員会1999『新編高崎市史資料編Ⅰ』
- 26 藤岡市教育委員会2003『D49上落合上野遺跡』
- 27 藤岡市教育委員会2002『上落合城山遺跡・白石稲荷原遺跡・猿田川水田址』
- 28 藤岡市教育委員会2004『上落合岡遺跡』
- 29 藤岡市教育委員会2001『上落合岡B遺跡』
- 30 藤岡市教育委員会1993『D19上落合猿田遺跡』白石北原遺跡『市内遺跡Ⅰ』
- 31 藤岡市教育委員会2008『三ツ木東原遺跡』
- 32 藤岡市教育委員会1999『滝遺跡』
- 33 藤岡市教育委員会2001『F30緑埜坪出シB遺跡』
- 34 藤岡市教育委員会1978『F1竹沼遺跡』
- 35 群馬県埋蔵文化財調査事業団1997『緑埜遺跡群・緑埜上郷遺跡・竹沼遺跡』
- 36 滝前・滝下遺跡調査会1988『滝前・滝下』
- 37 藤岡市教育委員会1999『D27滝下B遺跡・D35滝前D遺跡・D34道下B遺跡』
- 38 藤岡市教育委員会1997『滝前C・稲荷屋敷遺跡』
- 39 群馬県埋蔵文化財調査事業団1991『白石大御堂遺跡』
- 40 群馬県埋蔵文化財調査事業団1994『多比良平野遺跡 白石根岸遺跡』
- 41 群馬県埋蔵文化財調査事業団1995『黒熊栗崎遺跡』
- 42 群馬県埋蔵文化財調査事業団1996『黒熊八幡遺跡』
- 43 群馬県埋蔵文化財調査事業団1988『田端遺跡』
- 44 群馬県埋蔵文化財調査事業団1999『群馬県遺跡大事典』
- 45 梅澤重昭1989『七興山古墳』『群馬県史』資料編3群馬県史編さん委員会
- 46 群馬県1929『群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第1輯
- 47 後藤守一・相川龍雄1933『白石古墳群の研究』『考古学雑誌』第24巻第9号
- 48 群馬県1938『上毛古墳綜覧』
- 49 藤岡市史編さん委員会1989『白石古墳群調査報告書』藤岡市史資料編別巻
- 50 坂本和徳1995『七興山古墳出現の背景—埴輪・埴倉・金属生産からの視点から—』『群馬考古学手帳』5群馬土器観会
- 51 尾崎喜左雄1970『毛野の風』『古代の日本』7角川書店

参考文献

- 52 梅澤重昭1994「第二部黒井峯のムラを生んだ毛野の古墳文化」『黒井峯遺跡』読売新聞社
- 53 梅澤重昭1999「毛野の前方後円墳の系譜」『第4回東北・関東前方後円墳研究会大会シンポジウム 前方後円墳の築造企画』東北・関東前方後円墳研究会
- 54 甘粕健1970「武蔵国造の反乱」『古代の日本』7角川書店
- 55 飯塚卓二1986「埼玉古墳群の出現と毛野地域政権」『研究紀要』3群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 56 田一一郎1989「群馬県西部における初期横穴式石室の様相」『東日本における横穴式石室の受容』群馬県考古研究所
- 57 赤塚次郎1989「断夫山古墳をめぐる諸問題」『断夫山古墳とその時代』愛知県考古学談話会
- 58 右島和夫1990「古墳から見た5・6世紀の上野」『古代文化』第42巻7号
- 59 白石太一郎1992「関東の後期大型前方後円墳」『国立歴史民俗博物館研究報告』第44集
- 60 右島和夫1995「上野型墳の成立」『研究紀要』12群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 61 橋本博文・加部二生1994「第6章上野」『前方後円墳集成 東北・関東編』山川出版
- 62 若狭徹1995「上野西部における五世紀後半の首長墓系列」『群馬考古学手帳』5群馬県土器研究会
- 63 大田区立郷土博物館1995「武蔵国造の乱一考古学で読む『日本書紀』一」
- 64 川西宏幸1978「円筒埴輪論」『考古学雑誌』第64巻第2・4号
- 65 中島和彦他1991「菅原東部埴輪窯跡群をめぐる諸問題」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要』
- 66 南雲芳昭1994「付録 2 地田栗田遺跡M-1号墳、M-2号墳の円筒埴輪観察表のまとめ」『地田栗田遺跡』
- 67 田中広明1983「藤岡市白石台地に於ける考古学的研究一特に踏査資料を中心として」『踪跡』創刊号前橋工業高校歴史研究部
- 68 車崎正彦1992「円筒埴輪 B関東」『古墳時代の研究』第9巻
- 69 高橋克壽1994「埴輪生産の展開」『考古学雑誌』第41巻第2号
- 70 山田俊輔2004「第2部猿田Ⅱ遺跡の調査 第6章 第1節円筒埴輪」『国立歴史民俗博物館研究報告』第120集
- 71 志村哲2004「第2部猿田Ⅱ遺跡の調査 第6章まとめ 第4節藤岡産埴輪の供給について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第120集
- 72 新山保和2007「群馬県出土の低位置突帯埴輪」『研究紀要』25群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 73 山田俊輔2008「上毛野における畿内系埴輪の地域波及と展開」『古代文化』第60巻第1号
- 74 中里正憲2008「埴輪生産域の推定復元一混入物による上野地域の様相一」『群馬考古学手帳』18群馬県土器研究会
- 75 橋本博文1980「埴輪祭式論」『塚廻り古墳群』群馬県教育委員会
- 76 群馬県埋蔵文化財調査事業団1986「荒砥北原遺跡 今井神社古墳群 荒砥青柳遺跡」
- 77 一瀬和夫・車崎正彦編2004『考古資料大観』4
- 78 塚田良通2007「人物埴輪の文化史的研究」雄山閣
- 79 杉山秀宏2009「樺東村高塚古墳出土人物埴輪について一上毛野の武人埴輪の系譜について一」『群馬県立歴史博物館紀要』第30号 群馬県立歴史博物館
- 80 群馬県古墳時代研究会2006『群馬県内の人物埴輪』
- 81 増田逸郎2002『古代王権と武蔵国の考古学』
- 82 安中市教育委員会2003『築瀬二子塚古墳 築瀬首塚古墳』
- 83 富岡市教育委員会2002『一ノ宮本宿・郷土遺跡Ⅱ・一ノ宮古墳群』
- 84 前橋市教育委員会1994『前二子古墳』
- 85 前橋市教育委員会1995『中二子古墳』
- 86 志村哲1985「藤岡台地における埴輪の様相」『第6回三県シンポジウム埴輪の変遷一普遍性と地域性』北武蔵古代文化研究所
- 87 青柳泰介2004「埴輪配列論」『考古資料大観』10小学館
- 88 高崎市教育委員会2009『井出二子山古墳』
- 89 かみつけの里博物館2000『はにわ群像を読み解く』
- 90 車崎正彦2008「東国にはわのみつり」『埴輪群像の考古学』
- 91 群馬県埋蔵文化財調査事業団1998「縮貫観音山古墳Ⅰ』
- 92 群馬町教育委員会2000『保渡田八幡塚古墳』
- 93 若狭徹2000「人物埴輪再考一保渡田八幡塚古墳形象埴輪の実態とその意義を通じて」『保渡田八幡塚古墳』群馬町教育委員会
- 94 石川正之助1980「高塚古墳」『群馬県史』資料編3群馬県史編さん委員会
- 95 右島和夫1992「2. 上野地域における埴輪樹立古墳とその特徴」『神保下塚遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 96 志村哲1999「藤岡産埴輪が供給された前方後円墳」『月刊考古学ジャーナル』第443号
- 97 若狭徹2008「岩野谷丘陵の開発と山名伊勢塚古墳一佐野三家をめぐる雑考一」『山名伊勢塚古墳』高崎市教育委員会
- 98 白石太一郎2008「6世紀前半の倭国における今城塚古墳」『継体天皇の時代』高槻市教育委員会
- 99 梅澤重昭1995「毛野から上野へ」『武蔵国造の乱一考古学で読む『日本書紀』一』大田区立郷土博物館

# 遺物 観 察 表

## 凡 例

1. 遺物番号は本文中に掲載した実測図・写真図版中写真に付した番号と一致しており、挿図の順に掲載している。
2. 円筒埴輪の表については以下のとおりである。
  - a. 法量の項で口径、底径で○の付くものは復元径であることを表す。器高の計測値で◇に付くものは残高を表す。
  - b. 段間長の計測値は残存状態にかかわらず下位段から上位段に向かって①②・・と呼称してそれぞれの段間を表した。◇の付くものは残高を表す。
  - c. 突帯の断面形状については下位の突帯から①②と呼称した。台・M・三は、断面形状がそれぞれ台形、M字形、三角形を呈すること。1・2・3は、1が突帯の上縁が下縁より高く突出しているもの、2は両者がほぼ同じ高さのもの、3は下縁が上縁より高いことを表す。
  - d. 胎土については形象埴輪も含め、砂礫の混入の度合いにより、A(多量)、B(普通)、C(少量)と3分類をした。
  - e. 色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』の土色名に準じて大別した。色相、明度、彩度の記載については省略している。
  - f. 焼成は器面の観察から、A良好、B普通、C不良と1硬質、2普通、3軟質に分類した。
  - g. ハケメの項の数値は2cm幅あたりのハケメの本数である。
  - h. 基部粘土板の重ね合わせの上下は埴輪の底面側から見たときの状態を示している。
3. 形象埴輪の表については以下のとおりである。
  - a. 法量の項で◇は残存値、○は復元径であることを表す。
  - b. 胎土・色調・焼成の項の記載・分類は円筒埴輪のそれと同様の内容である。
  - c. ハケメの項の数値は2cm幅あたりのハケメの本数である



## 円筒植輪

番号	写真 図番号	挿 入 形	出 上 位 置	残 存	法 量				突 帯 断 面 形 状	透 孔 形 状	胎 土	焼 成	ハ ケ メ	成 形 ・ 形 状 の 特 徴	備 考		
					口径 mm	底径 mm	器 高 mm	段 間 長 mm									
1	29	PL12	円筒 A形 1区	口縁部へ 胴部3段 1/3	(45.2)		(41.0)	①(2.0) ②9.7 ③11.3 ④18.0	①台1 ②M1 ③M1	円形	C	緑	B	2	8	貼付口縁。肥厚部分の外側は、ナデ。外面は、タテ・ナメタテハケ。内に縦刻。内面はナデ。	突帯断折ナデ技法。口縁部外面に縦刻。内面は磨耗。
2	29	PL12	円筒 A形 1区	口縁部へ 胴部2段 1/2	(34.5)		(27.6)	①(6.8) ②13.2 ③8.6	①台3 ②M2	A	明 赤 褐	A	2	10	10	単口縁。短く外反して立ち上がる。外面は、タテハケ。内面は、ナメヨコ方向のハケメ。内外面とも先端にヨコナデ。	
3	29	PL12	円筒 A形 1・2区	胴部2段 1/4	(16.5)		①(11.0) ②(5.5)		台1	2段とも 円形	B	緑	A	2	10	胴部の直径は、43.0cmに還元される。外面は、タテハケ。内面は、ナメヨコ方向のハケメ。内面は、ナメヨコ方向のハケメ。内外面とも先端にヨコナデ。	形状の歪みがあるか。突帯貼付も波打っている。19と同一。
4	29	PL12	円筒 A形 1区	口縁部へ 胴部1段 1/4	(40.2)		(27.5)	①(10.0) ②17.5	台1	A	緑	B	2	10	貼付口縁。肥厚部分の外側は、ナデ。外面は、タテ・ナメタテハケ。内面は、ナメヨコ方向のハケメ。	内面は磨耗。	
5	29	PL12	朝 面 形	口縁部 1/2	(40.4)		(21.0)	①(6.2) ②14.8	台2	B	緑	A	2	7	口縁部先端は、貼付口縁。肥厚部分は、内外面ともヨコナデ。外面は、タテハケ。内面は、ヨコ方向のハケメ。	突帯上に布目庄痕。8・9と同一。	
6	29	PL12	円筒 A形 2区	基底部 1/4	(32.3)	(32.0)	(12.4) ②(9.6)		台1	C	緑	A	2	14	底位置突帯。外面は、タテハケ。内面は、タテハケ。底面は、丁無ナデ。	形象基底部か。	
7	29	PL12	朝 面 形	口縁部 1/4	(42.0)	(20.2)	①(2.9) ②17.3		M2	A	明 赤 褐	B	2	8	外反著しく立ち上がる。先端は、単口縁で平坦面をなす。外面は、タテハケ。内面は、ヨコ方向のハケメ。		
8	30	PL13	朝 面 形	肩部へ 胴部1段 1/2	(16.1)	(17.9) ②8.2			①台2 ②M2	B	緑	A	2	-	-	頸部の直径は、21.0cmに還元される。肩部の垂りは、緩やかに。外面は、ナデ。内面もナデを施すが粘土組の接合痕を残す。	5・9と同一か。
9	30	PL13	朝 面 形	胴部3段 1/2	(25.3)	(15.3) ②13.6 ③(6.4)			①M2 ②台2	円形	B	緑	A	2	14	胴部の直径は、27.5cmに還元される。透孔の大きさはタテ6.6cm、ヨコ6.1cm。外面は、ナデ。以下は、タテハケ。内面は、ナデを施すが、粘土組の接合痕を残す。突帯の貼り付けは、断崖である。	5・8と同一か。
10	30	PL13	円筒 A形 1区	口縁部 破片	(8.2)					B	明 赤 褐	A	2	10	単口縁。外面の先端は、ヨコ方向のハケメ。以下は、タテ・ナメ方向のハケメ。内面は、先端にヨコナデ。以下は、ヨコ方向のハケメ。		
11	30	PL13	円筒 A形 2区	口縁部 破片	(5.5)					B	緑	A	2	9	単口縁。外面は、タテハケ後先端にヨコナデ。内面は、ナデか。		
12	30	PL13	円筒 A形 1区	口縁部 破片	(9.1)					C	明 赤 褐	A	2	8	単口縁。外面は、タテハケ。内面は、ヨコ方向のハケメ。先端は、内外面ともヨコナデ。		
13	30	PL13	円筒 A形 1区	口縁部 破片	(4.3)					B	緑	B	2	9	単口縁。外面は、タテハケ。先端にヨコナデ。内面は、ハケメナデ消す。		
14	30	PL13	円筒 A形 1区	口縁部 破片	(3.0)					B	緑	B	2	8	単口縁。外面は、タテハケ。先端にヨコナデ。内面は、ハケメナデ消す。		
15	30	PL13	円筒 A形 1区	口縁部 破片	(4.4)					A	明 赤 褐	B	1	7	単口縁。外面は、タテハケ。内面は、ヨコ方向のハケメ。先端は、内外面ともヨコナデ。		
16	30	PL13	円筒 A形 2区	口縁部 破片	(3.5)					B	明 赤 褐	B	2	6	単口縁。外反著しく立ち上がる。外面は、タテハケ。内面は、ヨコ方向のハケメ後内外面とも先端にヨコナデ。	器面は磨耗。	
17	30	PL13	円筒 A形 2区	口縁部 破片	(5.0)					B	緑	B	2	10	単口縁。外反著しく立ち上がる。外面は、タテハケ後ヨコナデ。		
18	30	PL13	円筒 A形 1区	口縁部 破片	(4.4)					B	緑	B	2	8	単口縁。外面は、タテハケ。内面は、ヨコ方向のハケメ。先端は、内外面ともヨコナデ。		
19	30	PL13	円筒 A形 1区	口縁部 破片	(43.2)	(9.6)				B	明 赤 褐	A	2	10	貼付口縁。先端は、内外面ヨコナデ。外面は、タテハケ。内面は、ナメヨコハケ。	3と同一か。	
20	30	PL13	円筒 A形 1区	口縁部 破片	(5.6)					B	緑	B	2	14	貼付口縁。外面にヨコ方向のハケメ。外面は、タテハケ。内面は、ヨコ方向のハケメ。		
21	30	PL13	円筒 A形 3区	口縁部 破片	(4.2)					B	緑	B	2	-	-	貼付口縁。外面は、ナデ。内面は、ナデか。	
22	30	PL13	円筒 A形 1区	口縁部 破片	(3.2)					B	明 赤 褐	B	2	-	-	貼付口縁。外面は、ナデ。内面は、ナデ。	
23	30	PL13	円筒 A形 1区	口縁部 破片	(3.0)					B	緑	B	2	-	-	貼付口縁。外面は、ナデ。内面は、ナデ。	
24	30	PL13	円筒 A形 1区	口縁部 破片	(8.2)					B	緑	A	2	8	貼付口縁。外面は、タテハケ。貼付部分は、ヨコナデ。内面は、ヨコ方向のハケメ。先端は、ヨコナデ。		
25	30	PL13	円筒 A形 1区	口縁部 破片	(5.3)					B	緑	A	2	10	貼付口縁。外面は、タテハケ。貼付部分は、ヨコナデ。内面は、ヨコ方向のハケメ。		

遺物観察表

番号	挿入番号	写真図番号	器形	出土位置	残存	法量				突帯断面形状	透孔形状	胎土	色調	焼成	ハケメ	成形・整形の特徴	備考
						口径 cm	底径 cm	高さ cm	段間長 cm								
26	30	PL13	円筒か	A・H・F I区	口縁部 破片			<7.2>			A	橙	A2	10	外面は、タテハケ。内面は、ヨコ方向のハケメ。	先部の内外面に粘土塊付着。	
27	30	PL13	円筒	A・H・F I区	胴部2段 破片			<18.1>	M1		B	明赤釉	B1	8	外面は、タテハケ。上段は、二次的にナメタテハケ。内面は、ナナムヨコ方向にナデ。上段にハケメを残す。		
28	30	PL13	円筒	A・H・F I区	胴部2段 破片			<15.2>	台2		A	橙	A1	8	外面は、タテハケ。上段の一部に二次的にタテハケ。内面は、下段にナナムヨコハケ。上段に粗雑なナデ。	突帯断続ナデ技法。片岩の混入目立たない。20・30・33・36・38・40と同一形(記述省略)。	
29	31	PL13	円筒	A・H・F I区	胴部2段 破片			<19.4>	M2		A	橙	A1	8	胴部の直径は、41.2cmに復元される。外面は、タテハケ。内面は、ナナムヨコハケ一部に粗雑なナデを重ねる。	片岩の混入目立たない。	
30	31	PL14	円筒	A・H・F I区	胴部3段 破片			<24.8>	①M1 ②台1		B	橙	A1	9	外面は、タテハケ。内面は、ナナムハケ及び粗雑なナデ。	突帯断続ナデ技法。	
31	31	PL14	円筒	A・H・F I区	口縁部中 位破片か			<4.1>			B	橙	A2	10	外面は、ハケメ。内面は、ヨコ方向のハケメ。	外面に線刻。	
32	31	PL14	円筒	A・H・F I区	胴部2段 破片			<11.8>	M2		A	橙	A2	8	外面は、タテハケ。内面は、ナナム方向のハケメの上一部ナデを重ねる。		
33	31	PL14	円筒	A・H・F I区	胴部2段 破片			<16.8>	台2	円形	B	橙	A1	8	外面は、タテハケ。内面は、ヨコ方向のハケメに粗雑なナデを重ねる。	突帯断続ナデ技法。	
34	31	PL14	円筒	A・H・F I区	胴部2段 破片			<12.0>	台1		B	明赤釉	A1	10	外面は、タテハケ。内面は、ナデ一部にハケメを残す。		
35	31	PL14	円筒	A・H・F I・2区	胴部3段 破片1/4			<11.2>	①台2 ②M2	円形	A	橙	A1	12	外面は、細いタテハケ。内面は、丁寧なナデ。		
36	31	PL14	円筒	A・H・F I区	胴部1段 破片			<6.2>		円形	B	橙	A1	8	外面は、タテハケ。内面は、ナナム方向のハケメ・ナデ。		
37	31	PL14	円筒	A・H・F I区	胴部1段 破片			<10.6>			B	橙	A1	10	外面は、タテハケ。内面は、ナナム方向のハケメに一部ナデを重ねる。		
38	32	PL14	円筒	A・H・F I区	胴部2段 破片			<7.8>	台1		B	橙	A1	8	外面は、タテハケ。内面は、ヨコ方向のハケメに粗雑なナデを重ねる。	突帯断続ナデ技法。	
39	32	PL14	円筒	A・H・F I区	基底部破 片			<9.4>	台2		B	橙	A1	14	外面は、タテハケ。内面は、ナデ。		
40	32	PL14	円筒	A・H・F I区	胴部2段 破片			<11.0>	M1	円形	A	橙	A1	10	外面は、タテハケ。内面は、ナデ。一部にハケメ。		
41	32	PL14	円筒	A・H・F I区	胴部2段 破片			<9.0>	M2		B	橙	A2	7	外面は、タテハケ。内面は、ナナム方向のハケメにナデを重ねる。		
42	32	PL14	円筒	A・H・F I区	胴部2段 破片			<6.2>	台2		B	橙	A2	8	外面は、タテハケ。内面は、ナデ。		
43	32	PL14	円筒	A・H・F I区	胴部2段 破片			<6.8>	台3		B	橙	A2	8	胴部の直径は、25.0cmに復元される。外面は、タテハケ。内面は、ナナム方向のハケメとナデ。	小径。形象か。	
44	32	PL14	円筒	A・H・F I区	胴部1段 破片			<4.8>			B	橙	A2	10	外面は、タテハケ後ヨコハケを重ねる。内面は、ハケメ。	55-57と同一。	
45	32	PL14	円筒	A・H・F I区	胴部2段 破片			<6.2>	M3	円形	B	明赤釉	A2	10	外面は、タテハケ。内面は、ナデ。突帯は、短い。		
46	32	PL14	円筒	A・H・F I区	胴部2段 破片			<5.0>	M1	円形	B	橙	A2	8	外面は、タテハケ。内面は、ナデ。		
47	32	PL14	円筒	A・H・F I区	胴部2段 破片			<7.2>	M2		B	橙	B2	10	外面は、タテハケ。内面は、ナナムタテハケにナデを重ねる。		
48	32	PL14	円筒	A・H・F I区	胴部2段 破片			<8.9>	M3		A	明赤釉	A2	上16 下7	10	外面は、タテハケ。内面は、ナデ。	ハケメの1具は2種類。
49	32	PL14	円筒	A・H・F I区	胴部2段 破片			<7.4>	台2	円形	B	橙	C1	10	胴部の直径は、22.4cmに復元される。外面は、タテハケ。内面は、ナナムヨコハケにナデを重ねる。	小径。形象か。	
50	32	PL14	円筒	A・H・F I区	胴部1段 破片			<6.4>			B	橙	C3	10	外面は、ナナムタテハケ。内面は、ナデ。		
51	32	PL15	円筒	A・H・F I区	基底部～ 胴部1段 破片			<14.6>	三		B	明赤釉	B2	10	外面は、タテハケ。内面は、ナデ後一部にナナムタテハケ。	基部貼上板の重ねは左が上。	
52	32	PL15	円筒	A・H・F I区	胴部2段 破片			<14.9>	台2		B	に ぶ い 橙	C2	10	外面は、タテハケ。内面は、タテハケ。	内面は還元状態。	
53	32	PL15	円筒	A・H・F I区	胴部2段 破片			<12.0>	M2		B	明赤釉	A2	10	外面は、タテハケ。内面は、ナデ。		
54	32	PL15	円筒	A・H・F I区	胴部2段 破片			<12.5>	M2		B	橙	C2	11	胴部の直径は40.8cmに復元される。外面は、タテハケ。内面は、ナナム方向のハケメにナデを重ねる。	内面は還元状態。	

番号	挿入番号	写真図番号	形状	出土位置	残存	法量				突帯断面形状	透孔形状	船上	色調	焼成	ハケメ	成形・整形の特徴	備考
						口径 cm	底径 cm	器高 cm	段間長 cm								
55	33	PL15	円筒	Aホフ1区	胴部2段破片			<12.2>		M2		B	緑	A2	12	外面は、タテハケ。下段は、ヨコハケを重ねる。内面は、タテ方向のハケメ。	内面に線粒。44・56・57と同一。
56	33	PL15	円筒	Aホフ1区	胴部1段破片			<3.4>				B	緑	A2	10	外面は、ヨコハケ。内面は、ナデ。	44・56・57と同一。
57	33	PL15	円筒	Aホフ1区	胴部2段破片			<5.8>		M2		B	明赤褐色	A2	12	外面は、タテハケ。下段は、ヨコハケを重ねる。内面は、ナナムヨコ方向のハケメ。	44・56・56と同一。
58	33	PL15	円筒	Aホフ2区	胴部2段破片			<7.2>		三		B	明赤褐色	A2	7	外面は、タテハケ。内面は、ナデ。一部にナナム方向のハケメ。	59・70と同一。
59	33	PL15	円筒	Aホフ2区	胴部2段破片			<4.5>		台3	円形	B	緑	A2	7	外面は、タテハケ。内面は、ナデ。	58・70と同一。
60	33	PL15	円筒	Aホフ1区	胴部2段破片			<12.1>		台2		B	緑	A2	9	外面は、タテハケ。内面は、タテ方向のハケメ・ナデ。	
61	33	PL15	円筒	Aホフ1区	胴部2段破片			<10.8>		M1	円形	B	明赤褐色	A2	10	外面は、タテハケ。内面は、ナナム方向のハケメにナデを重ねる。	透孔の周縁部はナデ。79と同一。
62	33	PL15	円筒	Aホフ2区	胴部2段破片			<9.8>		台2	円形	C	緑	A1	14	外面は、タテハケ。内面は、ハケメ後ナデ。	突帯断続ナデ技法。
63	33	PL15	円筒	Aホフ2区	胴部2段破片			<9.8>		台3		B	緑	A2	8	外面は、タテハケ。内面は、ナナム方向のハケメ。	
64	33	PL15	円筒	Aホフ2区	胴部2段破片			<7.6>		台3	円形	B	明赤褐色	A2	上11下9	外面は、タテハケ。内面は、ハケメ後ナデ。	器面に黒色の付着物。
65	33	PL15	円筒	Aホフ1区	胴部2段破片			<8.2>		M3		B	緑	B2	9	外面はナナム、タテハケ。内面は、ナナム方向のハケメ・ナデ。	
66	33	PL15	円筒	Aホフ1区	胴部2段破片			<9.8>		M2	円形	B	明赤褐色	B2	10	外面は、タテハケ。内面は、ナナム方向のハケメ。	
67	33	PL15	円筒	Aホフ1区	胴部2段破片			<8.2>		台1		C	明赤褐色	A2	16	外面は、タテハケ。内面は、ハケメ。	突帯断続ナデ技法か。
68	33	PL15	円筒	Aホフ2区	胴部2段破片			<7.4>		M2	円形	B	緑	B2	10	外面は、タテハケ。内面は、ハケメ。一部にナデを重ねる。	
69	33	PL15	円筒	Aホフ2区	底部破片			<7.8>		台2		B	緑	B2	8	外面は、タテハケ。内面は、ナデ。	低位置突帯か。
70	33	PL15	円筒	Aホフ2区	胴部2段破片			<11.4>		台1	円形	B	明赤褐色	A2	9	外面は、タテハケ。内面は、ハケメをナデ消す。	外面に黒色の付着物。58・59と同一。
71	33	PL15	円筒	Aホフ2区	底部部～胴部第1段破片			<5.9>		台1	A	緑	A2	8	低位置突帯。底面から2.3cmに貼付。外面は、タテハケ。内面は、ナデ・ハケメ。	基部粘土板上に工作板の木目。	
72	33	PL15	円筒	Aホフ2区	胴部2段破片			<7.1>		M1		C	にふい粉	B2	9	外面は、タテハケ。内面は、ハケメをナデ消す。	
73	34	PL16	円筒	Aホフ2区	胴部3段破片			<25.4>		①M1 ②M2		C	明赤褐色	A2	13	外面は、タテハケ。内面は、下段がナナムタテハケ。これより上は、ナナムヨコハケ。	突帯断続ナデ技法。
74	34	PL16	円筒	Aホフ1区	胴部2段破片			<13.4>		台1		B	明赤褐色	A1	7	外面は、タテハケ。内面は、ナナム方向のハケメ。	突帯断続ナデ技法。
75	34	PL16	円筒	不明	胴部2段破片			<10.6>		M2		B	緑	B1	14	外面は、タテハケ。内面は、ナナムヨコ方向のハケメをナデ消す。	
76	34	PL16	円筒	Aホフ3区	胴部1段破片			<7.3>		B		C	3	10	外面は、タテハケ。内面は、ナナムタテハケ。	81と近似。	
77	34	PL16	円筒	Aホフ3区	胴部2段破片			<5.3>		台1		B	緑	A2	14	外面は、タテハケ。内面は、ナナムヨコハケにナデを重ねる。	
78	34	PL16	円筒	Aホフ3区	胴部2段破片			<7.2>		台2	円形	B	緑	B2	10	外面は、タテハケ。内面は、ナナムヨコハケにナデを重ねる。	
79	34	PL16	円筒	Aホフ1区	底部部～胴部第1段破片			<13.4>		台3		B	緑	A2	10	低位置突帯。底面から1.7cmに貼付。外面は、タテハケ。内面は、ナナムタテハケ。	61と同一。
80	34	PL16	円筒	Aホフ2区	底部部～胴部第1段破片			<10.3>		台1		B	緑	A1	10	低位置突帯。底面から2.2cmに貼付。外面は、タテハケ。内面は、ナナム方向のハケメ。	内面に基部成形の工作板の木目。
81	34	PL16	円筒	Aホフ3区	底部部～胴部第1段破片			<11.5>		台1		B	にふい粉 黄粉	C	12	低位置突帯。底面から3.1cmに貼付。外面は、タテハケ。内面は、ナデ。	
82	34	PL16	円筒	Aホフ2区	底部部～胴部第1段破片			<9.5>		三		B	緑	A1	13	低位置突帯。底面から1.6cmに貼付。外面は、タテハケ。内面は、ナデ。	基部粘土板の重ねは左が上。

遺物観察表

番号	挿入番号	写真撮影番号	器形	出土位置	残存	法量				変形断面形状	透孔形状	胎土	色調	焼成	ハケメ	成形・整形の特徴	備考
						口径 cm	底径 cm	器高 cm	段間長 cm								
83	34	PL16	円筒	AH17Ⅱ区	基底部～胴部第1段破片			<10.3>		台3		B	緑	A1	14	内面位置突帯、底面から2.2cmに貼付。外面は、タテハケ。内面は、ナデ。	内面に基部成形の工作板の木目。
84	34	PL16	円筒	AH17Ⅱ区	基底部～胴部第1段破片			<13.5>		M1		B	緑	A1	8	低位置突帯、底面から2.8cmに貼付。下端は、外側に屈曲。変形。外面は、タテハケ。内面は、ナデ。一部ハケメ。	
85	34	PL16	円筒	AH17Ⅱ区	基底部破片			<12.1>				B	緑	A2	11	外面は、タテハケ。内面は、ヨコ・ナメ方向のハケメ。	66と近似。
86	35	PL16	円筒	AH17Ⅱ区	基底部～胴部第1段破片			<13.4>		三		A	緑	A1	8	低位置突帯、底面から4.4cmに貼付。外面は、タテハケ。内面は、ナデ。	
87	35	PL16	円筒	AH17Ⅱ区	基底部～胴部第1段破片			<9.4>		三		A	明赤	C2	10	低位置突帯、底面から1.8cmに貼付。外面は、タテハケ。内面は、ナデ。	
88	35	PL16	円筒	AH17Ⅱ区	基底部～胴部第1段破片			<4.5>		M1		B	緑	C3	-	低位置突帯、底面から2.0cmに貼付。外面は、突帯貼り付け後ヨコナデ。	内面剥離。
89	35	PL16	円筒	AH17Ⅱ区	基底部～胴部第1段破片			<5.8>		M1		B	緑	B2	14	低位置突帯、底面から2.4cmに貼付。外面は、突帯貼り付け後ヨコナデ。内面はナデ・ハケメ。	
90	35	PL16	円筒	AH17Ⅱ区	基底部破片			<4.8>				B	緑	B2	8	外面は、タテハケ。内面は、ナデ。	
91	35	PL16	円筒	BH17Ⅱ区	口縁部破片			<5.7>				B	緑	A2	14	単口縁。外面は、タテハケ。内面は、ヨコ方向のハケメ。内外面とも先端をヨコナデ。	
92	35	PL16	円筒	BH17Ⅱ区	口縁部破片			<6.5>				B	緑	B2	12	単口縁。外面は、タテハケ。内面は、ヨコ方向のハケメ。内外面とも先端をヨコナデ。	
93	35	PL16	円筒	BH17Ⅱ区	口縁部破片			<4.9>				B	緑	A2	-	単口縁。外面は、ナデ。	内面は磨耗。
94	35	PL16	円筒	BH17Ⅱ区	口縁部破片			<5.7>				B	緑	A2	10	貼付口縁。外面の肥厚部分にハケメ。外面は、ヨコハケ。内面は、ヨコ方向のハケメ。	66と近似。
95	35	PL16	円筒	BH17Ⅱ区	口縁部破片			<4.5>				B	緑	A2	8	貼付口縁。肥厚部分は、内外面ともヨコナデ。外面は、タテハケ。内面は、ナメヨコハケ。	96・99と近似・同一か。
96	35	PL17	円筒	BH17Ⅱ区	口縁部破片			<5.3>				B	緑	A2	7	貼付口縁。肥厚部分は、内外面ともヨコナデ。外面は、タテハケ。	
97	35	PL17	円筒	BH17Ⅱ区	口縁部破片			<5.1>				B	明赤	A2	10	貼付口縁。肥厚部分は、内外面ともヨコナデ。外面は、ナデ。内面は、ナメヨコ方向のハケメ。	
98	35	PL17	円筒	BH17Ⅱ区	口縁部破片			<4.5>				B	明赤	A2	10	貼付口縁。肥厚部分は、内外面ともヨコナデ。外面は、ナデ。内面は、ナメヨコ方向のハケメ。	
99	35	PL17	円筒	BH17Ⅱ区	口縁部破片			<3.8>				B	緑	A2	10	貼付口縁。肥厚部分の外面にヨコハケ。内面は、ナデ。	
100	35	PL17	円筒	BH17Ⅱ区	口縁部破片			<8.3>				C	明赤	B1	9	貼付口縁。肥厚部分は、内外面ともヨコナデ。外面は、タテハケ。内面は、ヨコハケ。	外面に線裂。器面に黒色の付着物。
101	35	PL17	円筒	BH17Ⅱ区	口縁部破片			<11.0>				C	明赤	B1	10	貼付口縁。肥厚部分は、内外面ともヨコナデ。外面は、タテハケ。内面は、ヨコハケ。	器面に黒色の付着物。
102	35	PL17	円筒	BH17Ⅱ区	口縁部破片			<7.2>				C	明赤	B1	10	貼付口縁。肥厚部分は、内外面ともヨコナデ。外面は、ナデ。内面は、ナメヨコ方向のハケメ。	外面に線裂。器面に黒色の付着物。
103	35	PL17	円筒	BH17Ⅱ区	口縁部破片			<9.2>				C	明赤	B1	10	貼付口縁。肥厚部分は、内外面ともヨコナデ。外面は、タテハケ。内面は、ヨコハケ。	外面に線裂。器面に黒色の付着物。
104	35	PL17	円筒	BH17Ⅱ区	胴部2段破片			<5.1>		台1	円形	A	緑	C1	10	外面は、タテハケ。内面は、ナデ。	
105	35	PL17	円筒	BH17Ⅱ区	胴部2段破片			<14.7>		台1	円形	B	緑	A2	11	外面は、タテハケ。内面は、ナメヨコ方向のナデ・ハケメ。	110と近似。
106	36	PL17	円筒	BH17Ⅱ区	胴部2段破片			<10.9>		M1		B	緑	A2	11	外面は、タテハケ。上段はこれにヨコハケを重ねる。内面は、ナメ方向のハケメ。	外面下段に線裂。
107	36	PL17	円筒	BH17Ⅱ区	胴部2段破片			<11.8>		台1		C	明赤	A2	12	外面は、タテハケ。内面は、ヨコ方向のハケメにナデを重ねる。	
108	36	PL17	円筒	BH17Ⅱ区	胴部2段破片			<8.0>		M3	円形	B	緑	A2	9	外面は、タテハケ。内面は、ナメ方向のハケメにナデを重ねる。	
109	36	PL17	円筒	BH17Ⅱ区	胴部2段破片			<7.3>		M1		B	緑	A2	12	外面は、タテハケ。内面は、ナメ方向のハケメ。	94と近似。
110	36	PL17	円筒	BH17Ⅱ区	胴部3段1/4			<25.4>	①(6.2) ②(14.1) ③(5.1)	①M1 ②M1	長方形	B	明赤	A2	9	胴部の直径は、34.8cmに復元される。外面は、タテハケ。内面は、ヨコ方向のハケメにナデを重ねる。	外面に黒色の付着物。器時輪郭の器台部か。

番号	挿戻番号	写真図番号	形状	出土位置	残存	法量				変形断面形状	透孔形状	船上	色調	焼成	ハケメ	成形・整形の特徴	備考
						口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	段間長さ (cm)								
111	36	PL17	円筒	CH2F	口縁部へ 銅部1段 1/4	(42.6)		<15.5>	①<3.3> ②12.2	M3		B	明赤 釉	B2	8	貼付口縁。肥厚部分は、内外面ともナデ。外面は、ナメタテハケ。内面は、ナメヨコ方向のハケメにナデを重ねる。	119と同一。
112	36	PL18	円筒	CH2F	銅部2段 1/5			<16.4>	①<9.5> ②<6.9>	台2		B	明赤 釉	A2	10	銅部の直径は、38.2cmで復元される。外面は、ナメタテハケ。内面は、ヨコ方向のハケメにナデを重ねる。	器面に黒色の付着物。123・132・134と同一。
113	36	PL18	円筒	CH2F	口縁部 破片			<6.5>				B	橙	B1	8	貼付口縁。肥厚部分は、内外面ともナデ。外面は、タテハケ。	116・120・129と同一。
114	36	PL18	円筒	CH2F	口縁部 破片			<4.2>				B	橙	B2	-	貼付口縁。肥厚部分は、内外面ともナデ。	
115	36	PL18	円筒	CH2F	口縁部 破片			<3.2>				B	明赤 釉	B2	-	貼付口縁。肥厚部分は、内外面ともナデ。	
116	36	PL18	円筒	CH2F	口縁部 破片			<7.6>				B	橙	B2	8	貼付口縁。肥厚部分は、内外面ともナデ。外面は、タテハケ。内面は、ナメヨコ方向のハケメ。	113・120・129と同一。
117	36	PL18	円筒	CH2F	口縁部 破片			<2.5>				B	橙	B2	不明	貼付口縁。肥厚部分は、内外面ともナデ。	
118	36	PL18	円筒	CH2F	口縁部 破片			<2.3>				B	橙	B2	10	貼付口縁。肥厚部分は、内外面ともヨコ方向のハケメ。	
119	36	PL18	円筒	CH2F	口縁部 破片			<2.7>				B	橙	B2	12	貼付口縁。肥厚部分は、内外面ともナデ。内面は、ヨコ方向のハケメ。	111と同一。
120	36	PL18	円筒	CH2F	銅部2段 破片			<8.7>		台3	円形	B	橙	B3	-	外面は、タテハケと考えられる。	内外面磨耗。113・116・129と同一。
121	36	PL18	円筒	CH2F	銅部1段 破片			<8.4>			円形	B	明赤 釉	A2	10	外面は、タテハケ。内面は、ナメタテハケ方向のハケメにナデを重ねる。	器面に黒色の付着物。126・127・130・131・133と同一（他は記述省略）。
122	37	PL18	円筒	CH2F	銅部3段 破片			<17.2>		①台1 ②台2		A	明赤 釉	A1	10	銅部の直径は36.4cmに復元される。外面は、タテハケ。ナメタテハケ。内面は、ヨコ方向のハケメ。	
123	37	PL18	円筒	CH2F	銅部2段 破片			<12.6>		台1		B	橙	A1	6	外面は、ナメタテハケ。内面は、ナメヨコ方向のハケメ。	器面に黒色の付着物。112・132・134と同一。
124	37	PL18	円筒	CH2F	銅部2段 破片			<7.5>		台1		B	橙	A1	7	外面は、ナメタテハケ。内面は、ナメヨコ方向のハケメ。	
125	37	PL18	円筒	CH2F	銅部2段 破片			<18.4>		M2	円形	B	明赤 釉	A2	8	銅部の直径は36.0cmに復元される。外面は、タテハケ。内面は、ナメタテハケ方向のハケメ。	
126	37	PL18	円筒	CH2F	銅部2段 破片			<12.2>		台2		B	明赤 釉	A2	10	外面は、ナメタテハケ。内面は、ナメヨコ方向のハケメ。	器面に黒色の付着物。
127	37	PL18	円筒	CH2F	銅部3段 破片			<16.7>		①M3 ②M2	円形	B	明赤 釉	A2	10	外面は、タテハケ。内面は、ナメタテハケ方向のハケメにナデを重ねる。	器面に黒色の付着物。
128	37	PL18	円筒	CH2F	銅部1段 破片			<7.4>		M2		B	橙	A2	10	外面は、ナメヨコ方向のハケメ。内面は、ナメヨコ方向のハケメにナデを重ねる。	形象磨耗か。
129	37	PL19	円筒	CH2F	銅部2段 破片			<8.2>		台3		B	橙	B3	7	外面は、タテハケ。内面は、ナデか。	113・116・120と同一。内面は磨耗。
130	37	PL19	円筒	CH2F	銅部2段 破片			<10.0>		M3		C	明赤 釉	A1	10	外面は、タテハケ。内面は、ヨコ方向のハケメ。	外面に黒色の付着物。
131	37	PL19	円筒	CH2F	銅部2段 破片			<9.1>		M1	円形	C	明赤 釉	A1	10	外面は、タテハケ。内面は、ナメタテハケ方向のハケメにナデを重ねる。	外面に黒色の付着物。外面に磨耗。
132	38	PL19	円筒	CH2F	銅部2段 破片			<11.5>		台2	円形	C	明赤 釉	A1	7	透孔の大きさは、タテ4.0cm以上、ヨコ5.0cm。外面は、ナメタテハケ。内面は、ヨコ方向のハケメにナデを重ねる。	外面に黒色の付着物。112・123・134と同一。
133	38	PL19	円筒	CH2F	銅部2段 破片			<6.1>		M3		C	明赤 釉	A2	10	外面は、ナメタテハケ。内面は、ナメヨコ方向のハケメ。	器面に黒色の付着物。
134	38	PL19	円筒	CH2F	銅部3段 破片			<14.6>		①M3 ②台3		C	明赤 釉	A1	10	外面は、タテハケ。内面は、ナメタテハケ方向のハケメに一部ナデを重ねる。	器面に黒色の付着物。112・123・132と同一。
135	38	PL19	円筒	CH2F	銅部2段 破片			<7.4>		M3	円形	B	橙	C3	7	外面は、タテハケ。内面は、ナメタテハケ方向のハケメにナデを重ねる。	
136	38	PL19	円筒	CH2F	銅部2段 破片			<9.7>		M2		B	橙	A2	10	外面は、タテハケ。内面は、タテ方向のハケメ。	内面は磨耗。
137	38	PL19	円筒	CH2F	銅部2段 破片			<8.8>		台1		C	橙	A1	7	外面は、タテハケ。内面は、ナデ。	
138	38	PL19	円筒	CH2F	銅部2段 破片			<9.8>		台1		B	橙	A2	6	外面は、タテハケ。内面は、ナメタテハケ方向のハケメ。	

遺物観察表

番号	挿入図番号	写真図番号	彫形	出土位置	残存	法量				変形断面形状	透孔形状	胎土	色調	焼成	ハケメ	成形・整形の特徴	備考
						口径 cm	底径 cm	器高 cm	段間長 cm								
139	38	PL19	円筒	CH2F	胴部2段破片			<10.2>		台1		B	橙	A2	9	外面は、タテハケ。内面は、ヨココ方向のハケメ。	
140	38	PL19	円筒	CH2F	胴部2段破片			<7.8>		台1		B	橙	A2	8	外面は、タテハケ。内面は、ナナメ方向のハケメにナデを重ねる。	
141	38	PL19	円筒	CH2F	基底部～胴部第1段破片			<11.0>		台1		B	橙	A2	10	底位置突脚、底面から5.8cmに貼付。外面は、タテハケ。内面は、ナナメ方向のハケメ。	基部粘土板の重ねは右が上。
142	38	PL19	円筒	CH2F	基底部～胴部第1段破片			<4.6>		台2		B	橙	A2	6	底位置突脚、底面から4.4cmに貼付。外面は、タテハケ。内面は、ナナメヨココ方向のハケメ。	
143	38	PL19	円筒	CH2F	基底部破片			<4.3>				C	橙	A2	14	外面は、タテハケ。内面は、ナデ。	

形象埴輪

番号	挿入図番号	写真図番号	彫形	出土位置	残存	法量			胎土	色調	焼成	ハケメ	成形・整形の特徴	備考	
						ヨコ(幅) cm	タテ(高さ) cm	その他 cm							
144	39	PL20	人物男子	AH2F1-2区	頭部～腰部			<69.2>		C	明赤褐	A2	12	本文参照。	
145	41	*42	人物男子	AH2F2区、CH2F	頭部			<23.9>		C	橙	A2	-	本文参照。	七Cの接合については注記の誤りか。147と同一か。
146	41	*42	人物女子	AH2F1-2区、CH2F	頭～上着裾部			<34.5>	上衣裾部径 (26.1)	C	明赤褐	A2	16	本文参照。	七Cの接合については注記の誤りか。
147	41	*42	人物男子	AH2F1-2区(CH2F)	頭～腰部			<31.5>		C	橙	A2	11	本文参照。	七Cの接合については注記の誤りか。145と同一か。
148	43	PL22	人物	AH2F1区	髪端部破片	<8.6>			端部径 (17.0)	C	橙	B2	-	薄い粘土板。裏面に剥離痕が見られる。人物男子の振り分け髪の一部と考えられる。下端は扇状に外反する。	外面は磨耗。
149	43	PL22	人物	AH2F2区	頭部髪	<7.0>	<6.8>			C	橙	A2	16	振り分け髪の一部である。左側後頭部になるか。頭部本体に粘土板を貼り足している。内面は、ナデ。	外面は磨耗。
150	43	PL22	人物	AH2F2区	髪端部破片	<4.5>	<2.9>			C	橙	A2	-	薄い粘土板の破片。裏面には本体からの剥離痕が見られる。粘土粒の貼付が見られる。	外面は磨耗。
151	43	PL22	人物	AH2F2区	鼻	<5.0>	<6.0>			C	橙	B2	-	裏面に本体からの剥離痕を嗅す粘土地であることから顔面から剥離した鼻と考えた。鼻孔の表現は見られない。他の人物よりも大型であることから盾持ちの一部分と考えられる。	
152	43	PL22	人物	AH2F2区	耳環破片	<3.6>	<3.8>			C	橙	B2	-	直径1.5cm×1.8cmの粘土紐を輪にしている。直径7.0cmの円環状を呈していたと考えられる。裏面に本体からの剥離痕が見られる。	
153	43	PL22	人物	AH2F2区	右側顔面～耳部破片	<9.1>	<14.1>			C	橙	B2	12	横断面が弧状を呈し、小孔の周縁に粘土紐が貼付されていることから人物の顔面と耳の部分と考えた。外面の残存部下端に粘土が付着していたり、ナデが施されているなど検討を要する点も残される。外面は、タテハケ。内面は、ヨココ方向のハケメをナナメヨココ方向にナデ消している。	
154	43	PL22	人物	AH2F1-2区	頭部破片	<7.6>	<6.8>			C	明赤褐	A2	-	残存上位には、首飾りの痕跡が見られる。下位には、幅1.4cmの粘土帯とこれに重ねられた直径1.0cmの円形粘土粒が認められる。2連の首飾りが表現されていたものと考えられる。	
155	43	PL22	人物	AH2F1区	頭部破片	<4.4>	<4.6>			C	明赤褐	A2	-	細い粘土粒と直径1.0cmの円形粘土粒が見られる。紐に通したあるいは、紐から垂下した小玉状の首飾りを表現したものと考えられる。	内面は剥離。
156	43	PL22	人物	AH2F2区	肩部破片	<9.1>	<7.0>			C	橙	A2	-	頸部から肩部の破片と考えられる。幅1.5cmの断面長方形の粘土帯が貼付される。	左肩か。
157	43	PL22	人物	AH2F2区	手破片	<4.1>	<2.7>	厚1.0		C	橙	B2	-	同一方向に直径0.5cmほどの粘土紐を並べ、この上に薄い粘土板を重ねている。手甲を表現したものと考えられ、縁部に粘土紐が通る。	彩色が施されているか。
158	43	PL22	人物か	AH2F2区	破片	<7.0>	<6.2>			C	橙	A2	-	粘土を重ねて段差が作られる。縁部に刺突文が列をなしている。内外面ともナデを施す。	馬の一部の可能性も考えられる。
159	43	PL22	人物か	AH2F2区	破片	<8.6>	<7.6>			C	橙	A2	-	横断面は、弧状を呈する。ヨココ方向の細い突帯より上位には粘土板を薄く重ねた方向に甲羅な段差が作られる。縁部に沿って刺突文が列状に配される。幅0.7cmの粘土紐が輪状に貼付されている。人物の上着の重ねか。	馬の一部の可能性も考えられる。

番号	挿図番号	写真図番号	器形	出土位置	残存	法量			胎土	色調	焼成	ハケメ	成形・整形の特徴	備考
						ヨコ幅 (cm)	タテ (高さ) (cm)	その他						
160	43	PL22	人物か	上着腹部破片か	-	(4.3)	胴部径 (29.6)	C	明赤褐	A2	14	下方に大きく外反して延びる。端部は、平坦面をなす。外面は、タテ方向のハケメ、端部にヨコナデを重ねる。内面は、ヨコ方向に荒いナデを施してある。	蓋の笠部の一部である可能性も考えられるか。	
161	43	PL22	人物	甲冑装破片	(13.2)	(13.5)	-	明赤褐	B2	-	2	横断面は、楕円形を呈していたか。下幅6.5cmの丸状をした付属品が装着されている。楕状粘土で複製し、これに楕状の粘土板を被せている。これは別に幅1.5cmの粘土板がナメ方向に貼付されている。外面には、タテ方向にへら掻き沈線が引かれ、短冊状を呈する。下端には、ヨコナメヨコ方向の沈線が見られ文様構成に変化が見られる。内外面とも丁寧なナデを施す。甲冑表現の人物胴部で残るいは胡ろこを装着したものの可能性が考えられる。		
162	43	PL22	人物か	甲冑表現の破片	(5.1)	(5.7)	-	明赤褐	A2	12	12	交互するへら掻き沈線が見られる。外面は、タテハケ。内面は、ナデ。		
163	43	PL22	人物か	破片	(9.1)	(5.7)	胴部径 (15.4)	明赤褐	B2	14	14	小径の筒状を呈する。外面は、タテハケ。内面は、ナデ、人物の脚部か。	馬の足部の可能性もあるか。	
164	43	PL22	人物か	爪先	(6.5)	(6.0)	-	明赤褐	B2	-	-	粘土層を三日月状に形成している。本体からの剥離面が見られる。裏面はナデか。	外面は磨耗。	
165	44	PL22	人物か	左腕部破片	(19.6)	(15.6)	幅(9.8)	明赤褐	A2	-	2	腕部の左側前面と考えられる。刃長17.2cm、ヨコ幅3.0cm、高さ1.5cmの小刀あるいはノコを装束している。鞘には、刀側に刺突角が見られる革を縫った表装がなされている。へら掻きによる山形文、斜格子目文が施されている。内面丁寧なナデしている。	外面は磨耗。	
166	44	PL22	人物	腕部基部破片か	(12.5)	(13.1)	奥 (10.5)	明赤褐	B2	20	20	腕部の破片である。横断面は楕円形を呈している。外面には、突帯部の高い突帯が貼付され腕部であることが強調されている。直径4.1cmの円形の透孔が残存する箇の面には、水平方向の突帯が貼付されている。外面の調整は透孔の面では、タテ方向のハケメをナメ消している。もう一面には彫線に施したヨコ方向のハケメが残されている。内面は、タテ方向のナデである。	家形植輪の基台部の可能性も考えられる。	
167	44	PL23	人物か	破片	(15.8)	(13.5)	-	明赤褐	A1	14	14	横断面は大きな円形。あるいは長円形を呈していたか。外面には水平方向に幅2.0cm、低平で幅面M字状の突帯を貼付。これに幅1.2～1.5cmの段面台形の突帯を交差させている。交点には直径2.0cm、ボタン状の粘土板を重ねて飾りとしている。		
168	44	PL23	動物島	頭部残存	(3.5)	(4.4)	直径2.5	明赤褐	A2	-	-	小型品。頭部は中央で丁寧に成形されているが嘴は欠損している。直径は約0.5cmの楕状工具を埋付することにより表現されている。器面は丁寧にナデが施されているが、右側面・後面にはタテ方向のへら掻き沈線が施されている。		
169	45	PL23	盾	不明 右上端破片	(7.6)	(7.7)	-	明赤褐	B2	-	1	盾面上辺突出部の破片である。外縁に沿ってへら掻き沈線が施され、その内側に彫線文が配されていたと考えられる。	胎土は精選されている。赤色塗彩があったか。	
170	45	-	器財	破片	(4.6)	(11.2)	-	明赤褐	A2	14	14	タテ方向の彫線文が見られることから盾面の一部と考えられる。ヨコ方向のへら掻き沈線、赤色塗彩が見られる。外面は、ハケメ。内面は、ナデ。	172・173と同一か。	
171	45	PL22	盾	破片	(8.6)	(6.3)	-	明赤褐	A2	14	14	円筒部分の破片と考えられる。平行する2本のへら掻き沈線と赤色塗彩が認められる。外面は、タテハケ。内面は、ナメタテハケ。	甲冑表現の可能性もある。	
172	45	-	器財	胴部破片	(5.6)	(3.1)	-	明赤褐	A2	16	16	盾面の小破片か。ナメ方向にへら掻き沈線と赤色塗彩が施されている。外面は、ハケメ。内面は、ナデ。	170・173と同一か。	
173	45	PL23	器財	器財	-	(36.4)	突帯下の径 (26.0)	明赤褐	A1	17	17	円筒状を呈する。断面M字状の突帯を境に本体と基部に分けられる。上位は盾面と考えられる。突帯と平行するへら掻き沈線を基底とする彫線文が配されていると考えられる。沈線に重なるように赤色塗彩が施されている。図右端にはタテ方向の彫線文が見られ、盾面のしれ状部分が剥離した痕跡の可能性が高い。基部は盾面よりも直径が大きくなる。側面には小径の透孔が配されている。側面の調整は、本体・基部ともに外面にタテハケ、内面にタテ方向のナデを施す。	七Cの結合については注記の誤りか。基部は還元状態を呈し、色調は灰色。所持人の可能性も考えられる。170・172と同一か。	
174	45	PL23	器財	胴部破片2段	-	(18.7)	突帯下の径 (24.8)	明赤褐	A2	14	14	断面台形の突帯で2分されている。下段下端にはヨコ方向のナデが施されているようにも見えるが判然としな。下段にはへら掻き沈線による彫線文(波頭状の文様)が5単位認められる。外面にはタテハケを施す。内面は、粘土層の接合部を残すがナメタテ方向のナデが施されている。	円筒植輪の可能性もある。194と同一か。	
175	45	PL23	器財	胴部破片1段	(11.6)	(4.3)	-	明赤褐	A1	12	12	へら掻き沈線による彫線文(波頭状の文様)の一部が残存する。	円筒植輪の可能性もあるか。	
176	45	PL23	器財	胴部破片1段	(2.6)	(4.2)	-	明赤褐	A2	12	12	へら掻き沈線による波頭状の文様が見られる。外面は、ハケメ後ナデ。内面は、ナデ。	円筒植輪の可能性もあるか。	
177	45	PL23	器財	胴部破片1段	(4.0)	(3.2)	-	明赤褐	A2	12	12	へら掻き沈線3条が見られる。外面は、ハケメにナデを重ねているか。内面、はナデ。	円筒植輪の可能性もあるか。	
178	46	PL23	器財	胴部破片3/4	(90.0)	胴部最大径 (26.7)	-	明赤褐	A2	16	16	本文参照。	180・181と同一か。	

遺物観察表

番号	挿図番号	写真図版番号	器形	出土位置	残存	法量			胎土	色調	焼成	ハケメ	成形・整形の特徴	備考	
						ヨコ (幅) cm	タテ (高さ) cm	その他 cm							
179	46	PL24	器財基部	A19F1区	基部破片	(8.0)	(6.8)		C	明赤相	B2	20	円筒状を呈する。断面台形の突帯が貼付される。外面は、ヨコハケ。内面は、ヨコ方向のナデ。	内面に基部貼上板作成時の本目痕を残す。剣交文状に工具を刺した痕跡がある。	
180	46	PL24	器財基部	B19F1区	銅部破片	(2.5)	(5.8)		C	明赤相	A2	14	長方形を呈すると思われる透孔の一部が残存する。外面は、ナナムハケ。内面は、ナデ。	外面は磨耗。178・181と同一か。	
181	46	PL24	器財基部	B19F1区	銅部破片	(3.8)	(5.4)		C	明赤相	A2	不明		長方形を呈すると思われる透孔の一部が残存する。外面は、ナナムハケ。内面は、ナデ。	外面は磨耗。178・180と同一か。
182	46	PL24	器財基部	A19F2区	基部最下段破片	(13.8)	(12.6)		C	明赤相	A2	12	横断面は楕円形、あるいは楕円形を呈していたか。底面真下に断面M字状の突帯を貼付する。外面は、タテハケ。内面は、タテ方向のハケメをナデ消す。	内面に基部貼上板作成時の本目痕を残す。	
183	47	PL24	不明	A19F2区	端部破片	(3.3)	(3.7)		C	橙	A2	14	本体に貼付されていた粘土板。一边に端部が有る。外面は、ハケメの上にへら描き沈線による山形文を施す。		
184	47	PL24	不明	A19F1区	破片	(3.8)	(4.2)		C	明赤相	A2	-	厚さ0.7cmの粘土板。裏面には、本体からの剥離層が見られる。器面は、丁寧にナデを施した後へら描き沈線による山形文が描かれている。	天地不明。人物付属品か。	
185	47	PL24	不明	A19F2区	破片	(3.4)	(4.4)		C	橙	B2	-	厚さ0.7cmの粘土板。裏面には本体からの剥離層が見られる。	天地不明。人物付属品か。	
186	47	PL24	不明	A19F2区	破片	(5.3)	(5.6)		C	明赤相	A2	8	厚さ0.6cmの粘土板。本体から剥離したもの。外面にへら描き沈線が見られる。	天地不明。人物付属品か。	
187	47	PL24	不明	A19F2区	破片	(4.3)	(5.4)		C	橙	A2	-	厚さ0.6cmの粘土板。本体から剥離したもの。外面にへら描き沈線が見られる。	天地不明。人物付属品か。	
188	47	PL24	不明	A19F2区	破片	(3.9)	(4.7)		C	橙	B2	-	裏面には本体からの剥離層が見られる。縁部は弧状を呈する。外面にはハケメ後へら描き沈線を重ねている。	天地不明。人物付属品か。	
189	47	PL24	不明	A19F1区	破片	(6.6)	(6.6)		C	橙	B2	16	下方に向かって屈曲して外反する本体に薄く粘土板を貼り足している。端部をナデ消す粘土の重ねを残している。内外面ともナデ。	191と同一か。	
190	47	PL24	不明	A19F2区	胴体部破片か	(7.6)	(14.8)	胴体径(15.6)	C	橙	A2	18	小径の高状を呈する。外面はナナムタテハケメ後ナデを重ねる。内面はナデ。人物の脚部あるいは馬の足部か。		
191	47	PL24	不明	A19F1区	破片	(9.3)	(5.6)		C	橙	B2	-	下方に向かって屈曲して外反する本体に薄く粘土板を貼り足している。端部をナデ消す粘土の重ねを残している。内外面ともナデ。	189と同一か。	
192	47	PL24	不明	A19F3区	破片	(8.7)	(9.4)		C	橙	B2	10	外面はわずかに弧をなす。幅2.0cmの粘土部2条貼付されている。器内の厚さから馬の頭部破片の可能性が考えられるが部位を特定することができない。		
193	47	PL24	不明	A19F1区	破片	(5.6)	(5.7)		C	明赤相	B2	14	外面に幅広い剥離層が見られる。これに接してへら描き沈線が残されている。内面は、ナデ。		
194	47	PL24	不明	A19F1区	銅部破片1段	(7.2)	(8.1)		C	橙	A2	12	断面台形の突帯により2分される。上段にはへら描き沈線による断面文の一部が見られる。外面は、タテハケ後突帯を貼付。周辺にヨコナデを加えている。内面は、ナデ。	174と同一か。	
195	47	PL24	不明	B19F1区	破片	(4.2)	(5.2)		C	橙	A2	-	太いへら描き沈線による山形文が見られる。	器財か。外面は磨耗。	
196	47	PL24	不明	C19F1区	端部破片	(8.0)	(2.7)		C	橙	B2	-	外面に剣交文が見られる。内外面とも粗雑なナデ。		

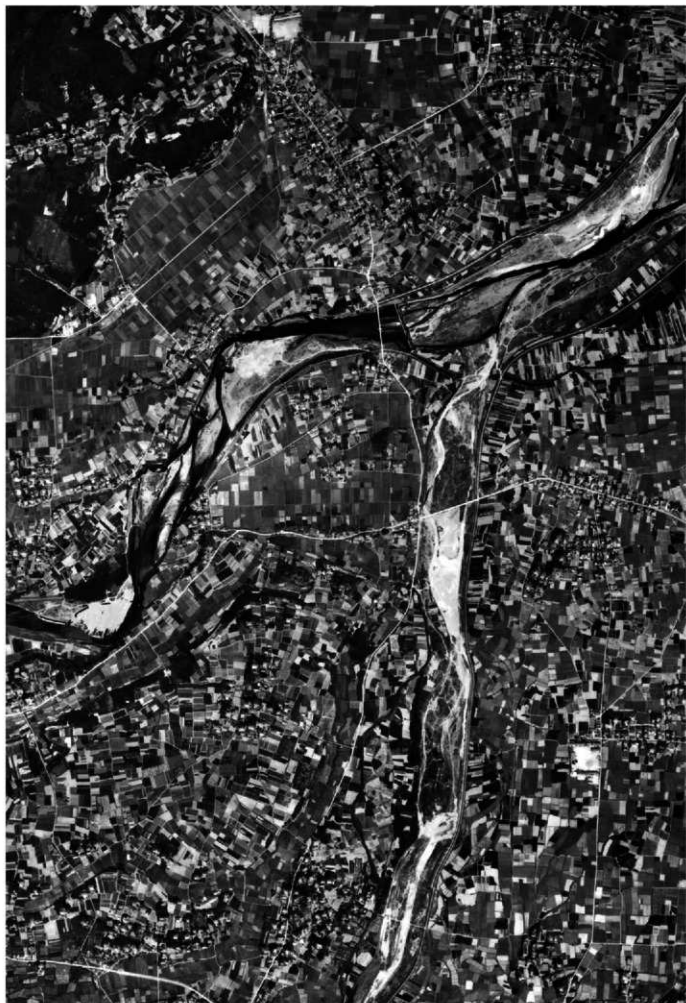
遺構外出土の遺物

番号	挿図番号	写真図版番号	種別	器形	出土位置	残存	法量			胎土	色調	焼成	成形・整形の特徴	備考
							口径 cm	底径 cm	器高 cm					
202	48	PL24	土師器	高杯	A19F1-2区	杯部破片	(19.8)	-	(4.7)	細砂少量	にぶい橙	酸化	内外面ともヨコナデ後タテ方向の磨きを重なる。	
203	48	PL24	土師器	小型垂か	B19F1区	胴部破片	-	-	(6.4)	粗砂少量	橙	酸化	縁割を呈する。外面は、ヨコ方向のヘラケズリ・ナデ。内面は、ナデ。	
204	48	PL24	土師器	壺	A19F1区	口縁部破片	-	-	(5.5)	粗砂少量	にぶい橙	酸化	くの字状に屈曲して立ち上がる。器面は、ナデ。	
205	48	PL24	土師器	垂か	A19F1区	口縁部破片	-	-	(1.9)	細砂少量	にぶい橙	酸化	先端は小さく屈曲し受け口状に立ち上がる。外面は、タテ方向の磨き。	
206	48	PL24	土師器	甕	不明	口縁部から胴部上位破片	(20.6)	-	(5.3)	細砂少量	橙	酸化	口の字状を呈する。口縁部は、ヨコナデ。胴部外面は、ヘラケズリ。	
207	48	PL24	土師器	台付甕	B19F1区	台部破片	-	(12.6)	(7.4)	細砂少量	明赤相	酸化	胴部は、内側にかえりを有する。外面は、丁寧なナデ。内面は、ナデ。	
208	48	PL24	軟質陶器	内耳瀬か	A19F1区	口縁部破片	(33.8)	-	(5.5)	細砂少量	にぶい黄橙	還元	内外面ともヨコナデ。	



# 写 真 图 版





1 七興山古墳の位置と周辺の地形（空中から）



1 七興山古墳と周辺の古墳（空中から）



1 七興山古墳全景（空中から）



1 七興山古墳の位置と周辺の地形（北から）



2 調査時の七興山古墳（南東から）



1 調査時の七興山古墳（北から）



2 調査時の七興山古墳（南西から）



1 後門部墳丘上からAトレンチを望む（西から）



2 Aトレンチ中堤から外堀検出状況（西から）



3 Aトレンチ中堤から外堀検出状況（東から）



4 Aトレンチ外堀土層断面（南東から）



5 Aトレンチ掘削地点の現況（2010年、西から）





1 Aトレンチ外堀から外堀検出状況(南東から)



2 Aトレンチ外堀土層断面(南西から)



3 Aトレンチ外堀土層断面(南西から)



4 Aトレンチ外堀以東掘削状況(南西から)



5 Aトレンチ外堀以東(3区)掘削状況(東から)



6 Aトレンチ外堀以東(3区)土層断面(南西から)



7 Aトレンチ外堀以東(3区)掘削状況(南西から)



8 Aトレンチ外堀以東(4区)土層断面(南西から)

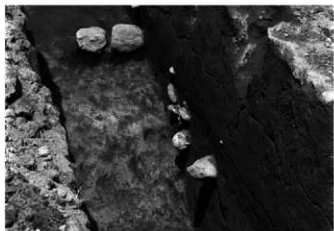


1 後門部墳丘上からBトレンチを望む（北西から）

2 Bトレンチ掘削地点の現況（2010年、北西から）



3 Bトレンチ外堀土層断面（南東から）



4 Bトレンチ外堀から中堀検出状況（南東から）



5 Bトレンチ外堀外縁検出状況（北西から）



6 Bトレンチ堀輸出状況（東から）



1 南側くびれ部墳丘上からCトレンチを望む（北から）



2 Cトレンチ中堤外縁石積検出状況（南から）



3 Cトレンチ石積検出状況（南から）



4 Cトレンチ外堀検出状況（北東から）



5 Cトレンチ外堀外縁検出状況（北から）



6 Cトレンチ掘削地点の現況（2010年、北西から）



1 1A・1Bトレンチ全景（北から）



2 1Bトレンチ全景（北から）



3 2Aトレンチ遺物出土状況（南から）



4 2Aトレンチ埴輪列・墓石検出状況（南東から）



5 2Bトレンチ全景（南から）



1 4Bトレンチ遺物出土状況(北から)



2 12トレンチ全景(南から)



3 12トレンチ中堤(西から)



4 8トレンチ全景(北西から)



5 8トレンチ中堤・墓石(北西から)



6 8トレンチ外堤検出状況(南東から)



円筒埴輪 (1)



8



10



11



13



12



14



9



15



16



17



18



20



19



21



22



23



24



25



26



26



27



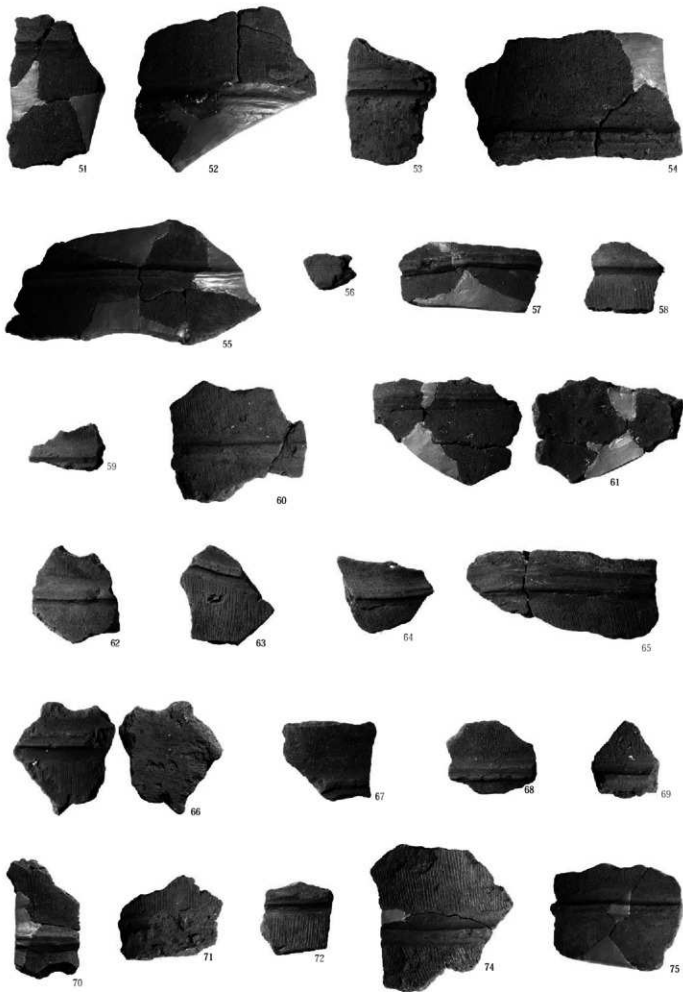
28

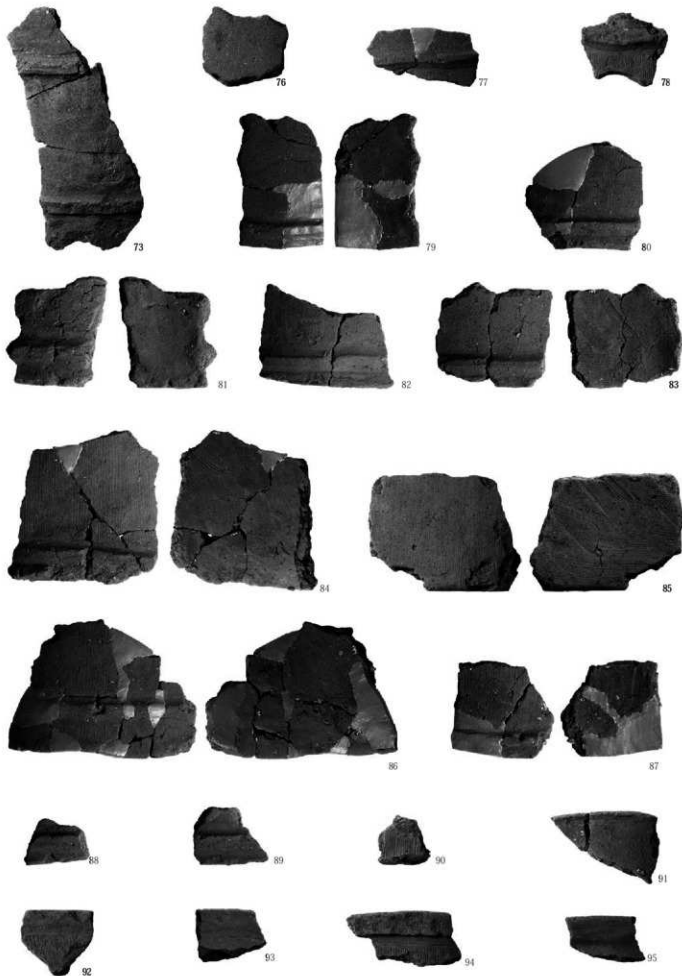


29













112



113



116



120



121



114



115



117



118



119



122



123



124



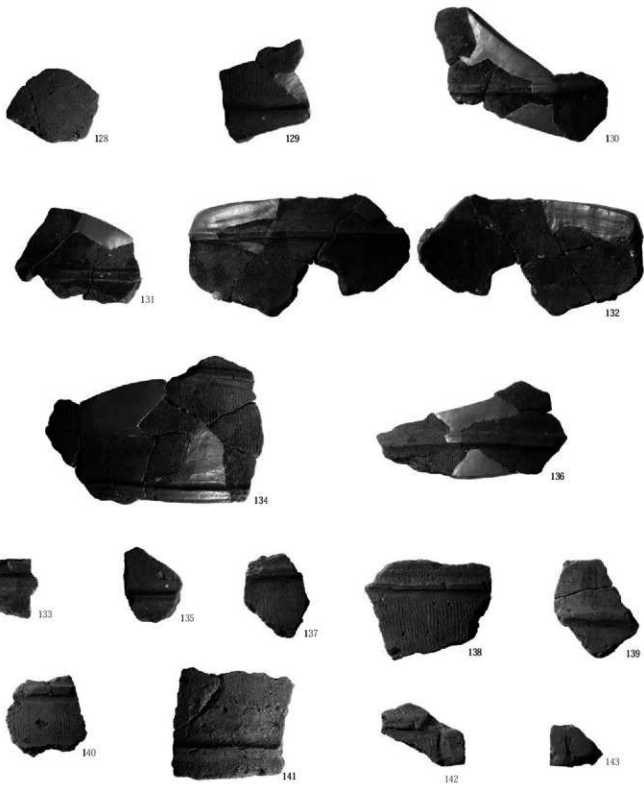
125



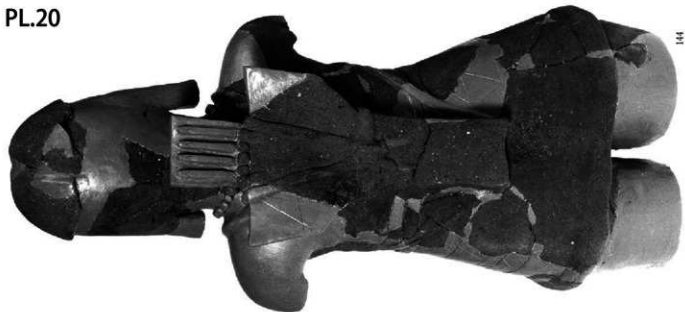
127



126



円筒埴輪 (8)



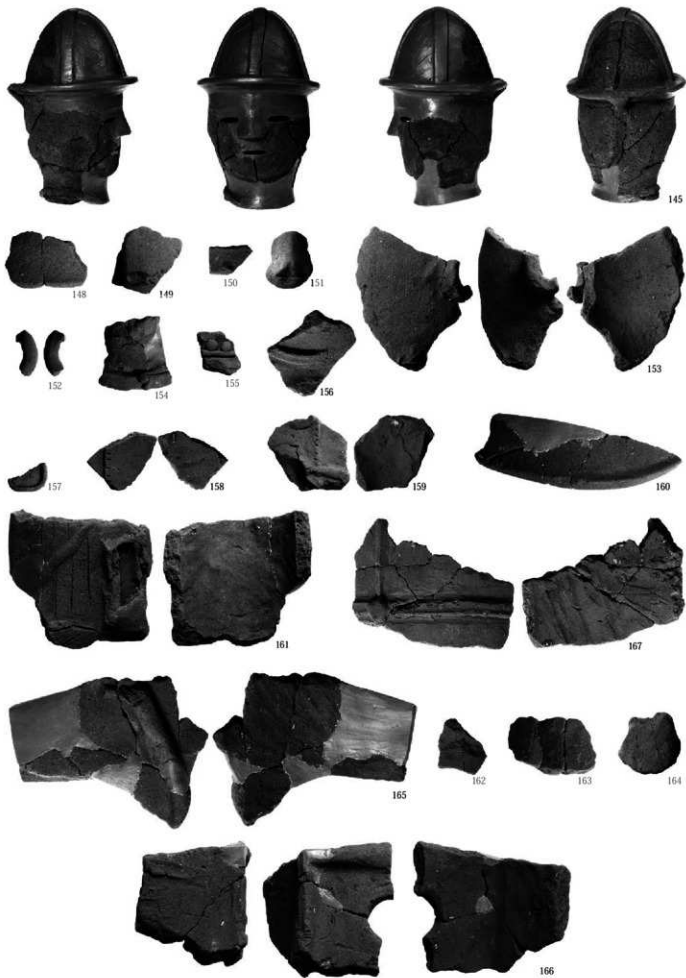


146



147

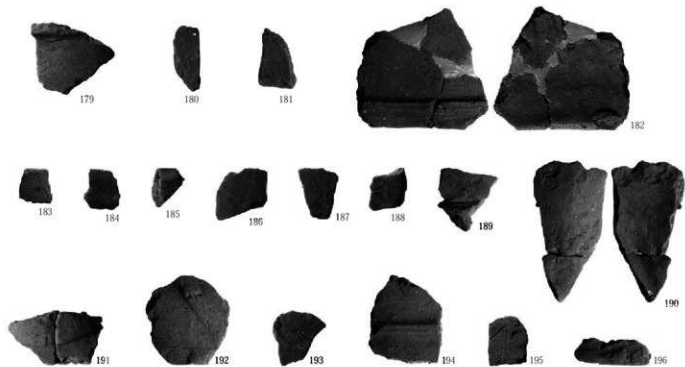




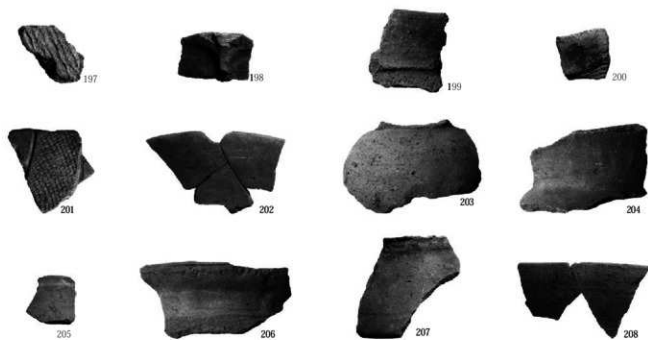




形象填輪 (4)



形象埴輪 (5)



道構外出土の遺物

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第511集

## 七 興 山 古 墳

平成22年度緊急雇用創出基金事業に係わる埋蔵文化財発掘調査報告書

---

平成22(2010)年12月13日 印刷

平成22(2010)年12月20日 発行

編集・発行／財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県渋川市北碓町下箱田784番地の2

電話 (0279)52-2511(代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷／上毎印刷工業株式会社

---